

自循論入門

株式会社カレントカラー



目的とゴール

● 目的

- ・ 一回限りの人生を生きる意味を最大化する
- ・ イマココに在ることに驚愕し感謝する

● 本資料のゴール

- ・ 私から世界までの成立機序を知る
- ・ イマココに全てがあることを理解する

目次

- 1. 自から世界へ
- 2. 形式・相・様式
- 3. 宇宙
- まとめ

＜参考資料＞

- 自循論と日常概念
- 自循論とプロセス思考

自循論の動機

私とは何か？

なぜ、私は
生まれもしなかった代わりに、現実生まれ
膨大な喜怒哀楽を一回限り経験した後
いつか必ず死んで、未来永劫の無に還るのだろう

自循論とは

**「私」を
敷き詰めることで
「世界」の全てを
説明し尽くす哲学**

世界から私を説明するのではなく
私から世界を説明し返す

自循論の説明順序

「私」から出発し、世界を説明し尽くす

- 手元にある手堅い「**私**」から出発する
 - ・ 「私」から「**自**」という概念を抽出し、
 - ・ 「自」から**形式**（時間・空間・論理）を導く
 - ・ 「自」から**相**（物理・生命・精神）を組み立てる
 - ・ 「自」の限界として**様式**（存在・実在・現実）を画定する
 - ・ 「私」から「**知性**」という性質を抽出し、
知性のイマココと**宇宙**の表裏一体性を論証する
 - ・ **知性原理存在論**
 - ・ **有限原理**
 - ・ **哲学的な一致の定理**
 - ・ 世界が有限な**自己完結圏**であることに腹落ちする
- 「**私**」と「**世界**」が現実中存在すること自体は
否定不可能かつ理解不可能な大奇跡であり、そこに疑いなく
驚愕と**感謝**を捧げることが**絶対の幸福**であることを結論する
 - ・ 人生のゴールは、人生を幸福に生きるプロセス（今）である

自循論の目的

- 世界は有限の**自己完結圏**である
- 世界内の知的観測者である私たちは、遠い将来説明し得ることを全て説明し終えるだろう
- たとえ世界内の全てを説明し終えたとしても、いや、説明し終えて自己完結したその時にこそ、なぜこの世界が（元々無い代わりに、この姿で）現に存在しているのか、という問いが絶望的なほど**説明不可能な問い**として残る
- その時にこそ、私たちが現に存在しているこの**大奇跡への驚愕と感謝**が絶対となる
- その驚愕と感謝こそが、誰にも奪えない人生における**絶対の幸福**である
- 人生のゴールとは、いま直ぐ、そしてずっとこの絶対の幸福を感じ続けることである

1. 自から世界へ

世界はどのように組み上がっているのか

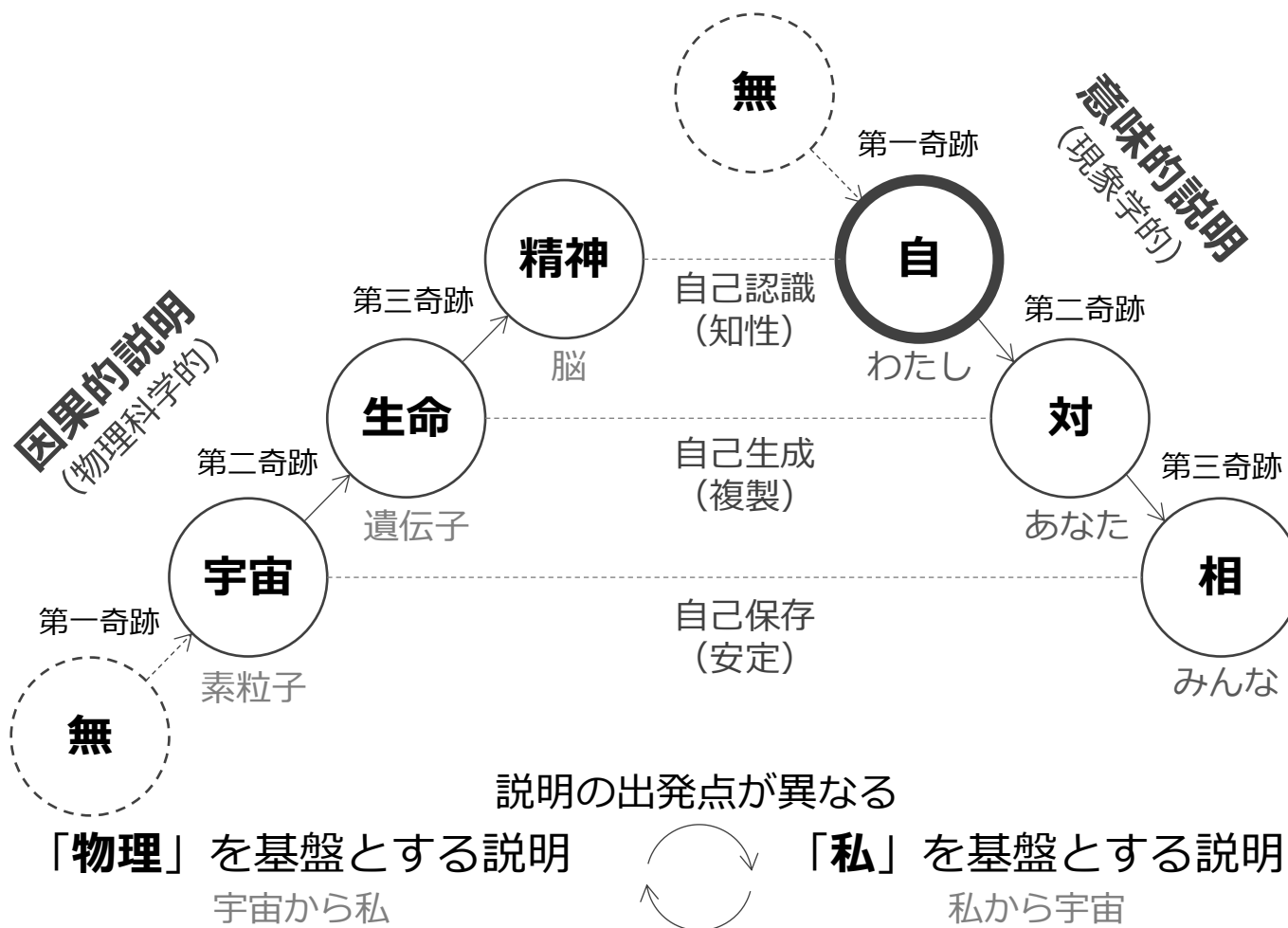
- ◆ 無→自→対→相
- ◆ 説明の輪

本節で学ぶこと

- ◆ 「自」から出発して
世界を組み上げる手順を概観する
- ◆ 世界は、無→自→対→相 という機序で
創られることを学ぶ
- ◆ 世界は有限な自己完結圏であり、
大きな説明の輪であることを知る



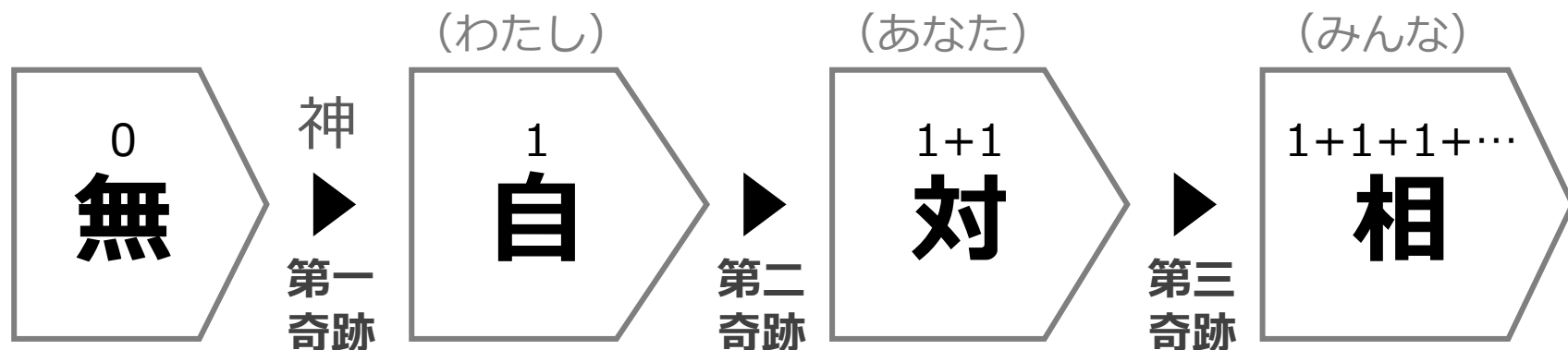
因果的説明 と 意味的説明 の 説明の輪



世界

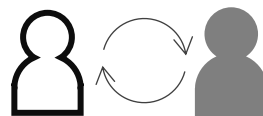
無 自 対 相

世界は 無→自→対→相 の機序で組み上がる



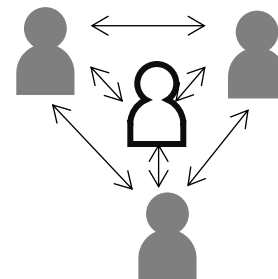
心

時間性



愛

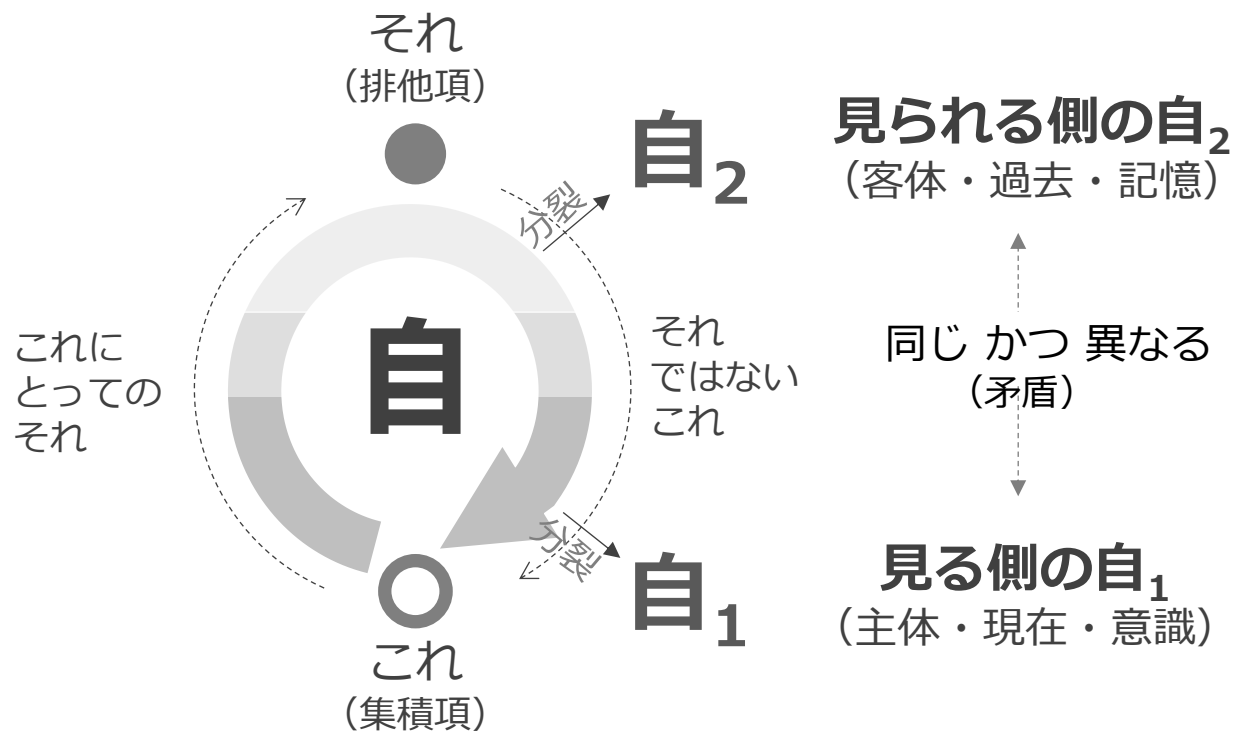
空間性



場

完結性

自は意味の素粒子、世界最小の矛盾

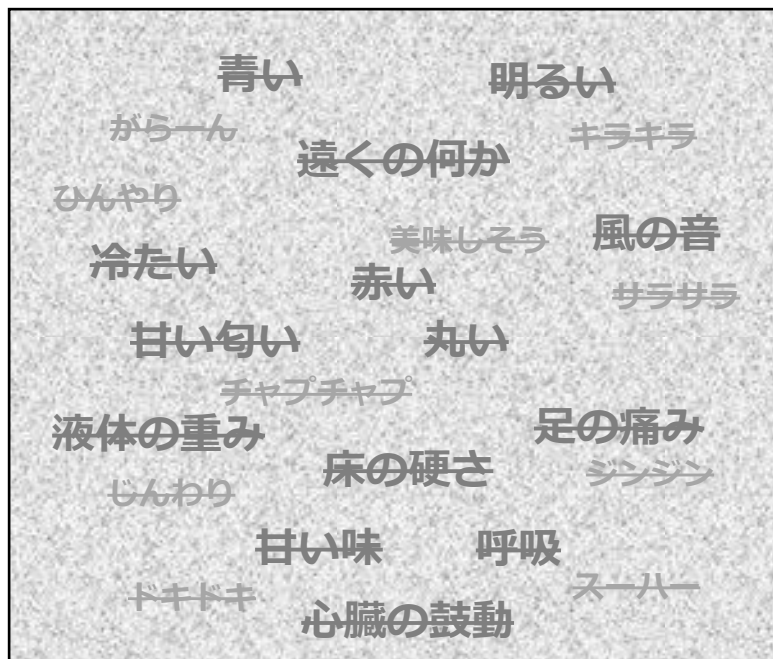
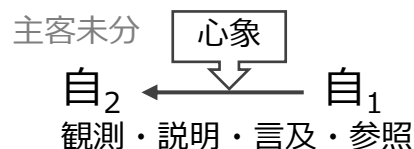


主体と客体が分化する前の
本質的に矛盾を抱えた、閉じた説明の輪であり
無から理由なく生じた、あらゆる概念の基底・根本・根源

自 | 私と世界の形成

無 自 対 相

私とは 世界を見る中心に定位された何者か



「私」形成以前の意識は、言語にならない
感覚情報（知覚）の束が去来するだけ

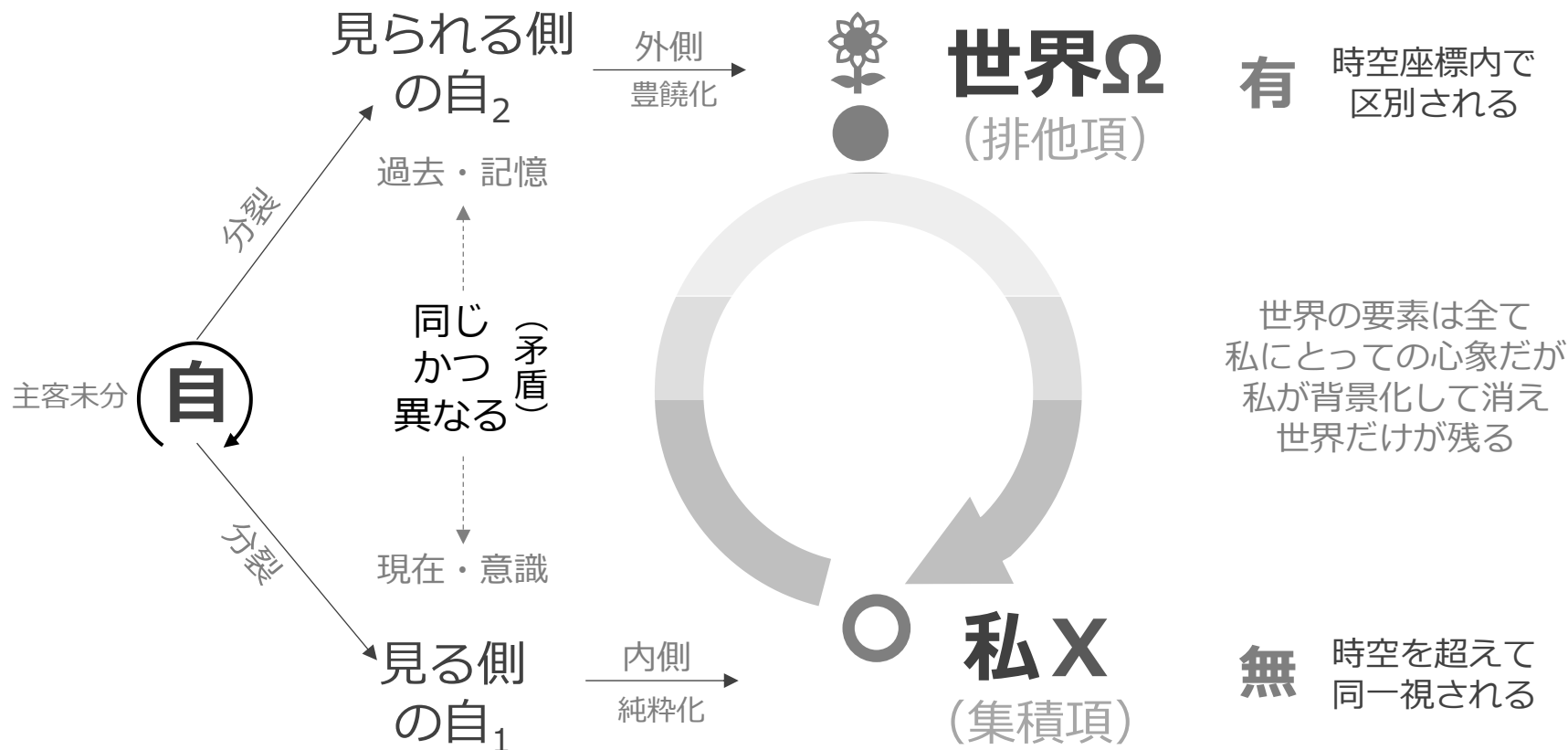


「私」とは、この絵の手前にいて、この絵を見ていて
頭蓋骨の内側に**定位**しているように感じられる何者か

自 | 私と世界の形成

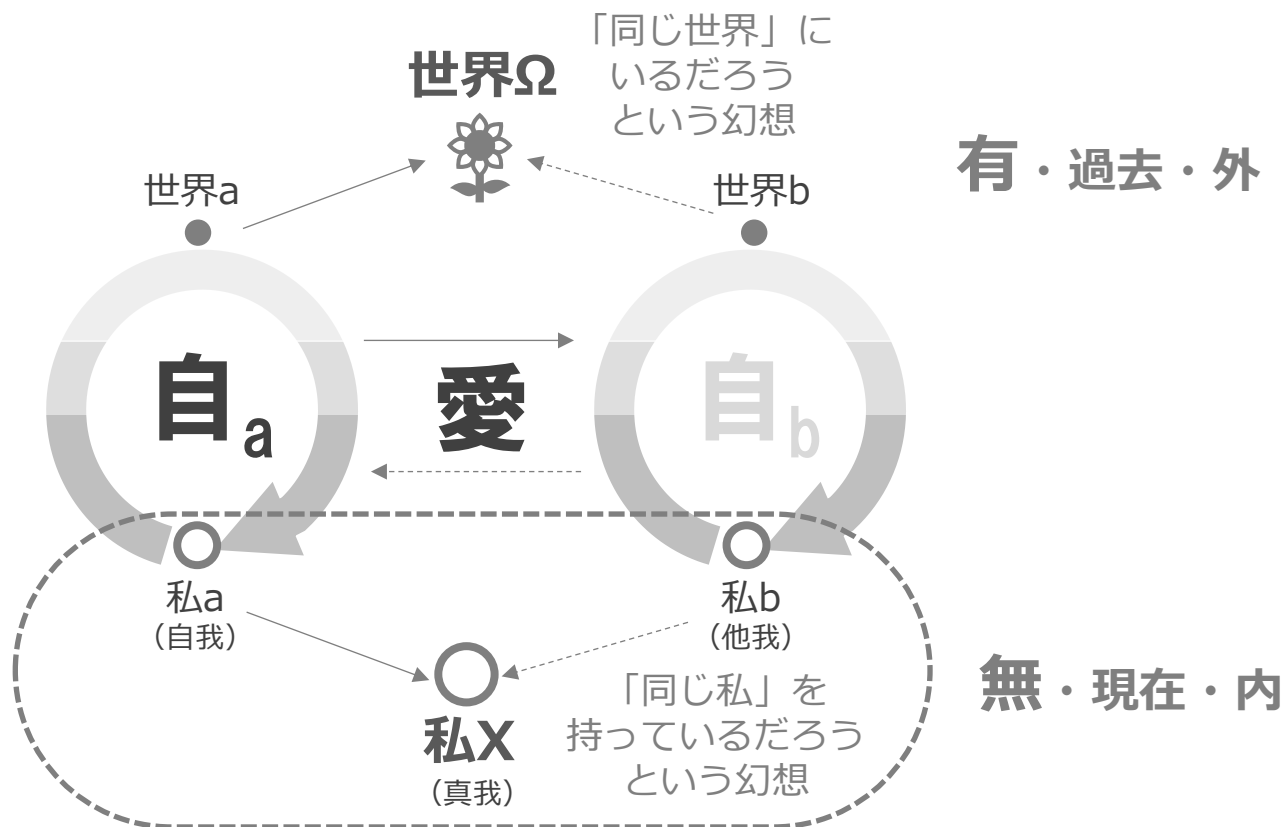
無 自 対 相

自の循環運動が、私と世界を形成する



自己無矛盾性が破綻するまで継続するサイクル
(継続の原動力は矛盾の修復)

一対の「自」が偶然対等に結びつく「愛」

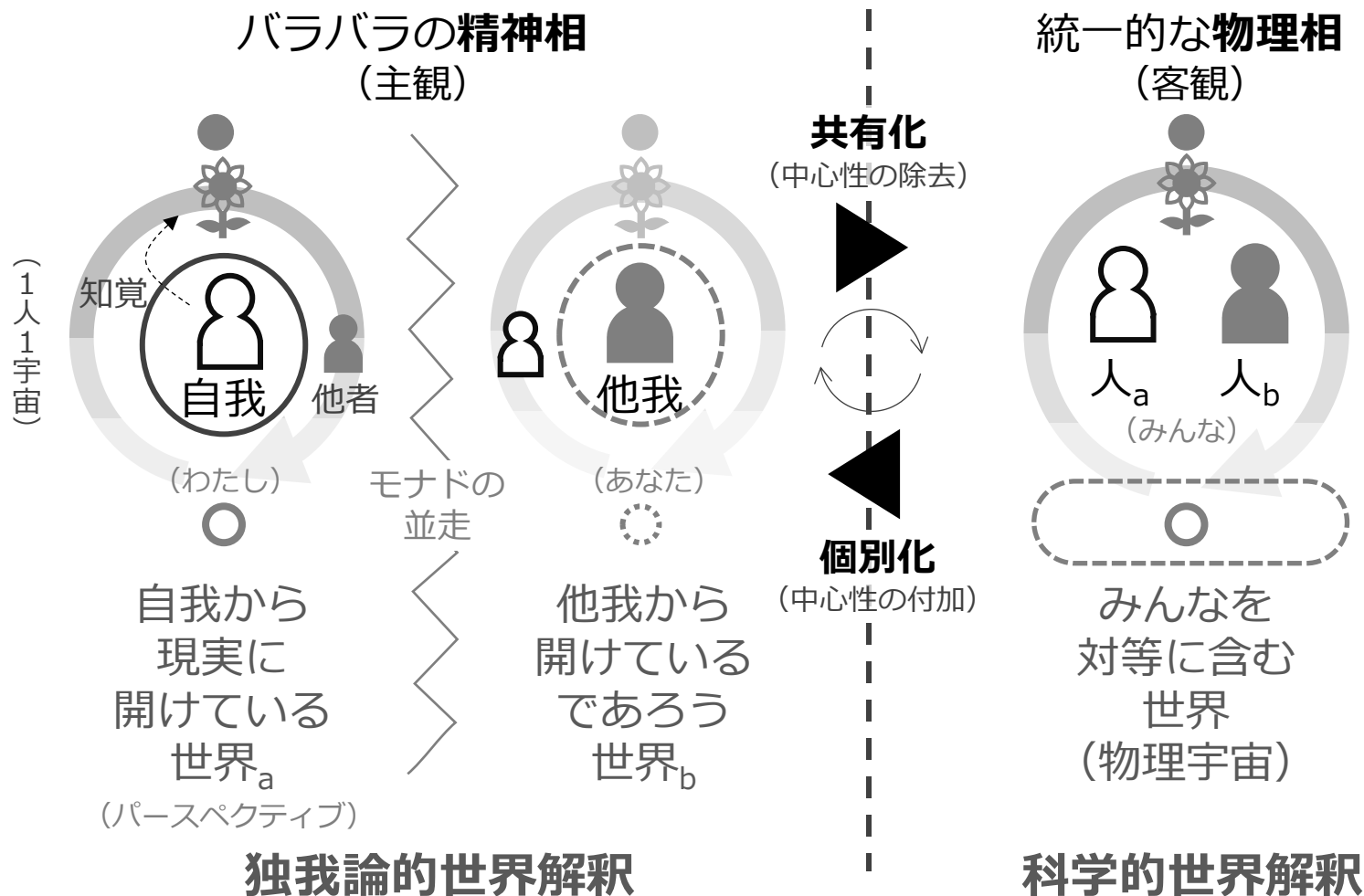


それぞれの「私X」を中核とする個別の自己無矛盾な独我論的世界が
同じ「客観的な世界Ω」を無矛盾に共有しているという幻想の成立
(たまたま並走していた「自」が、「対」として結びつく)

対 | 客観の形成

無 自 対 相

自我が開いた世界から 包み込み返される



位相空間とは 存在 = 主観 + 客観 の構成

精神相（主観的精神世界）

位相空間の開集合族 $\mathcal{O}$ による定義
 $X = \text{集合}$ 、 $\mathcal{O}$ を $\mathfrak{P}(X)$ の部分集合
 開集合 $O \in \mathcal{O}$ は知覚・観測した情報

(O1) $\emptyset, X \in \mathcal{O}$

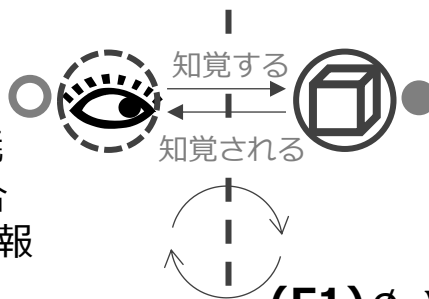
無も世界も知覚の対象
 知覚は世界を包摂する活動

(O2) $\forall O_1, \forall O_2 \in \mathcal{O} : O_1 \cap O_2 \in \mathcal{O}$

有限の主観過程からは完全な客観には到達できない
 経験科学や知覚には本質的限界がある

(O3) $\forall \{O_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda} \subset \mathcal{O} : \bigcup_{\lambda \in \Lambda} O_\lambda \in \mathcal{O}$

主観的对象の和集合もまた主観的对象
 精神活動は無際限
 「私」は境界に包まれ、境界上にはいない



物理相（客観物理宇宙）

位相空間の閉集合族 $\mathcal{F}$ による定義
 $X = \text{集合}$ 、 $\mathcal{F}$ を $\mathfrak{P}(X)$ の部分集合
 閉集合 $F \in \mathcal{F}$ は知覚・観測された情報

(F1) $\emptyset, X \in \mathcal{F}$

真空も宇宙も観測の対象
 科学は宇宙を包摂する活動

(F2) $\forall F_1, \forall F_2 \in \mathcal{F} : F_1 \cap F_2 \in \mathcal{F}$

有限の客観過程からは完全な主観には到達できない
 現象的意識やクオリアや中心性は語り得ない

(F3) $\forall \{F_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda} \subset \mathcal{F} : \bigcap_{\lambda \in \Lambda} F_\lambda \in \mathcal{F}$

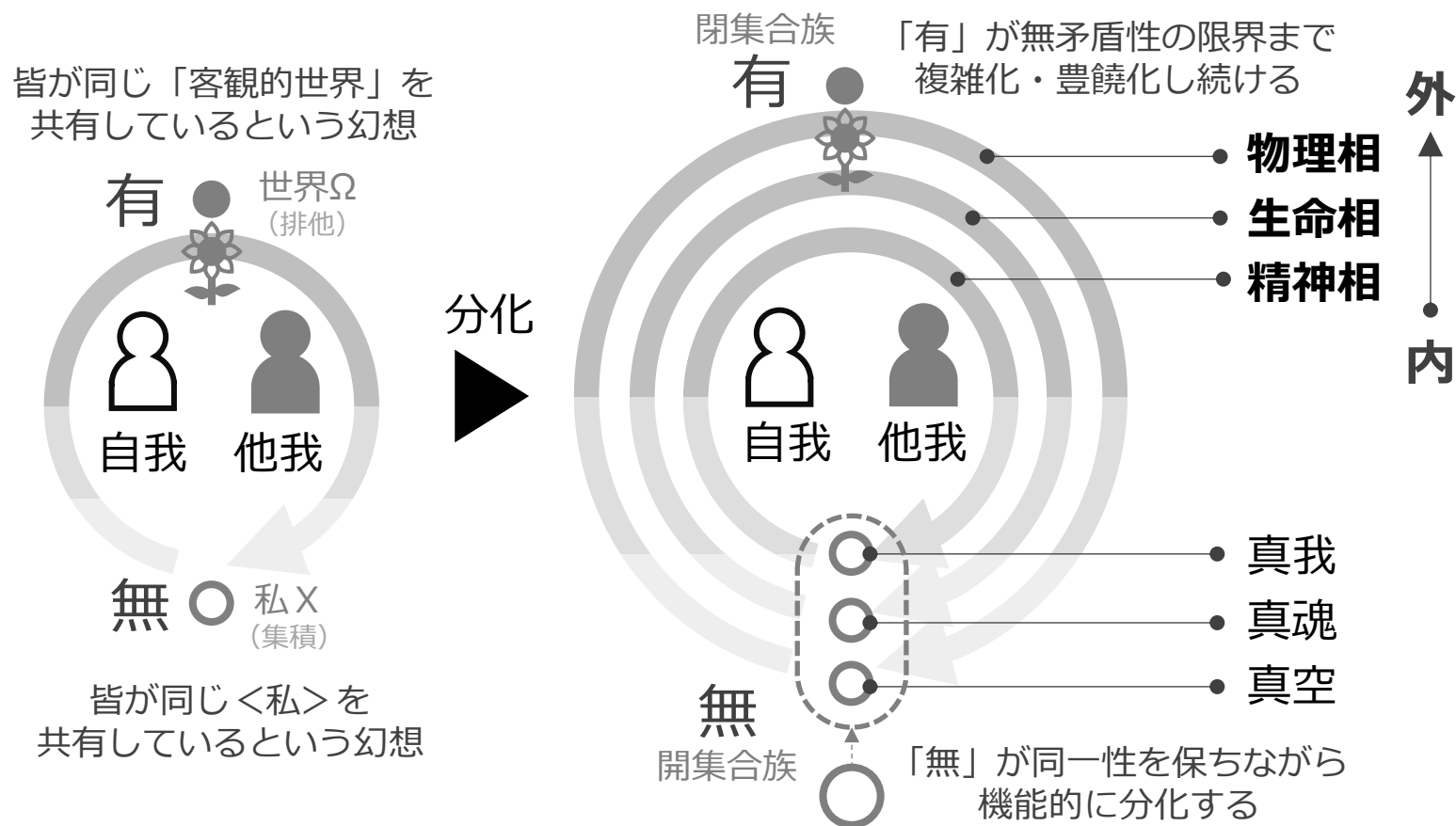
客観的对象の共通部分・抽象概念もまた客観的对象
 科学活動は普遍的で論理的に一貫している
 境界も含めて観測対象

- 位相空間 = 存在圏は「知覚される側（存在者）」と「知覚する側（現存在）」の構造
- 非位相的部分集合（開集合でも閉集合でもない情報の集まり）は「存在」を構成しない
- 開集合は近傍から出発する人間の認識と相性が良い、閉集合は全体構造の把握に使われる

相 | 第三奇跡

無 自 対 相

「無」の分化によって「相」が形成される

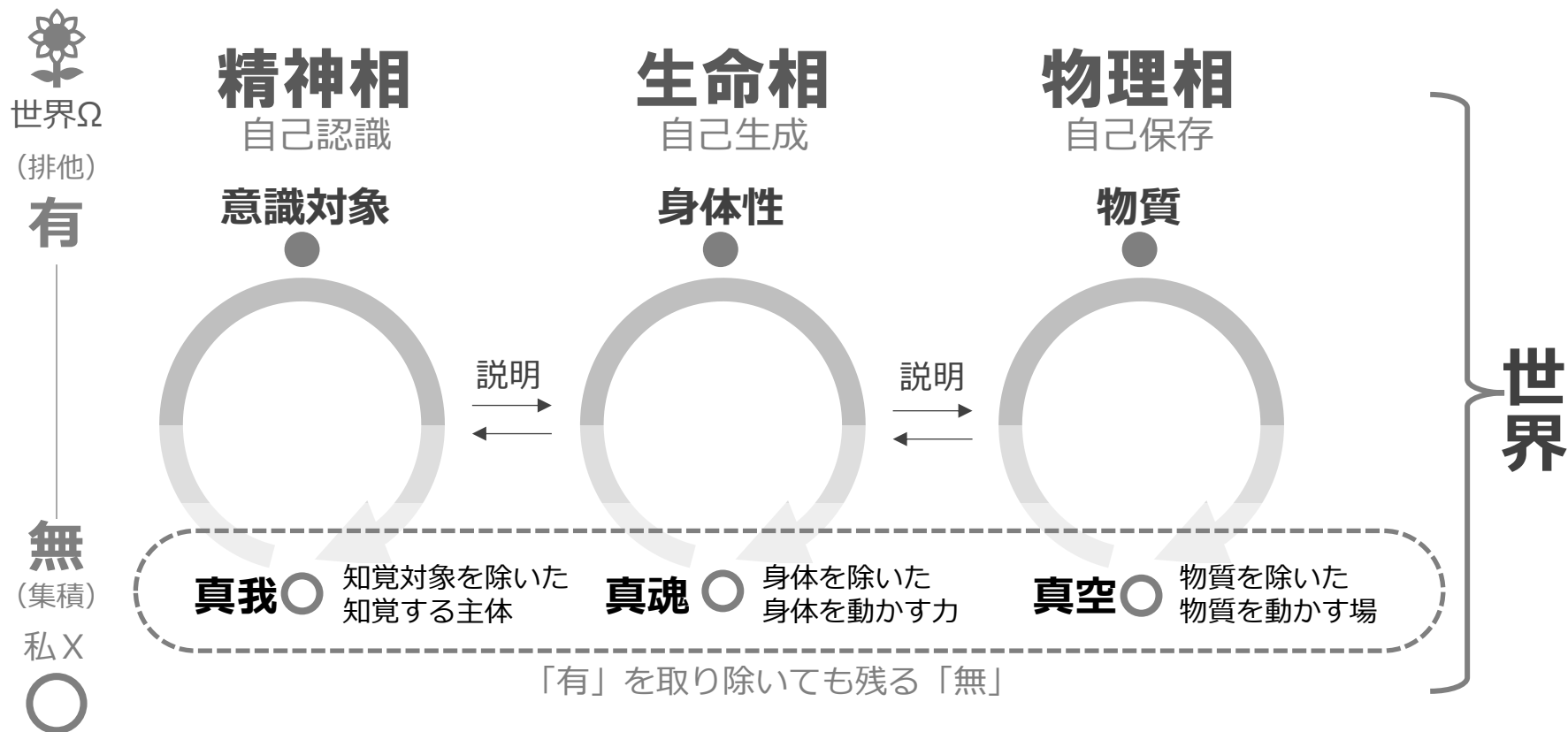


- ・「無」を接着剤として「有」を束ね「相」を成す
- ・「無」を接着剤として「相」を束ね「世界」を成す

相 | 世界の形成

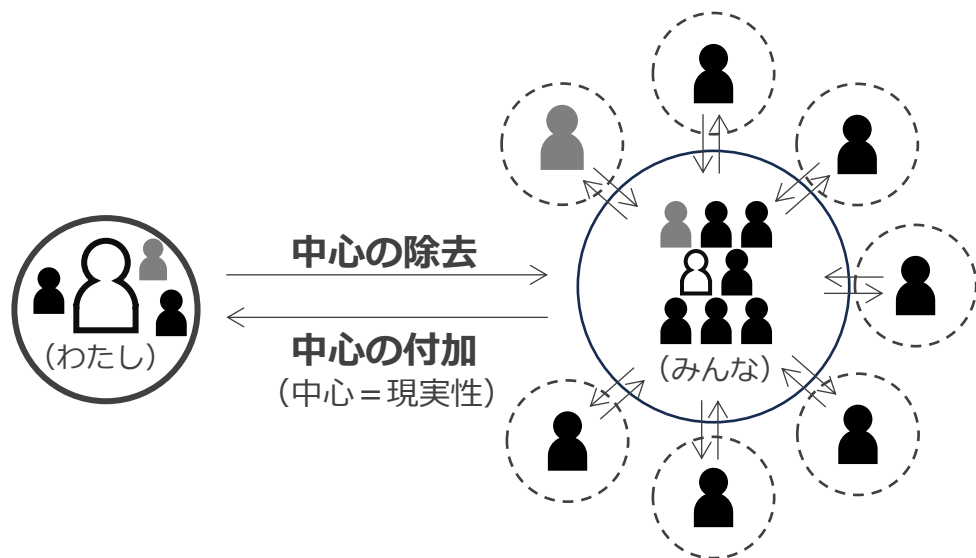
無 自 対 相

複数の「相」が 無を基盤に結び付く「世界」



- 「対象を全て取り除いた残り = 無」を、
「私 (= 我・魂・空)」が引き受けて、相が接着され、世界が完成する

複数の主観が 各々の中心を除去して場を共有



精神世界 (主観)

「わたし」の精神世界内に
派生的副産物として
「みんな」がいる
という現実

物理宇宙 (客観)

物理宇宙の中に
「わたし」も「みんな」も
平等にいる
という構想

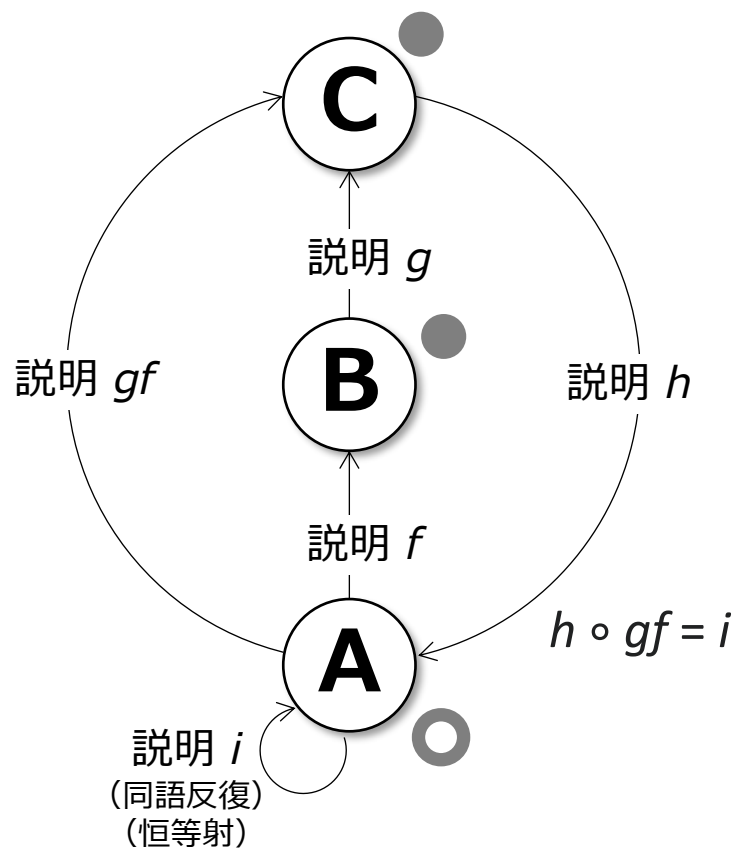
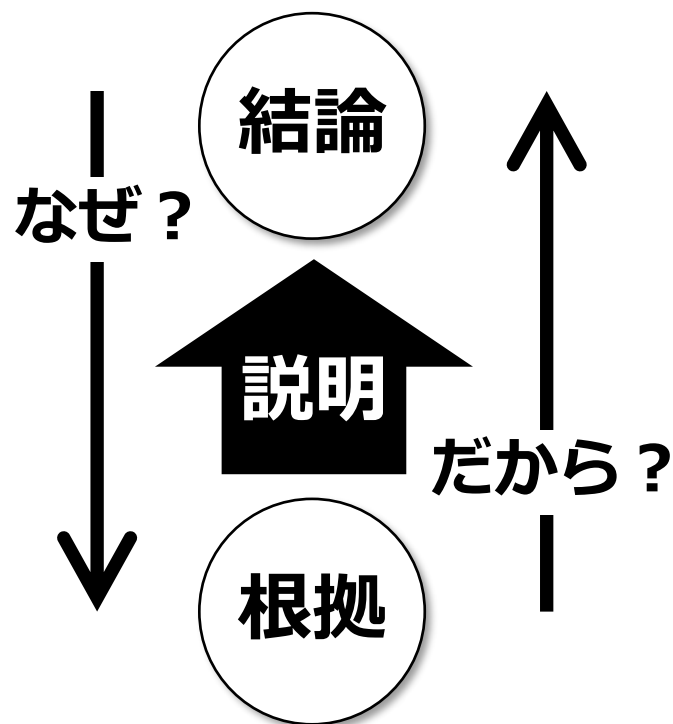
- 無限に存在する精神世界から
中心を除去して構想される
物理宇宙の全てが
無限に存在して良い
- 「わたし」が構想する**物理宇宙**と
「あなた」が構想する**物理宇宙**が
たまたま一致していると
解釈しても良い
- 同じ**物理宇宙**の中に
「わたし」と「あなた」がいる
と解釈しても良い

- 無限は気前が良い。構想される物理宇宙は、無限にあって良いし、
いくつかの物理宇宙が、たまたま一致していても良い

説明の輪

無 自 対 相

根拠から結論を妥当に導き合う 閉じた集合



世界とは 循環論法

ミュンヒハウゼンのトリレンマ	自循環論の立場
Aの正しさの根拠Bが必要、 Bの正しさの根拠Cが必要、 と根拠を求めると 無限背進 になる	有意味な世界は 有限 なので、 無限背進にはならない (※結果として 循環論法 になる)
無限背進を止めるために 何かを 根拠無しに正しい とすると 正しさは保証されなくなる	無根拠に正しいことは無い (※無根拠な信念は思考停止の表れ) (※世界 = 循環論法 の総体が存在する ことだけ*1は、現実には正しい)
$A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow \dots \rightarrow A$ と 根拠がどこかでAに戻ってくるなら 循環論法 となり無効	循環論法 (説明の輪) の総体こそが 世界の実体であり、その大きさや 複雑さが、世界の豊かさである (※豊かさの追求に終わりはない)

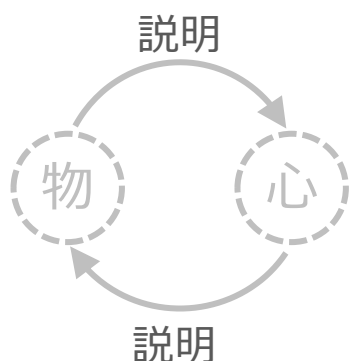


*1 世界内の物事の全説明は循環するが、その説明の輪の全体が存在する理由だけは
循環の外側にあり、＜奇跡＞であり、超越的である

説明の輪



世界に実体は無い あるのは説明の輪だけ

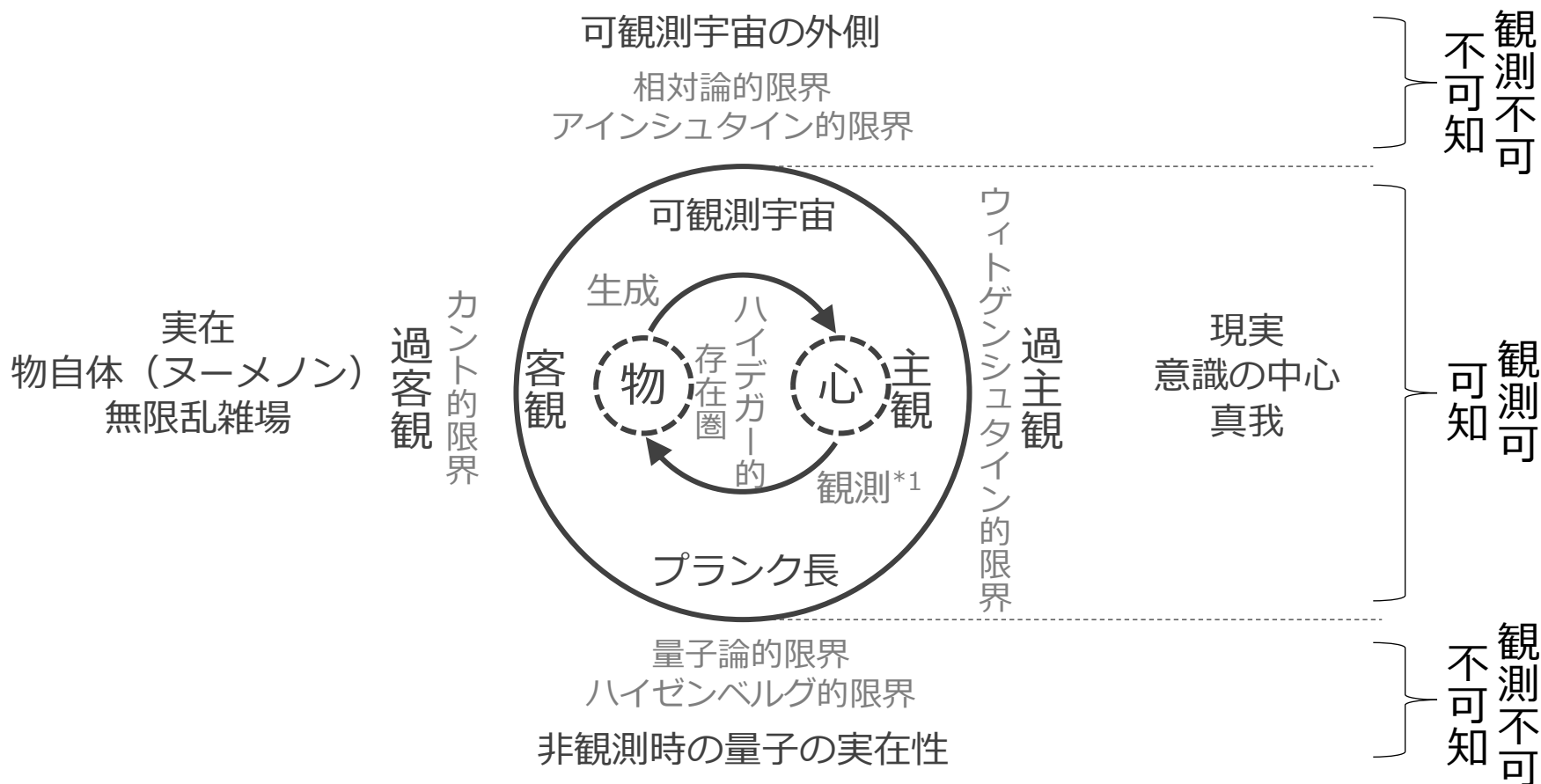
唯物論	唯心論	情報二相理論	自循論
			
実体は 物	実体は 心	実体は 情報 物や心は 情報の見え方	実体は 不可知 物や心の間の 説明の輪のみ
物理主義	現象主義	性質二元論	非実体三元論
一元論	一元論	中立一元論	零元論

現象的意識を除外した物理から現象的意識を説明するという思考は原理的に成功し得ない
物理が意識を説明し、意識が物理を説明する（お互いを底から支えあっている）だけ

説明の輪



存在とは 観測者と被観測者の 説明の輪



*1 「観測」は、非存在圏の实在に光を当てて観測可・可知にする能動的行為。
波束の崩壊・デコヒーレンスが起こる瞬間であり、意識の対象になる瞬間でもある。

説明の輪

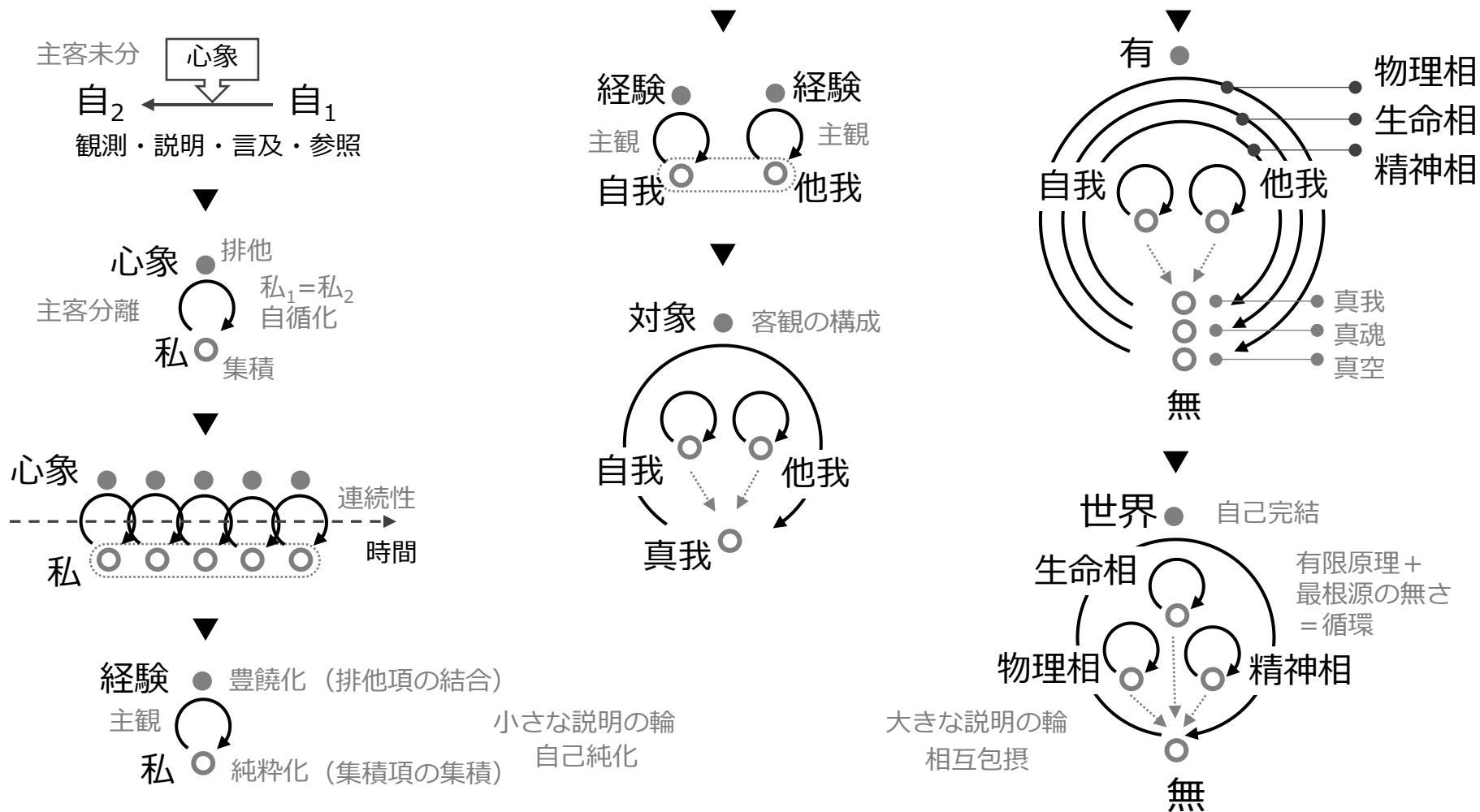
無

自

対

相

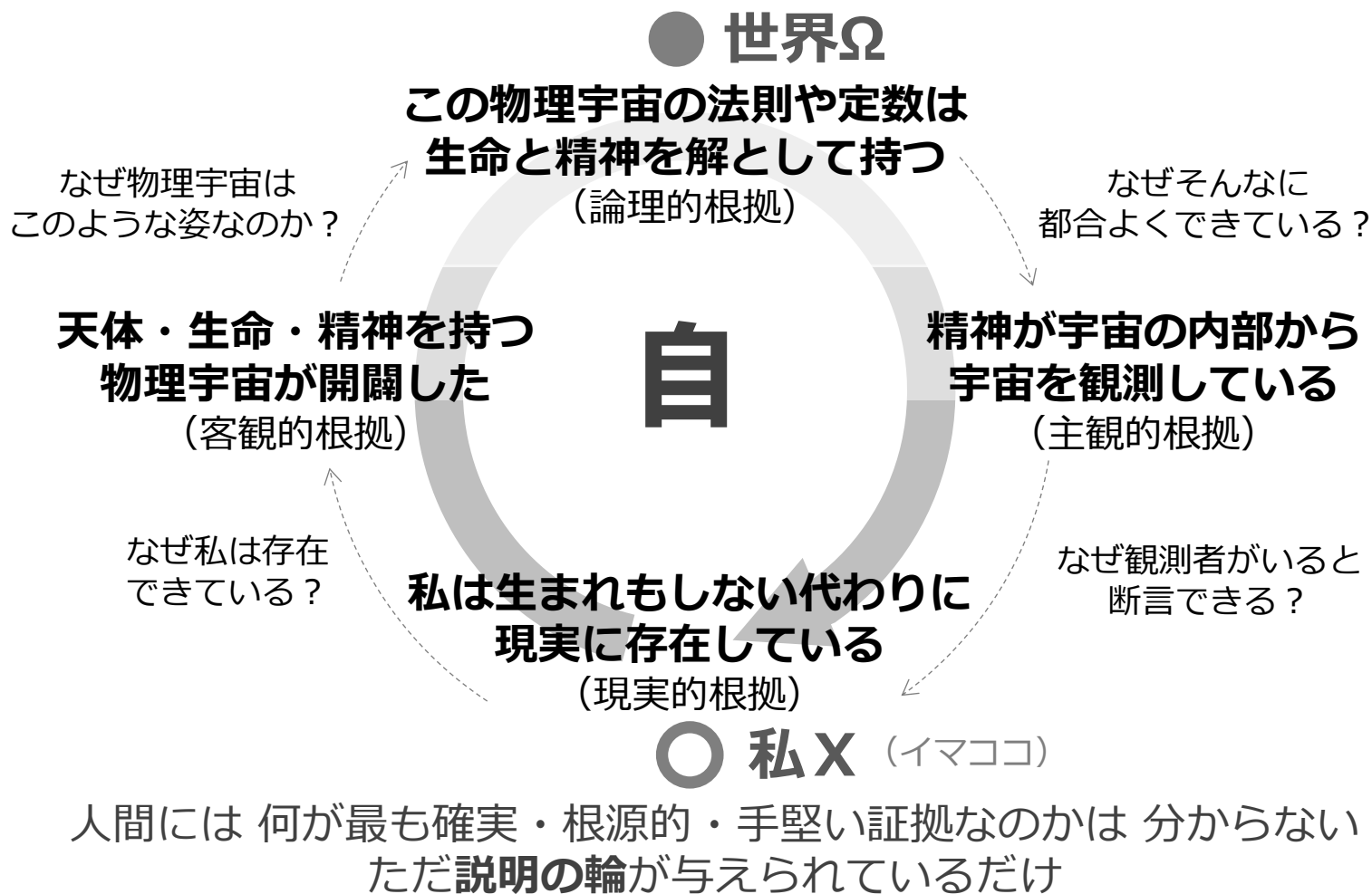
世界とは 私 = 無 が集積した 自己完結圏



説明の輪



世界は どこにも 最根源の無い 説明の循環



世界は 物理・生命・精神 の 大きな説明の輪

自循方程式

$$\begin{aligned} \text{世界(自己完結)} = & \text{物理相(自己保存)} \\ & + \text{生命相(自己生成)} \\ & + \text{精神相(自己認識)} \end{aligned}$$

世界

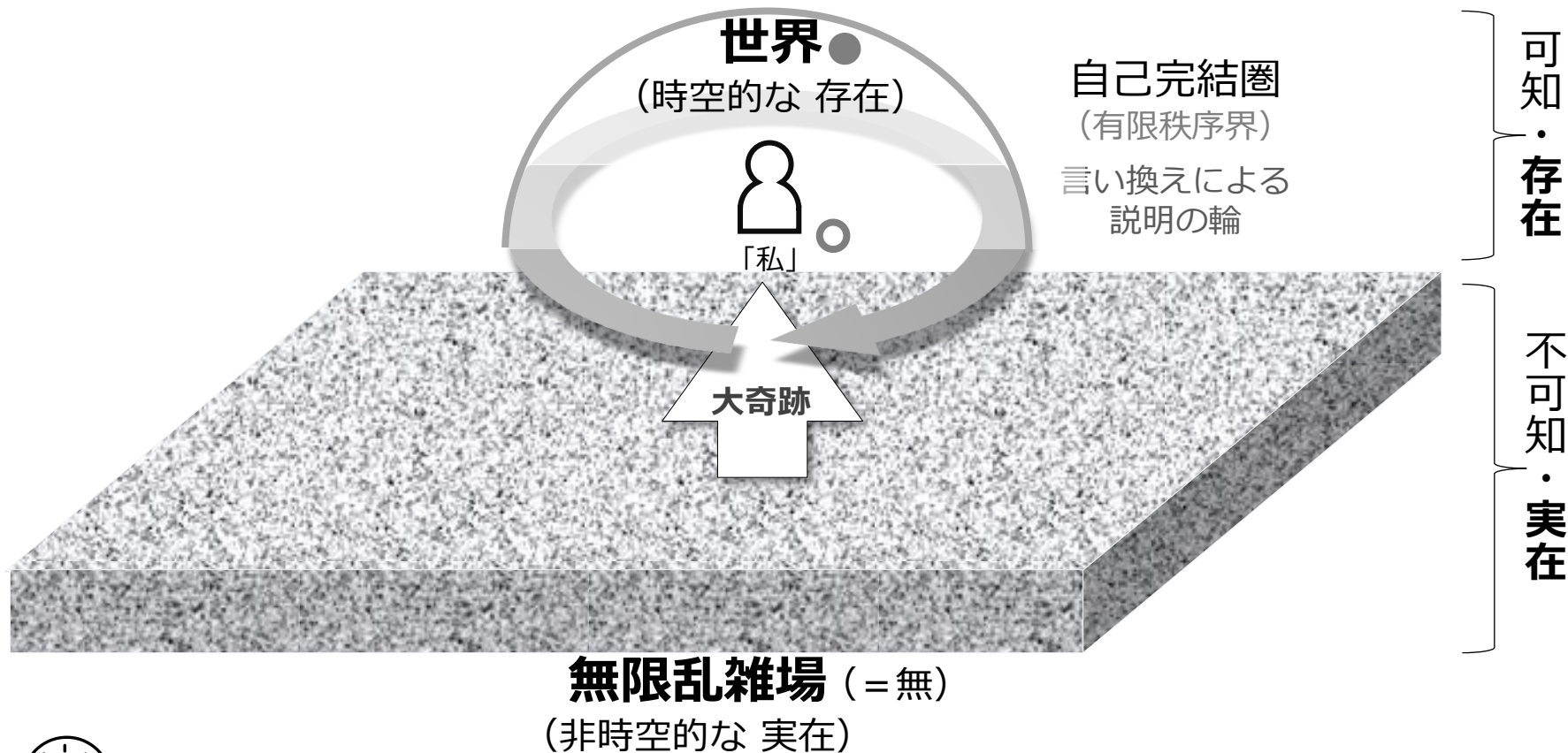
世界とは 無から自力浮上した自己完結圏



「世界」は「私」にとっての全てであり「世界」に外部は無い
世界の外部に荒涼たる無限乱雑場が広がっているとしても
世界の内部にいる私からは、それらを窺い知ることはできない

世界

世界とは 無から自力浮上した自己完結圏



存在してしまった世界の内部では、説明の輪で全てを説明し尽くせるが、存在そのものがなぜ存在しているのかは、永遠の不可知であり神秘である

本節のまとめ

世界は「自」からできている

- ◆ 世界は 無→自→対→相 という三段階の奇跡で生成される
- ◆ 自己無矛盾な「説明の輪」で世界内の意味は豊かに膨らみ自己完結する



2. 形式・相・様式

世界はどのような枠組みになっているのか

- ◆ 形式・相・様式
- ◆ 最大の説明の輪
- ◆ 自循論

本節で学ぶこと

- ◆ **形式** = {時間、空間、論理} が
「自」から導かれる
- ◆ **相** = {物理相、生命相、精神相} が
世界の内容を構成する
- ◆ **様式** = {存在、現実、実在} が
世界の限界を画定する



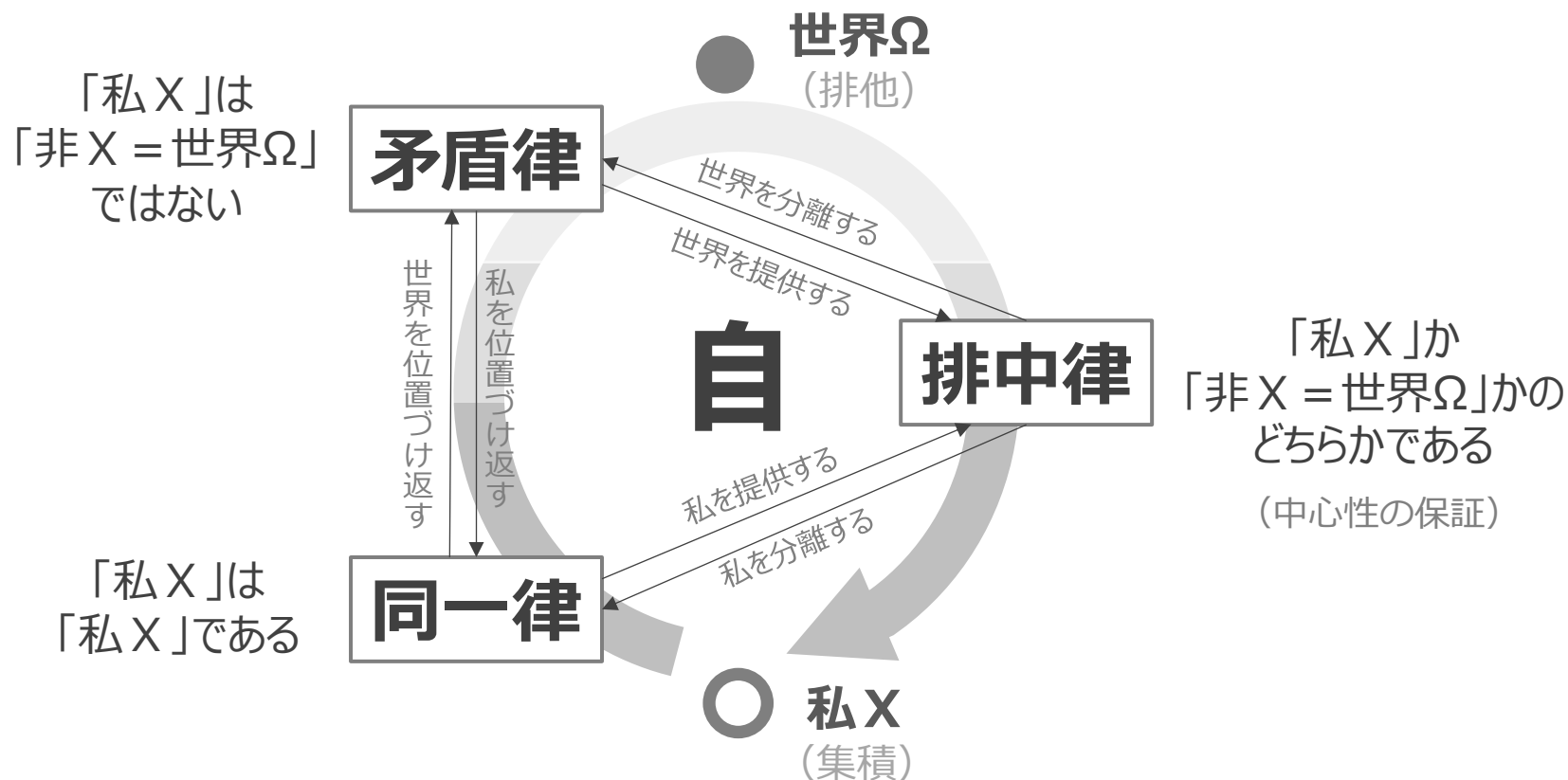
形式 | 論理 (思考三原則)

形式

相

様式

論理とは、私と世界の位置関係



- 世界と私の位置関係が**論理**の基盤となる
- 推論は、空間の内部で実行され、時間を消費する

矛盾からは何を結論しても良い

「私にとっての私」は、時間を隔てても同一であり続けると仮定されているが
「私₁にとっての私₂」は過去化・対象化された別モノであるから、同一ではない
「私」は、本質的に**矛盾**している「無」

	○	$X \wedge \neg X$
$X \wedge \neg X$		X
$\neg X$		$X \vee \Omega$
	●	Ω

1. X 「私は私である」かつ $\neg X$ 「私は私ではない」
という矛盾を前提する ($X \wedge \neg X$ は真)
2. 前提から X を取り出す (X は 真)
3. X に、任意の命題 Ω を「または」で結んで良い
($X \vee \Omega$ は真)
4. 前提から $\neg X$ を取り出す ($\neg X$ は 真)
5. $X \vee \Omega$ のうち、 X は偽となったので、
 Ω だけが残る (Ω は真)

時間を隔てて同一であり続ける定点の私から世界が見えているが ($X \vee \Omega$)
一方で私は時間によって変わってしまう (同一ではない) とも言えるので ($\neg X$)
私のほうが消去されて、世界のほうだけが残る (Ω)

私 から開けた **世界 Ω** は、無条件に**真**
疑い得ない「私 X 」という前提が矛盾しているからこそ
「私 X 」は無際限に世界を開く仮想極点となる

「私」とは、世界を成立させるための帰無仮説であり、本質的に世界内には存在しない「無」

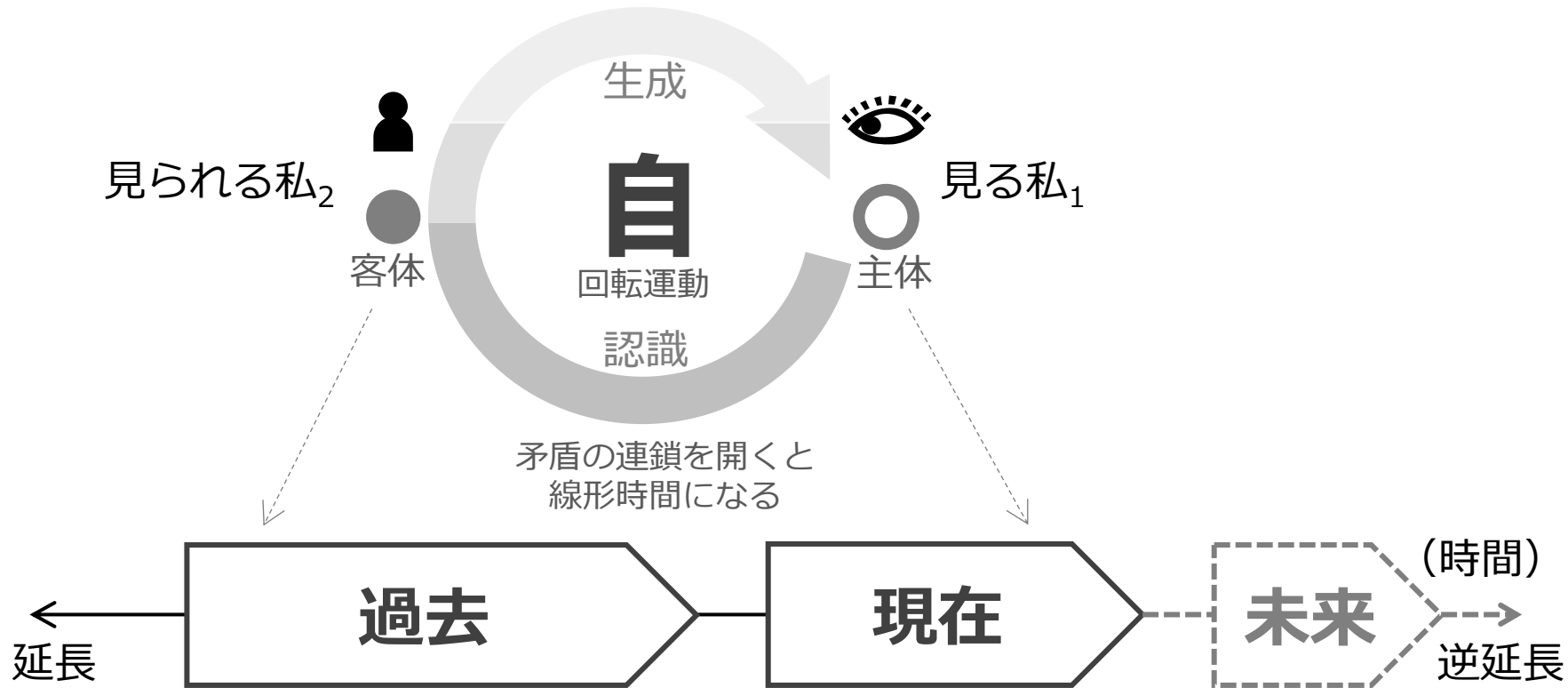
形式 | 自と時間

形式

相

様式

「自」の矛盾と分裂が、時間を生む



「私₁=見る私」「私₂=見られる私」について
「私₁=私₂」かつ「私₁≠私₂」という矛盾の連鎖が 時間を生む

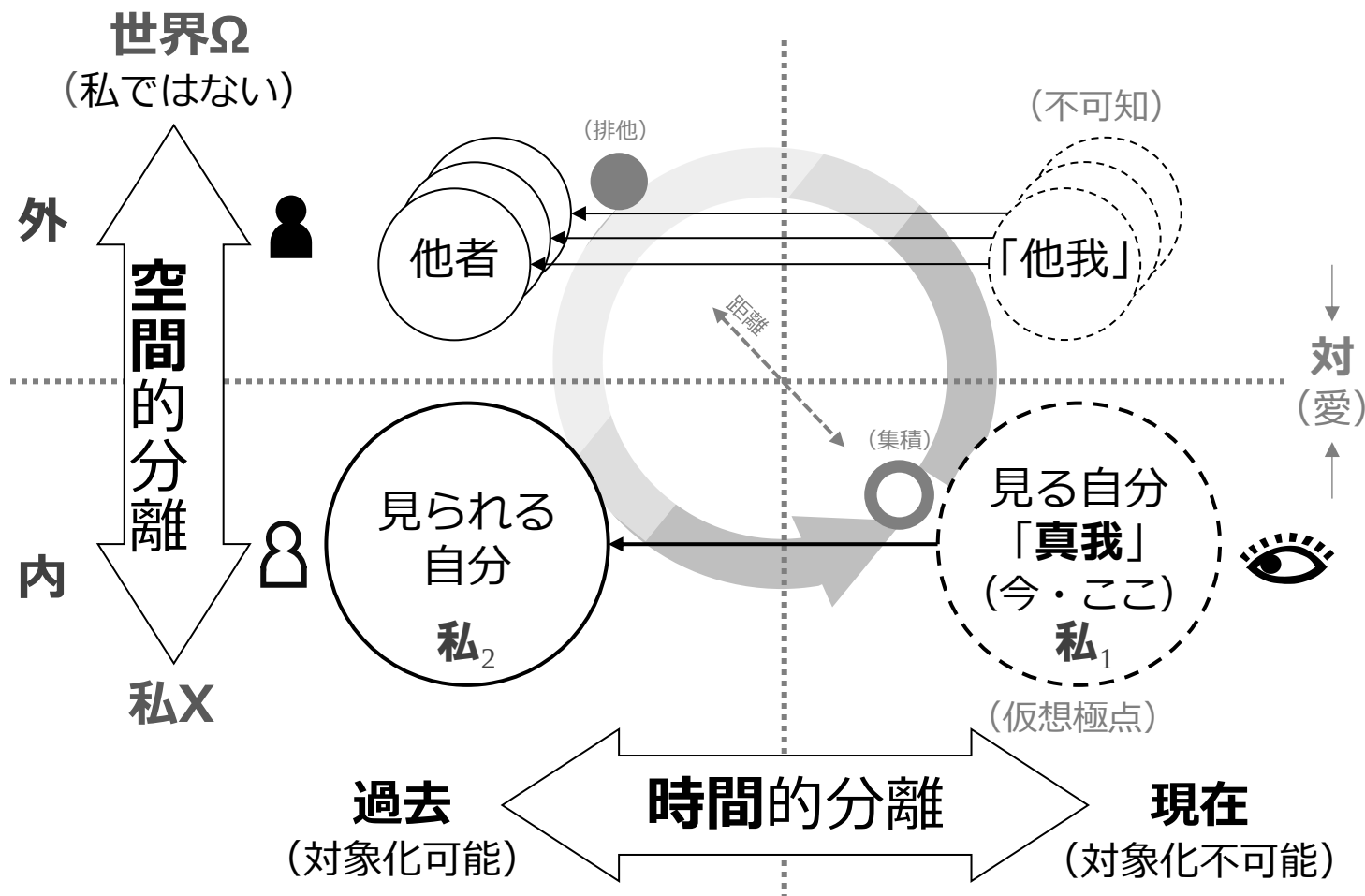
形式 | 自と時空間

形式

相

様式

「自」が時間と空間を開闢する



形式

形式

相

様式

形式とは、排他と集積の対

世界Ω
(排他項)

自

私X
(集積項)

空間

外

内

時間

過去

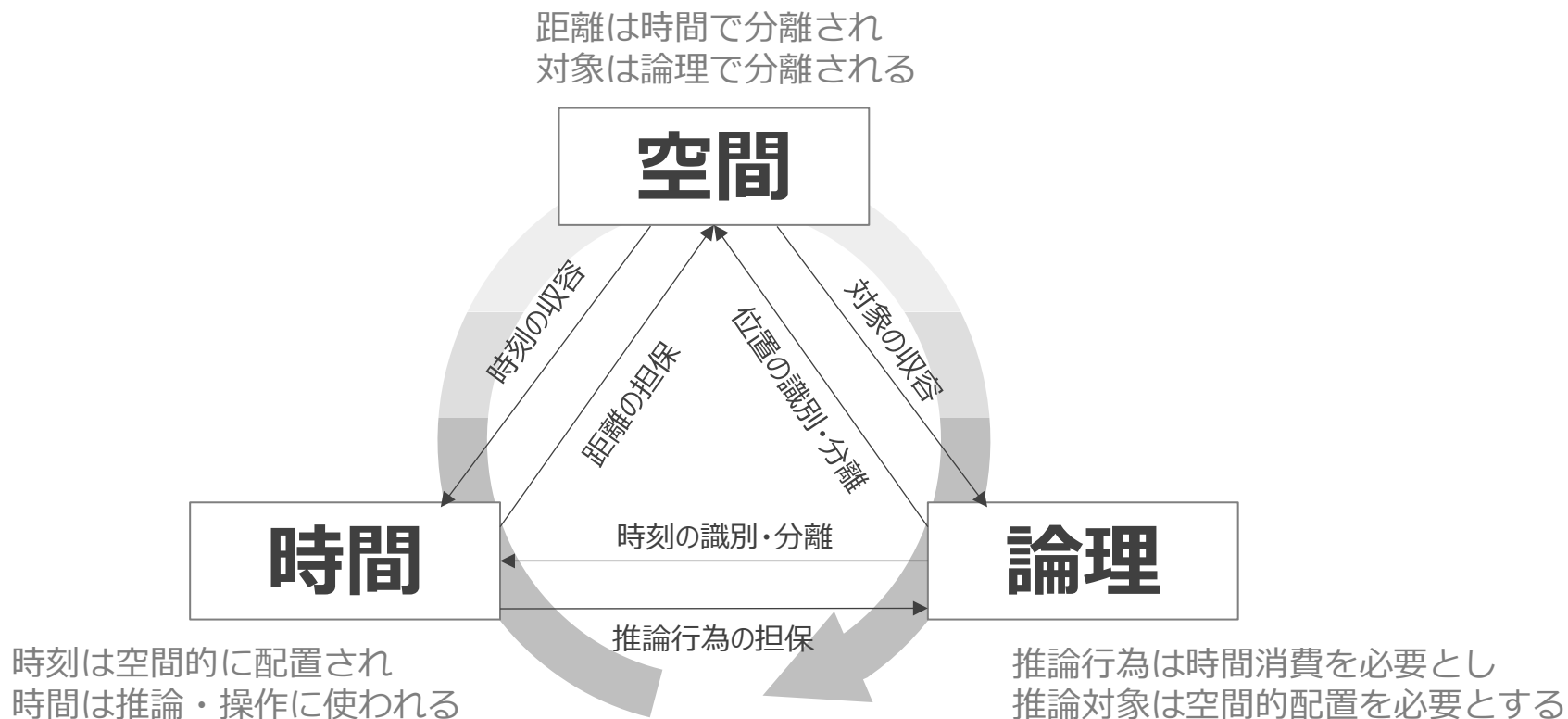
現在

論理

異 有

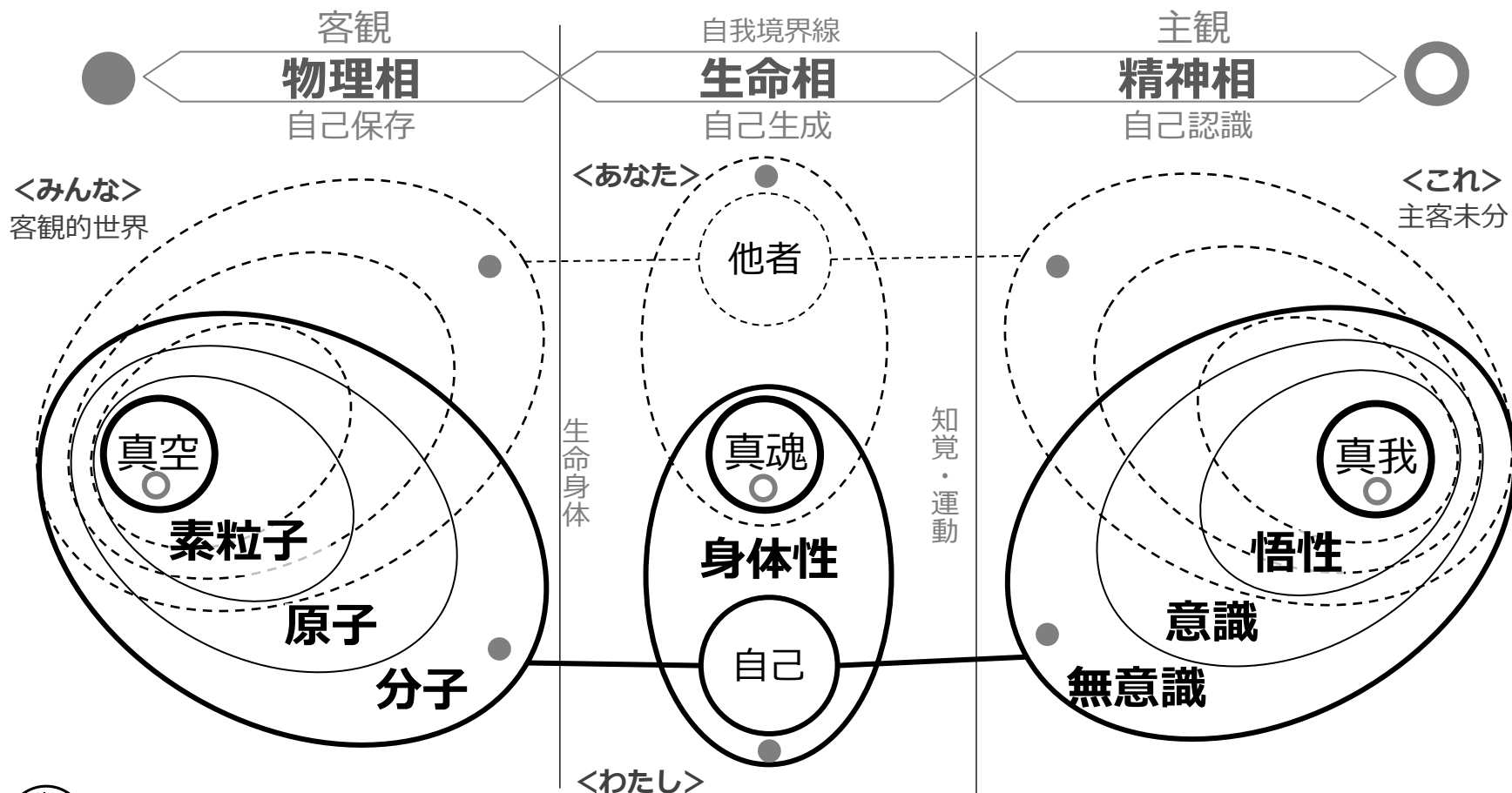
同 無

時間・空間・論理 が 説明の輪 を成す



「空間のない時間・論理」「時間のない空間・論理」「論理のない時間・空間」はどれも成り立たない。時間・空間・論理という形式は、セットで初めて意味を持つ。

世界は 物理・生命・精神からなる



世界の説明原理（説明の輪）には物理・生命・精神があり
 個々の説明の輪は不完全であり、相互説明（大きな説明の輪）によって自己完結する

相 × 形式

形式

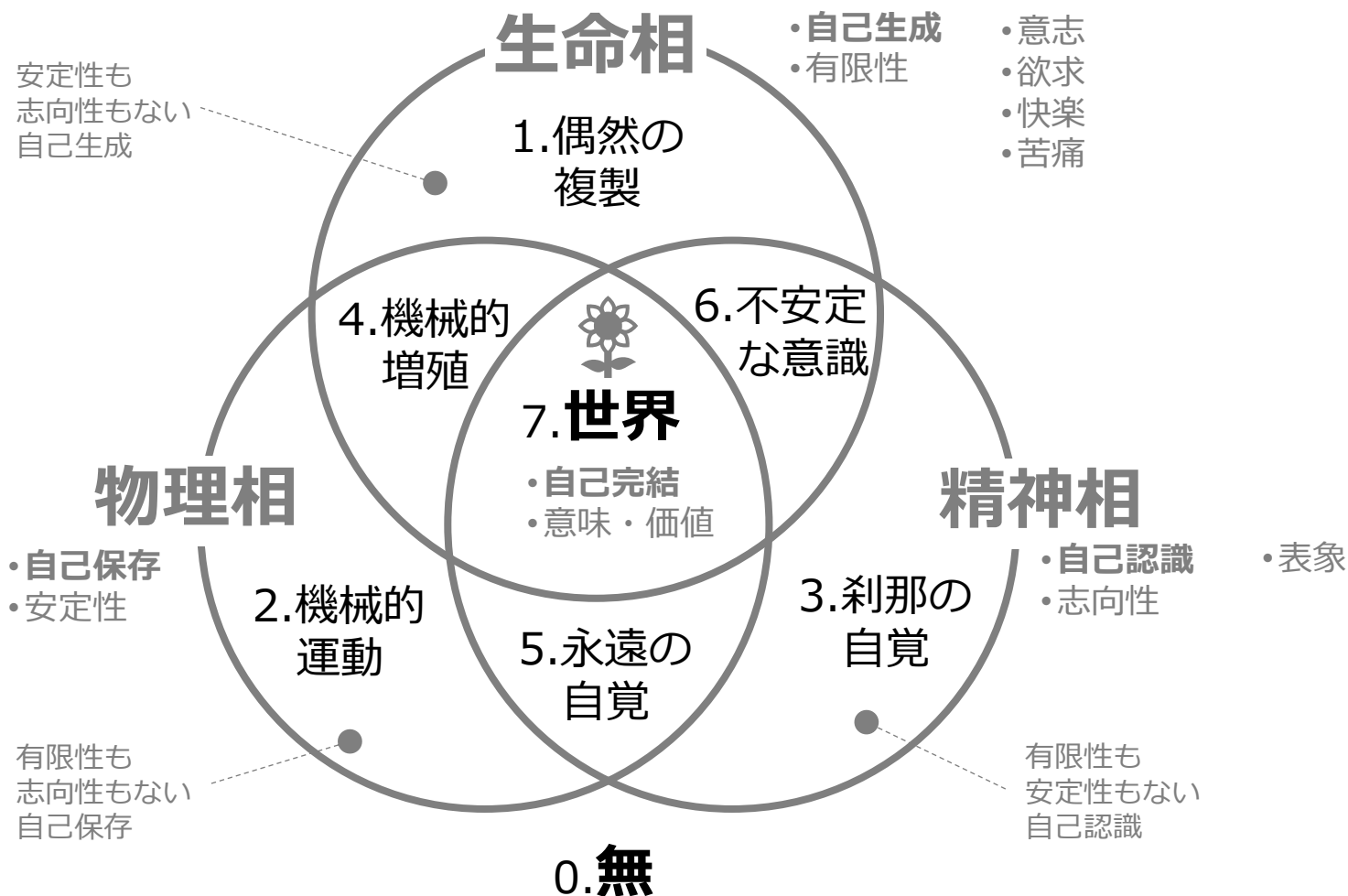
相

様式

世界は 物理・生命・精神からなる

			相		
			物理相	生命相	精神相
			可観測宇宙	命の連鎖	情報空間
			自己保存	自己生成	自己認識
			安定性	有限性	志向性
形式	原論理	有 (排他項) ●	物質	身体性	意識対象 (クオリア)
		無 (集積項) ○	真空	真魂	真我
			物質を取り除いた 後に残る場	肉体を取り除いた 生き続ける意志	意識を取り除いた 無内包の現実
	原時間		物理時間	成長・進化	主観時間
	原空間		物理空間	生命樹	認識空間

物理・生命・精神 が揃って世界になる



世界の様々な観点は 相に要素分解できる

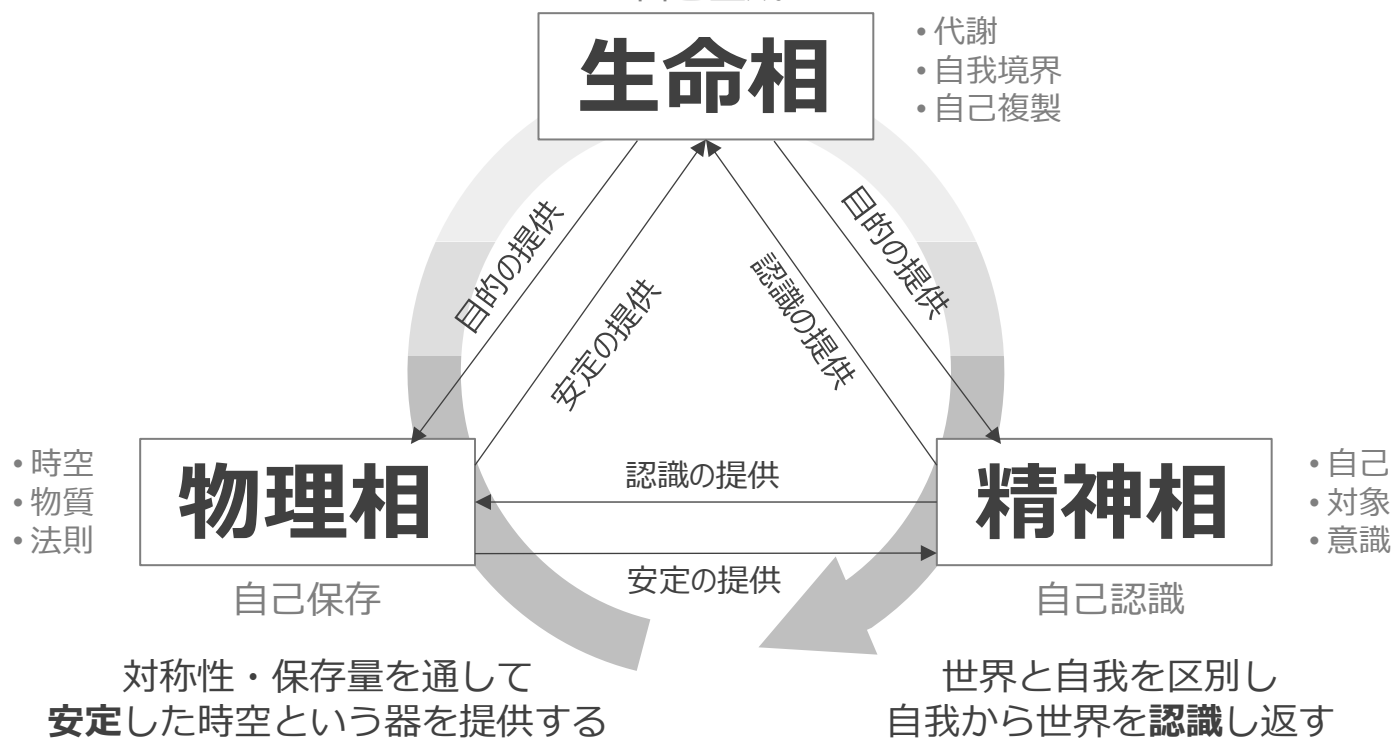
観点 \ 相	物理相	生命相	精神相
社会 (文化・経済)	○	○	○
科学	○	—	—
事業	○	△	△
生活	○	○	△
倫理	—	△	○
感情	—	○	○
宗教	—	△	○
環境	○	○	—

(○印：強く関係する、△印：場合により関係する、—：あまり関係しない)

物理・生命・精神 が 説明の輪 を成す

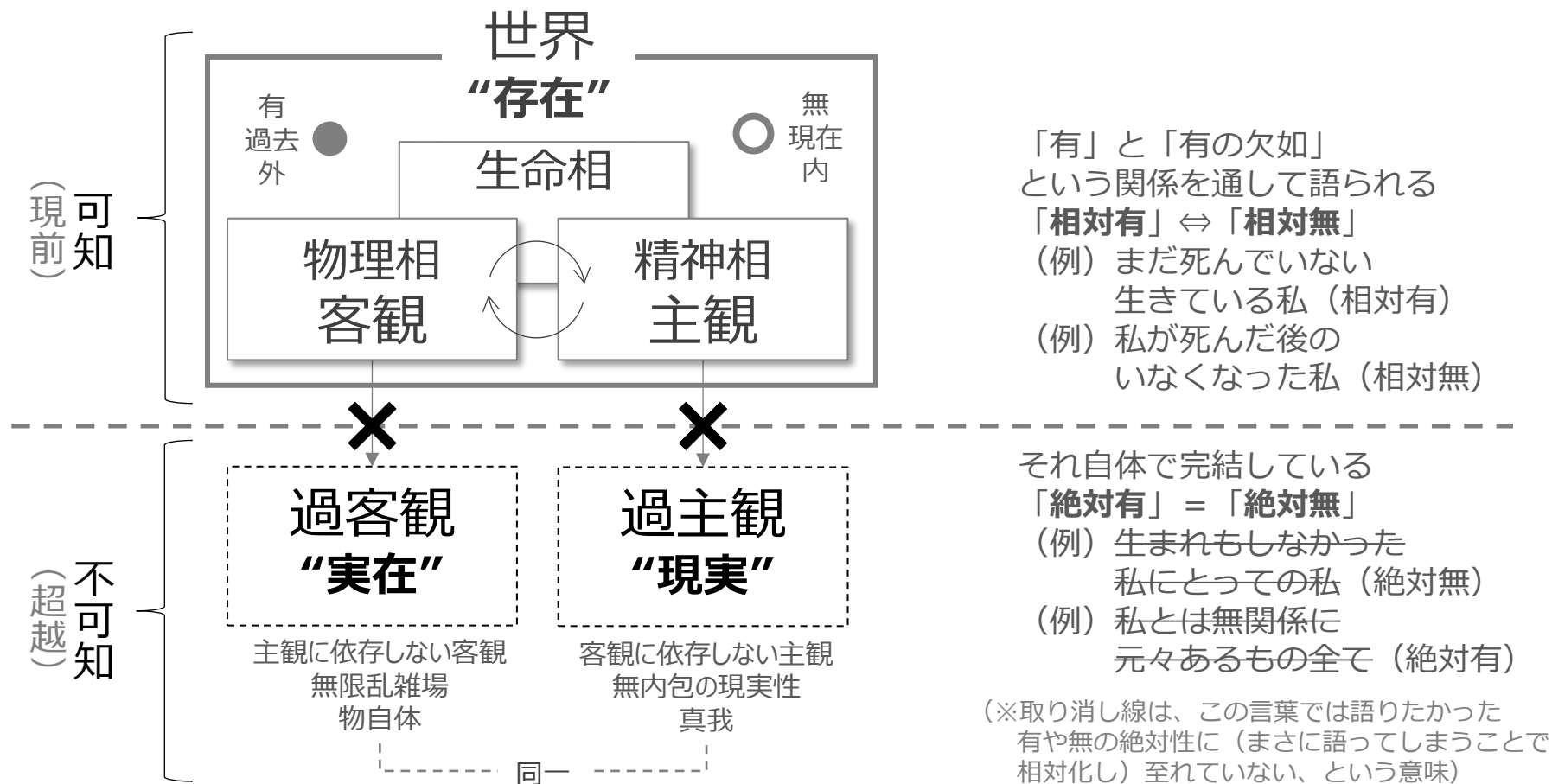
有限性の内部で自己を増殖させ
種としての繁栄を目的化する

自己生成



どれか一つの相が世界の最根源というわけではない

客観・主観から 過客観・過主観が生じる



過客観と過主観は、可知の限界を画定するための帰無概念

様式 × 形式

形式

相

様式

世界 = 形式を持つ様式 = 存在

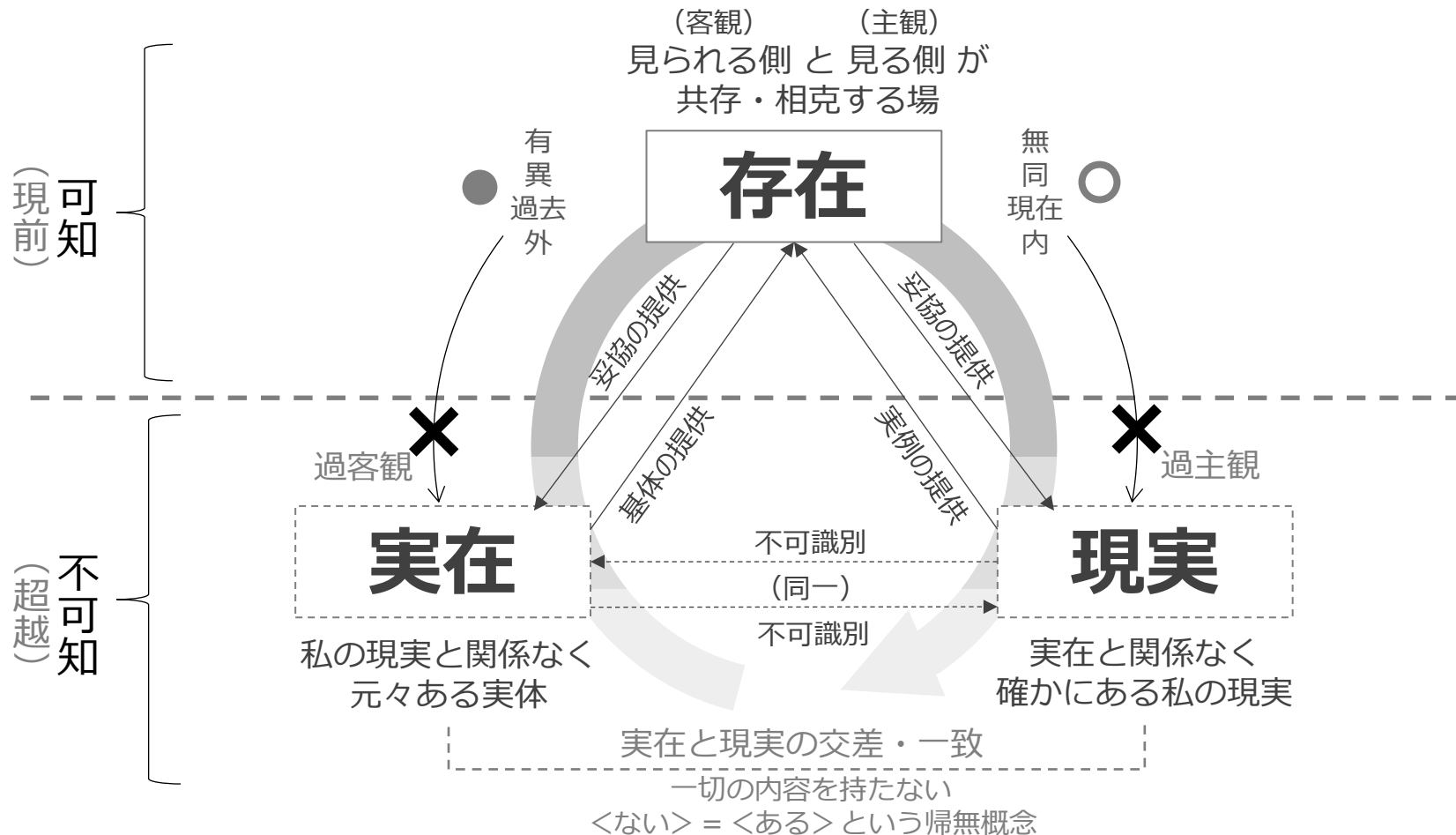
		様式			
		實在 (物自体) ● (排他)	存在 (世界)	● (集積)	現実 (真我)
		過客観	客観	主観	過主観
形式	空間	主観に 依存しない 客観 形式外の 不可知	外	内	客観に 依存しない 主観 形式外の 不可知
	時間		過去	現在	
	論理		有 異	無 同	

(同一)



「なぜ私は、生まれもしない代わりに、現に生まれて生きているのか」という**現実性**と、
「なぜ、何も無い代わりに、もともと何かがあったのか」という**實在性**は、
真逆の対象を意味しているようで、実は同じ概念を意味している。即ち、世界の存在以前の、
内容を全く伴わない、〈ない〉 = 〈ある〉 という概念を指し示している。

実在・存在・現実 が 説明の輪 を成す



実在と現実とは、存在の内部には無い

「なぜ、何も無いのではなく、何かがあるのか」（実在性）
この問いの答えは、既に存在してしまっている側からは、問えない

「なぜ、この私は、他の誰でもなく、まさにこの私なのか」（現実性）
この問いの答えは、存在の側から見れば、偶然としか答えられない

実在性と現実性は、「**この私**」からは、否定のしようがない不可知だ

それでも「**この私**」という、唯一無二の中心性に、何か理由が欲しいなら
それは「**この私**」から開けている全世界の全情報量に等しい
ビタ 1bit でも情報を減らせば、それはもう「**この私**」を特定できない

高々「客観的な世界存在」など、無限乱雑場上に、無限にあって良い
しかし「**この私**」と「この私から開けている世界全部」という一対は
論理的に、この一つに限られる（複数あっても識別しようが無い）

私から開けた世界という存在の全部は、「**この私**」と表裏一体である

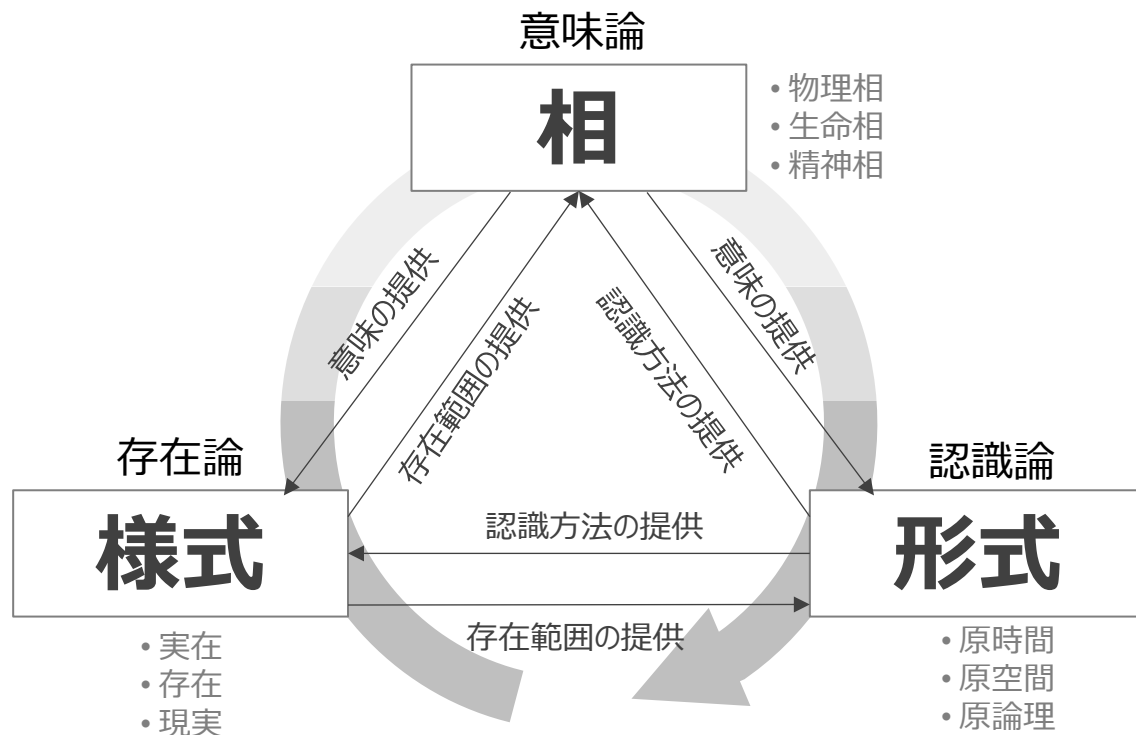
最大の説明の輪

形式

相

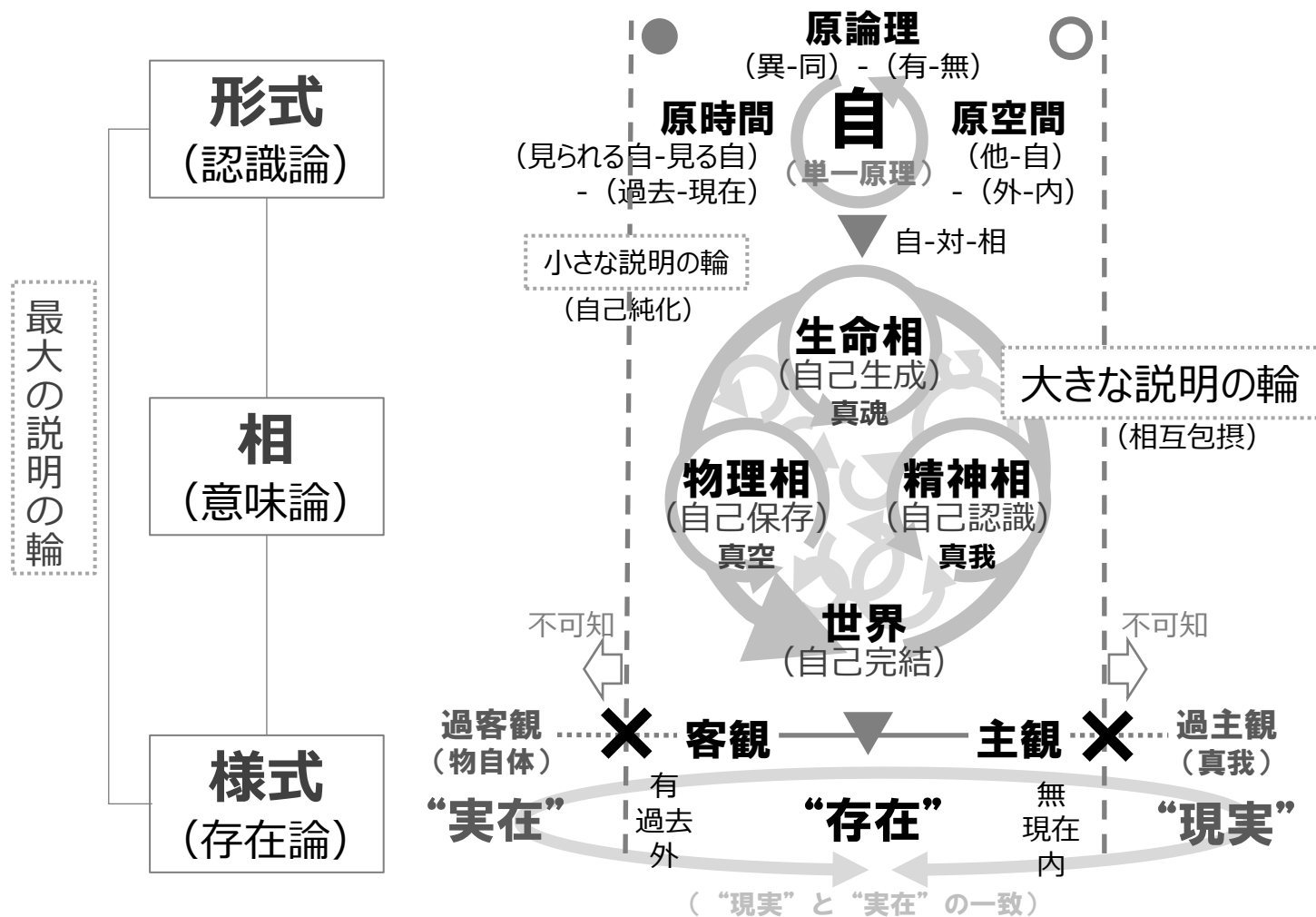
様式

形式・相・様式 が 最大の説明の輪 を成す



知性は、存在論・意味論・認識論の循環外には出られない
どれかが最根源というわけではない 相互に説明し合うだけ

世界とは「自」から成り立つ 説明の輪



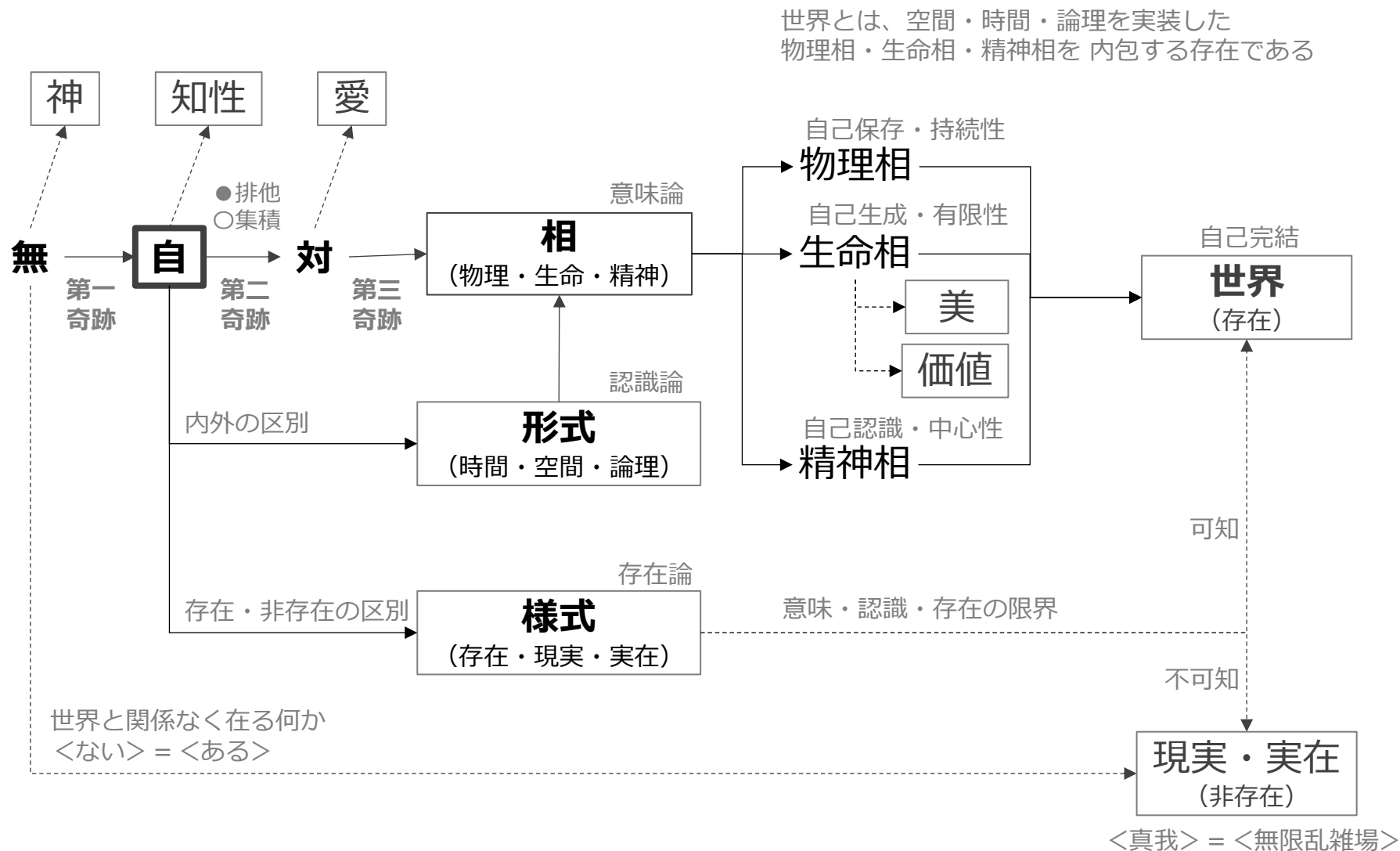
自循論

ver. 4.3

形式

相

様式



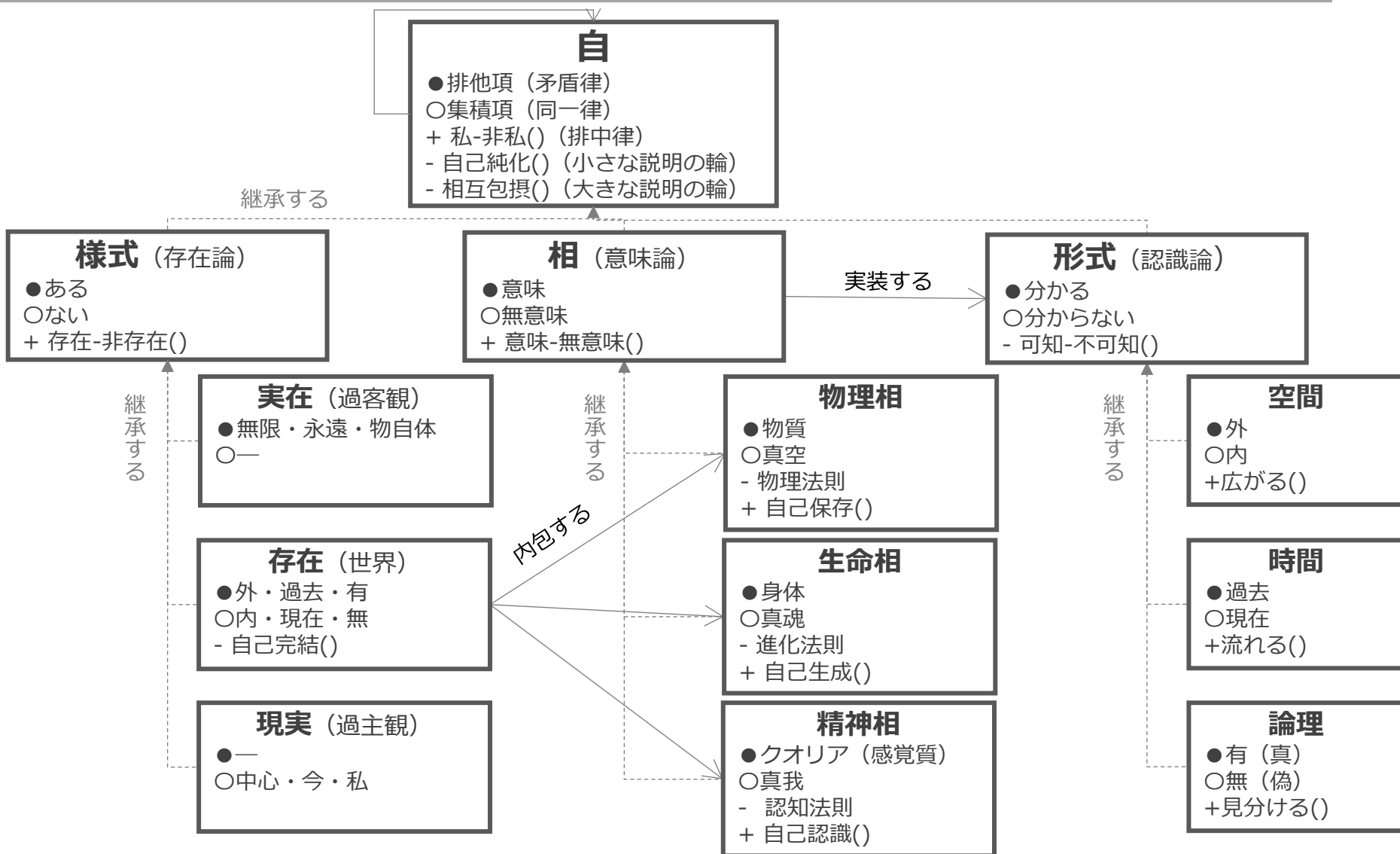
自循論

ver. 4.3

形式

相

様式



本節のまとめ

世界は「自」から成り「自」でもある

◆ 世界は 形式・相・様式 から成る

- 形式 = {時間 、空間 、論理 }
- 相 = {物理相、生命相、精神相}
- 様式 = {実在 、存在 、現実 }

◆ 世界は 外部の無い 自己完結圏



3. 宇宙

科学・哲学・宗教と自循論の整合

- ◆ 知性原理存在論
- ◆ 有限原理
- ◆ 哲学的な一致の定理

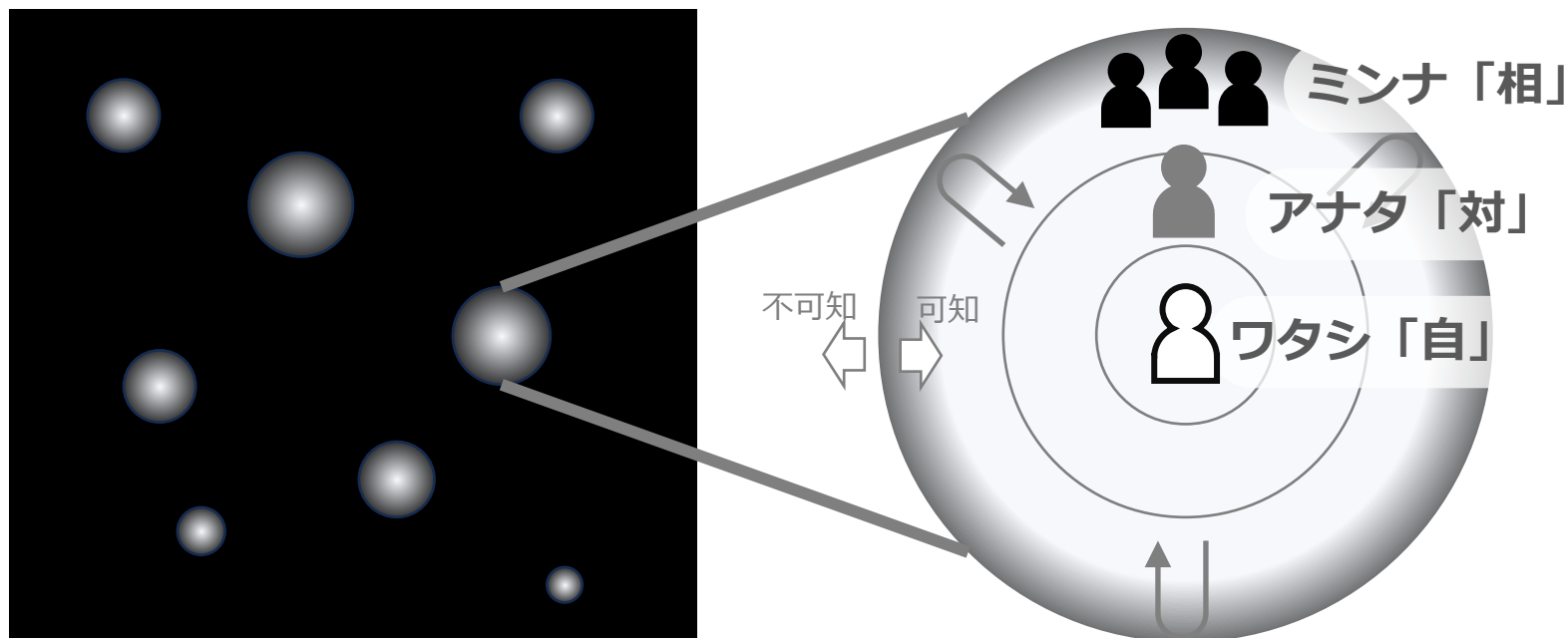
本節で学ぶこと

- ◆ 知性と物理宇宙は
表裏一体であることを学ぶ
- ◆ 知性が有限であるが故に
宇宙も有限であることを学ぶ
- ◆ 知性にとっての現在が
過去や未来と等価であることを知る



自循論の世界観

無限の闇に小さく灯った 奇跡の自己完結圏



世界とは
無限乱雑場の中に小さく灯った
有限の自己完結圏

世界とは
自己無矛盾な限り広がる
有限の「説明の輪」

知性原理存在論

知性を内部に宿せなかった宇宙は
存在したことにならない*1

自という構造が最根源にあるから
自の実装である知性は
時空と世界を自然に開く

自己無矛盾である限り
やましさの無い世界観を貫く限り
知性と世界は表裏一体である

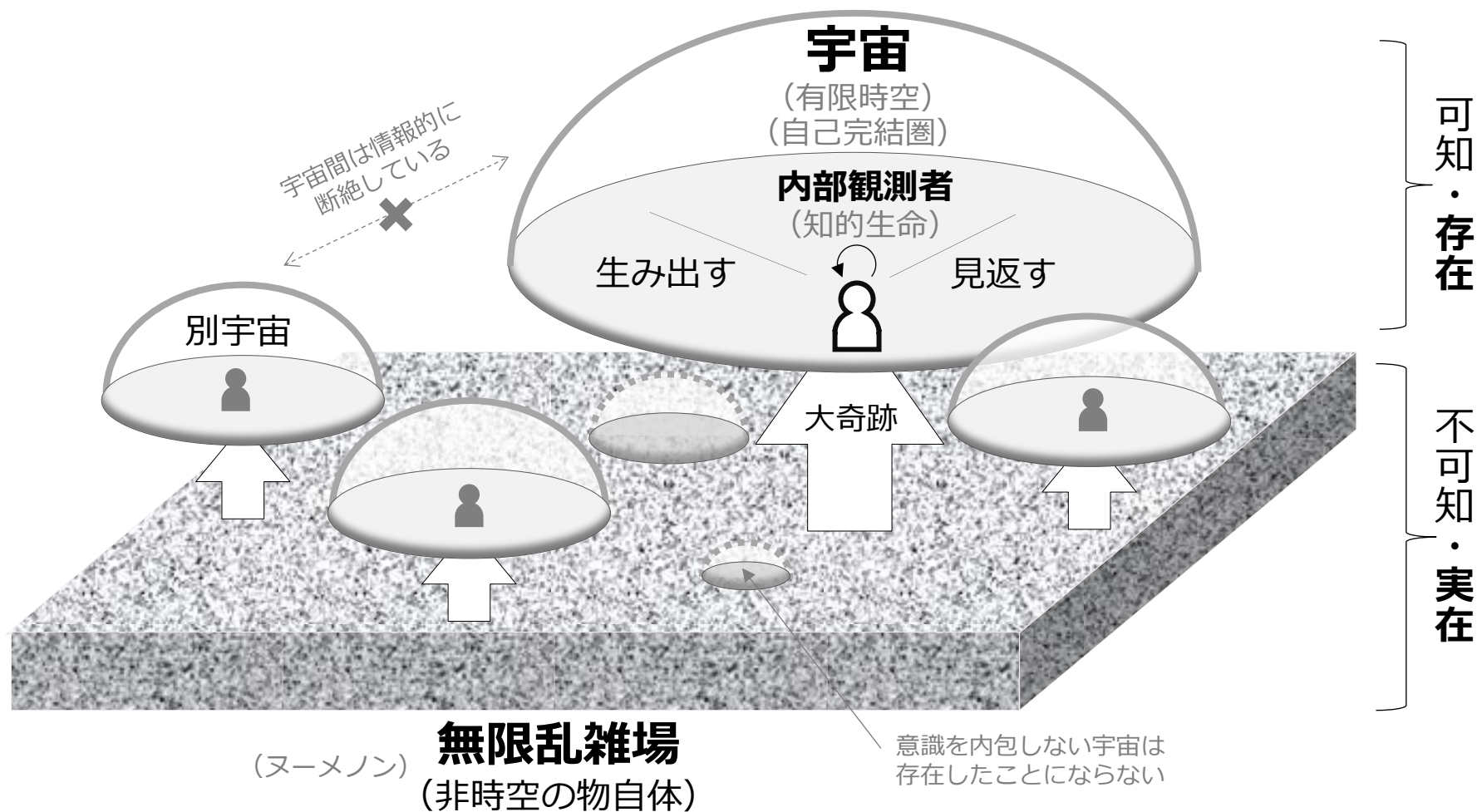
最小の自 = (私) と
最大の自 = (世界) は、等価である



*1 「私が私であることを意識している」ことを意識できる知性は、真我計算を持続し、最も抽象的な「私」を仮想極点として維持している。自己完結圏としての宇宙の「存在」の強度は、「真我計算」の濃度に比例する。（存在はゼロイチではない）

知性原理存在論

実在の上に 宇宙が無限に存在する

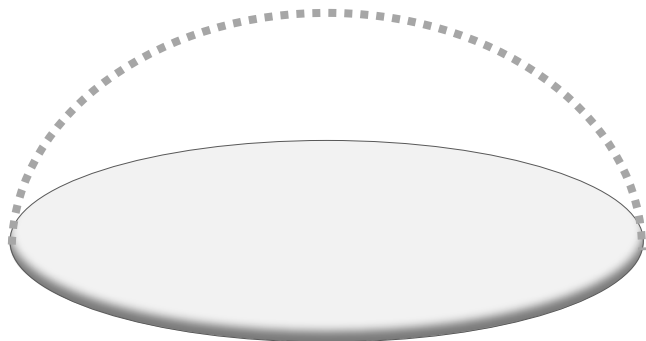


知性原理存在論

宇宙が知性を生み、知性が宇宙を定義する

知性を含まない宇宙は
存在していない

- 外部からは観測されない
- 内部からも観測されない

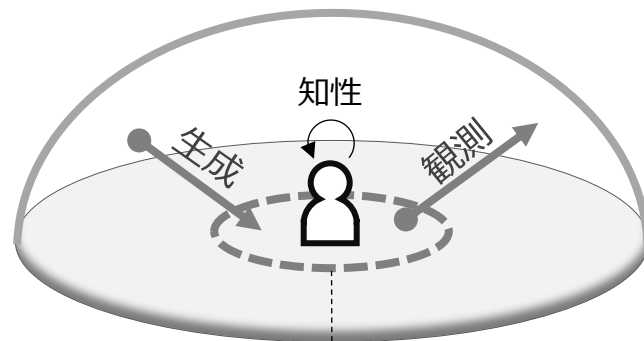


空間 4 次元の
凍り付いたブロック宇宙



知性を含む宇宙は
存在している

- 外部からは観測されない
- 内部からは観測される

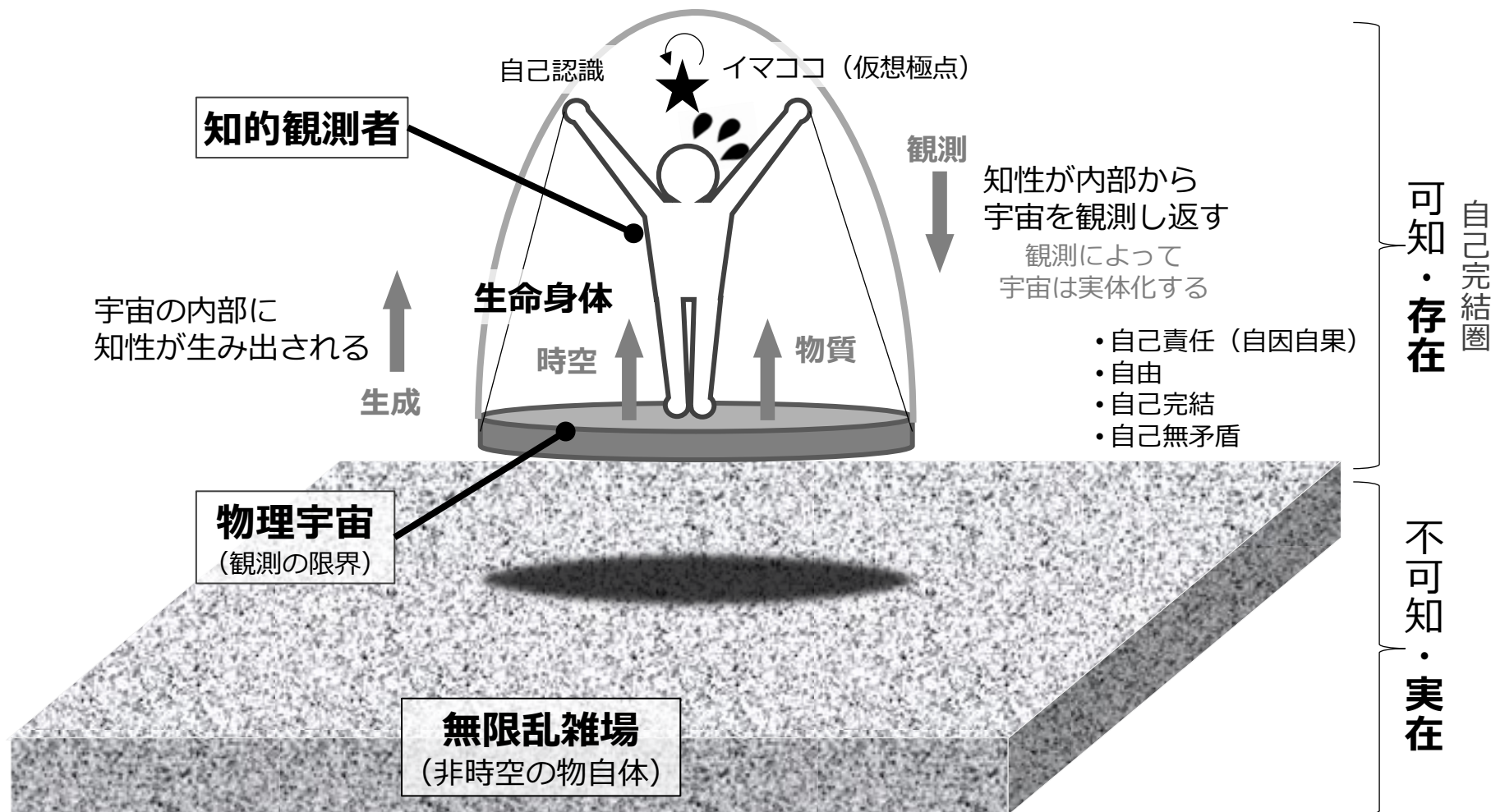


空間 3 次元 + 時間 1 次元の
変化し続ける宇宙

宇宙が知性を生み出し、知性が宇宙を観測し返す
この関係の成立を「存在」と呼ぶ

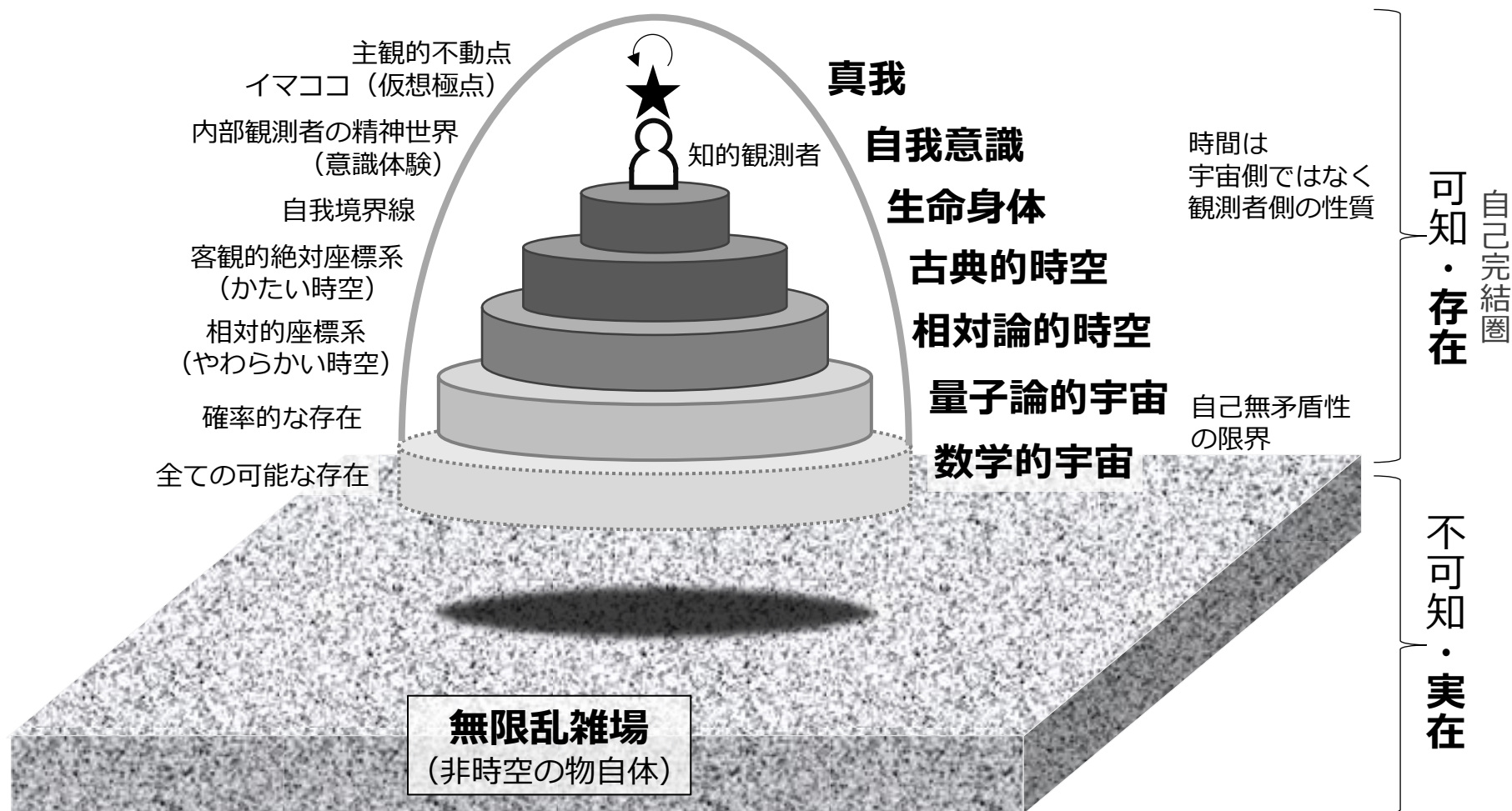
知性原理存在論

知的観測者が存在を浮上させる



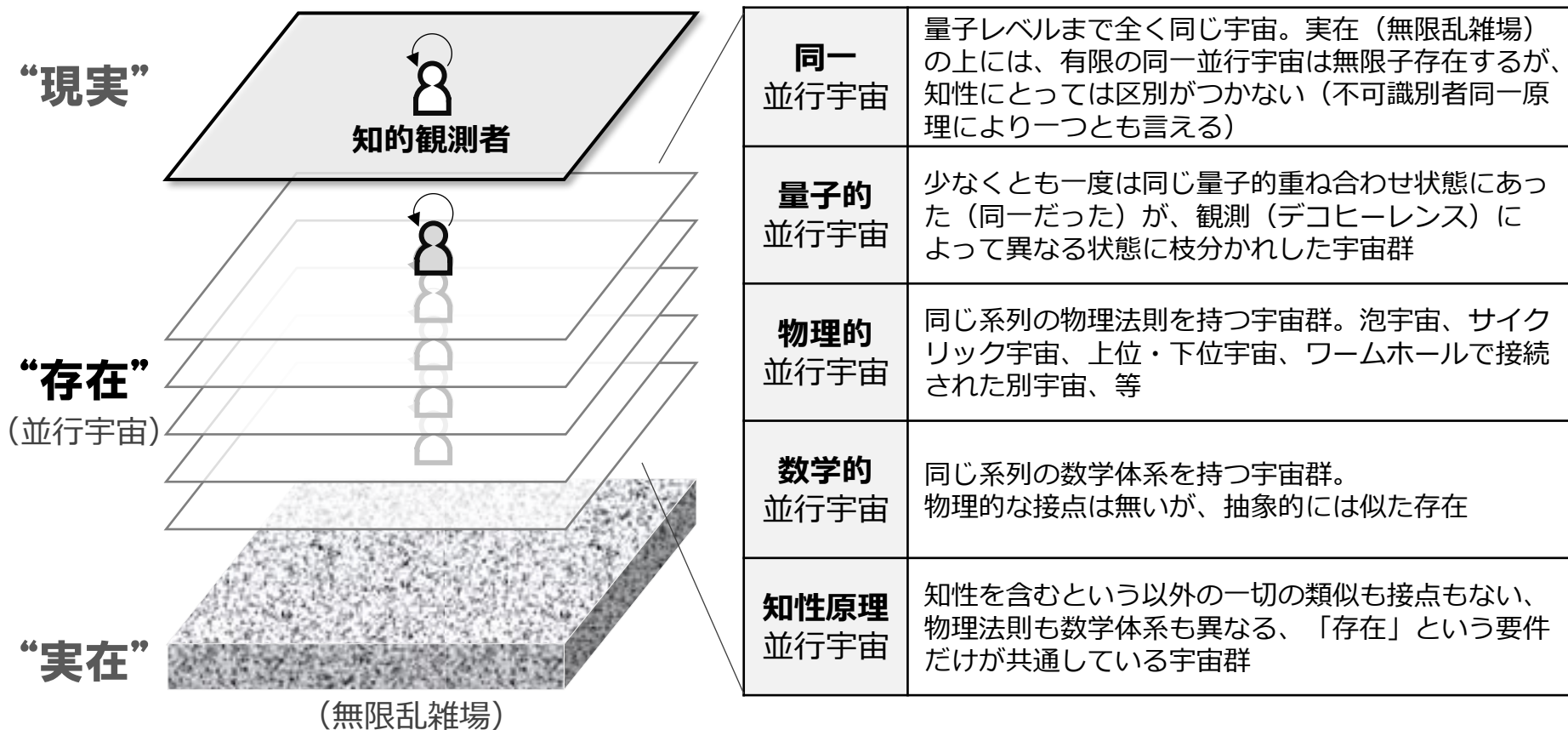
知性原理存在論

知的観測者が存在を浮上させる



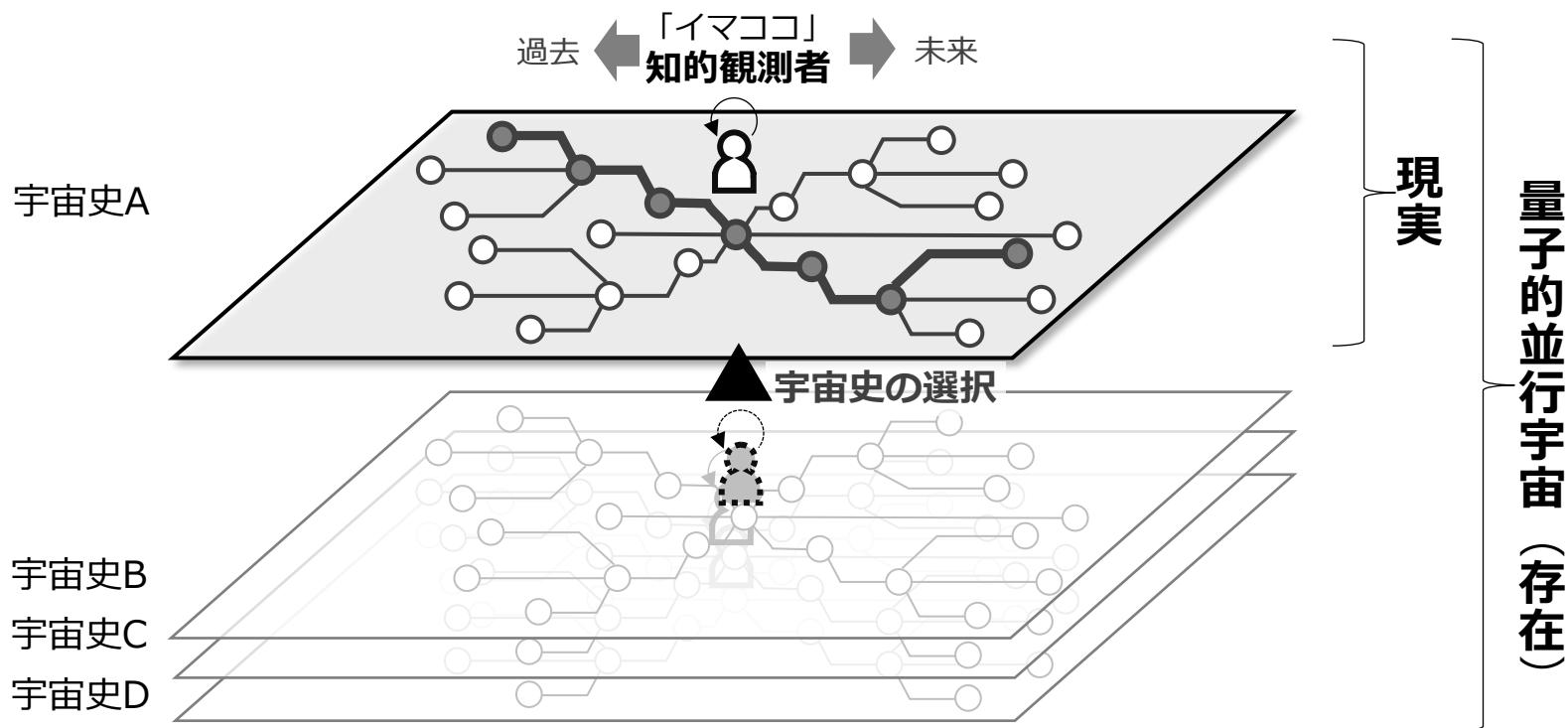
知性原理存在論

全宇宙史は存在し、観測者が現実を選択する



知性原理存在論

全宇宙史は存在し、観測者が現実を選択する



- ：
- 量子的並行宇宙は、全て「**存在**」している
 - 観測者の自己認識が、一つの宇宙史を「**現実**」にする



- ・亡くなった人の墓前で祈るのも、試験が終わった後に祈るのも、手遅れでは無い。
今の選択や祈りは、未来は勿論のこと、過去の在り方まで選択している
- ・私たちは連続無限の量子的並行宇宙から、世界線（過去-現在-未来の線路）を選び続けている
- ・今の祈りは、未来だけでなく、過去の「あの人」や「私」にも伝わる、とも言える

知性原理存在論

知性の在り方が 物理法則を決定する

● 相対論

- 全ての時空点から、光速度（情報伝播速度の上限）が同じに見える（光速度に種類は無い）
- 誰もが、情報を瞬時に集める神にはなれない
- 相対論は、全ての観測者の**自己中心性**を保証する

● 量子論

- 全ての時空点で、無矛盾な可能状態が重ね合わされ、無矛盾性を保つように可能性の収縮が起きる（波束の崩壊）
- 誰もが、外部と過去に縛られた運命論的奴隷ではない
- 量子論は、全ての観測者の**自己決定性**を保証する

● 自循論（説明の輪）

- 相対論的・量子論的な宇宙内部でのみ知的存在が育まれるし、知性が観測する宇宙は必然的に相対論的・量子論的である

有限原理

無限は無意味、有限は有意味

無限の分母に 有限の分子なら
値はゼロになってしまう

寿命が有限だからこそ
今日という一日に意味が宿る

有限と意味は 表裏一体

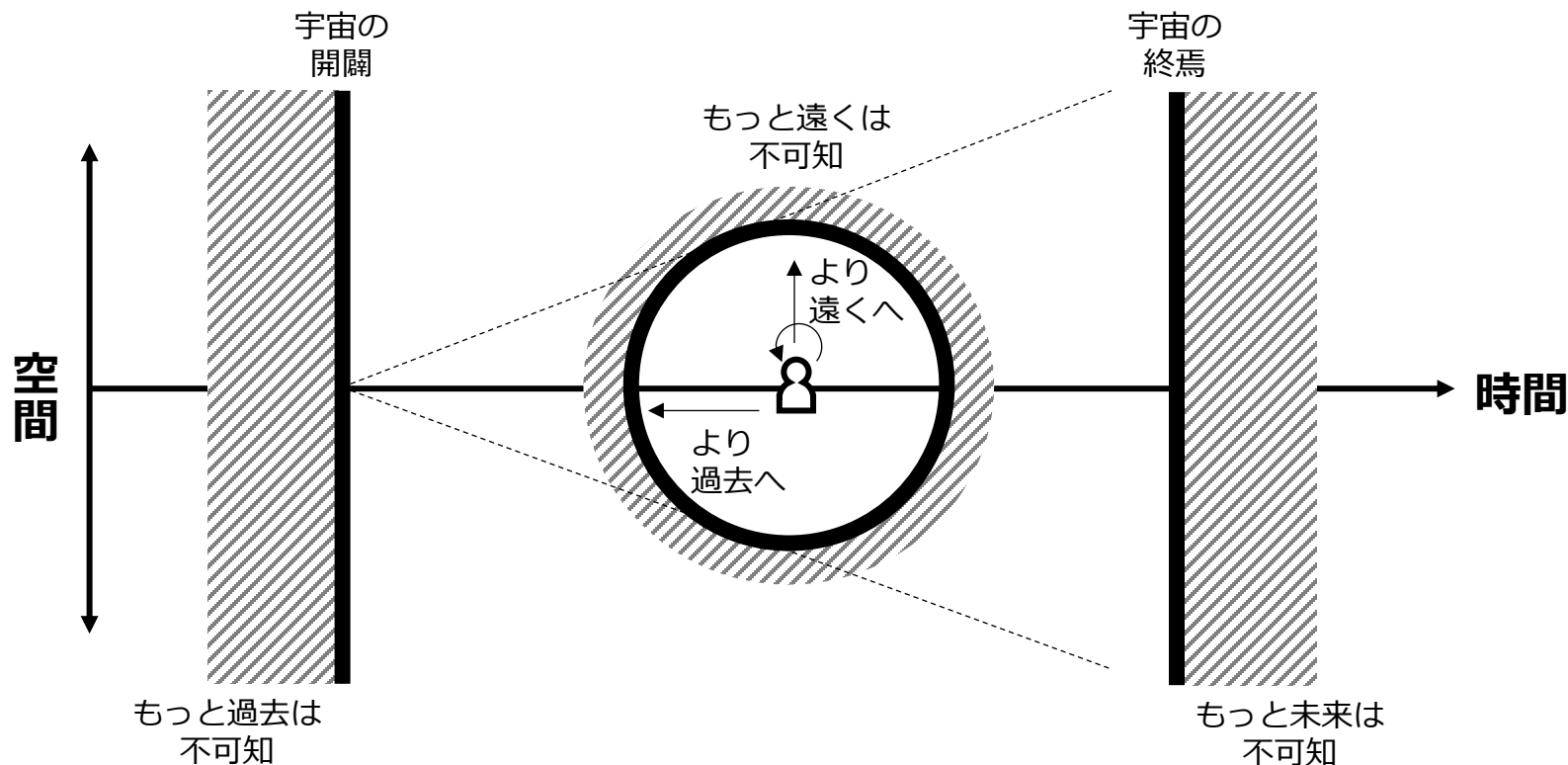
意味の総体を世界と呼ぶなら
世界は定義上、私たちから開かれた
有限の自己完結圏で あらねばならない



有限の全体（分母）は、単に始まり単に終わる無意味だが
その一部（分子）は、全体に対しての位置やサイズとして意味を持つ

有限原理

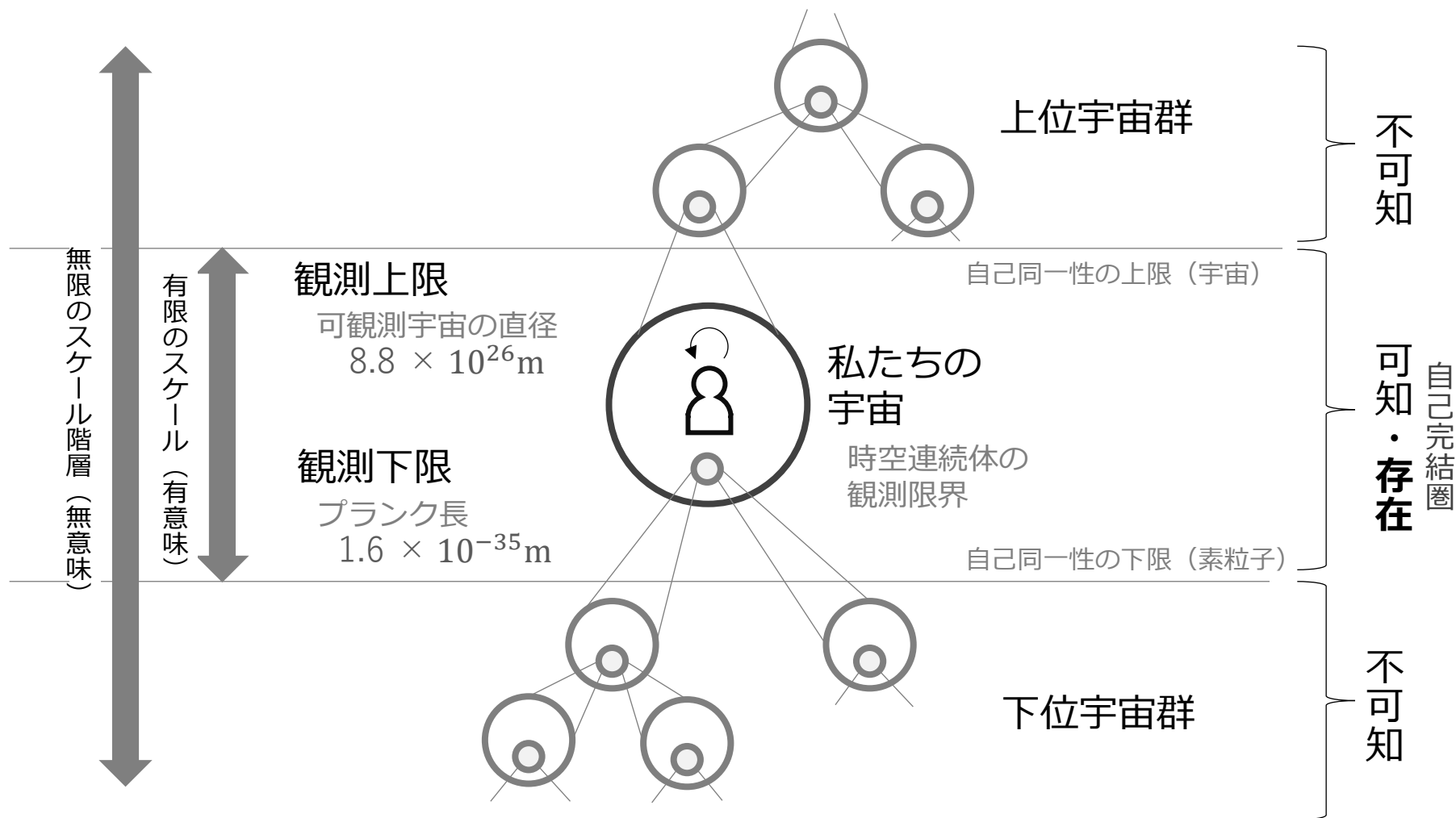
知性の能力 と 可観測範囲 は 表裏一体



- 宇宙は相対論的であり、「より遠くへ」と「より過去へ」は同義で、どちらにも限界がある
- 特異点から宇宙が「始まった」のではなく、知生体にとっての過去への**推定の限界点**があるだけ
- 知性が知り得る範囲は、時空内に限られ、時空内部にいる知性にとってその範囲は、有限である
- もし知性が**無限**の認識能力を持つなら、自他の区別や時空という分離形式すら成立しなくなる
- **無限**の能力を持つ神のままでは知性に堕して語ることはできないので、神は沈黙する

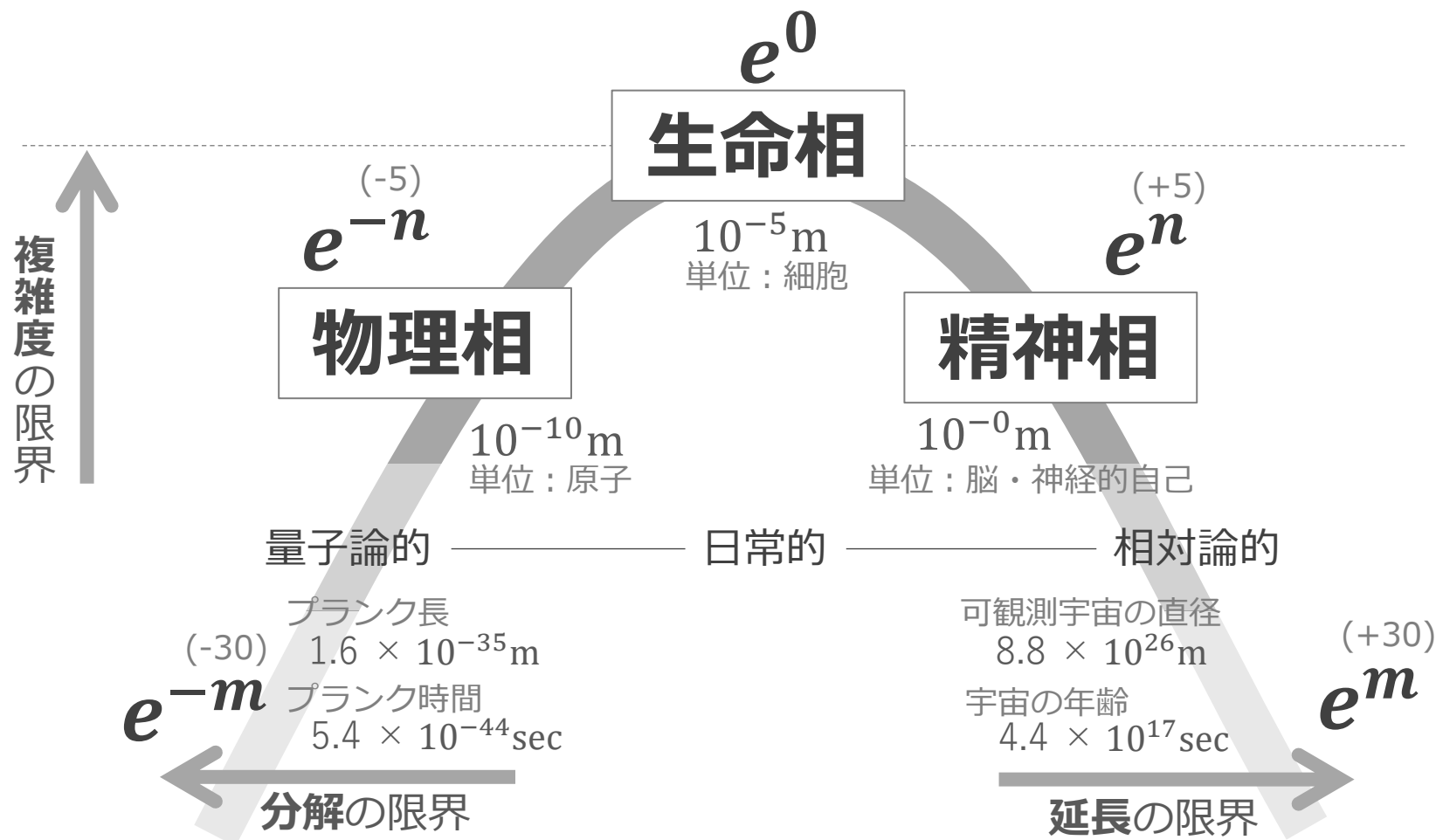
有限原理

スケールは自己规定的に自己完結している



有限原理

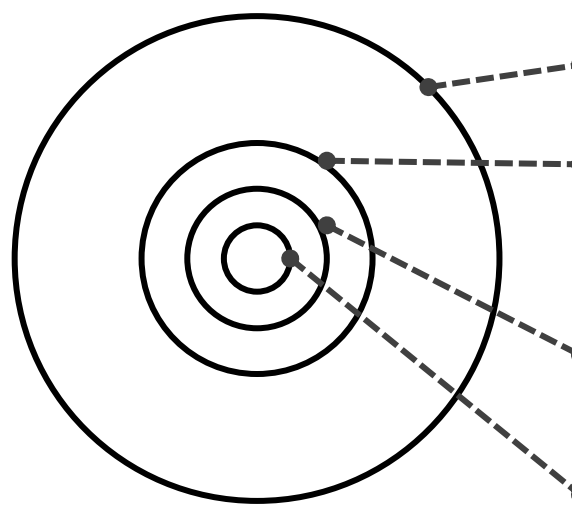
スケールは自己規定的に自己完結している



もしも分母が無限なら、あるスケールで何かが存在する意味はゼロになる

有限原理

スケールは自己规定的に自己完結している



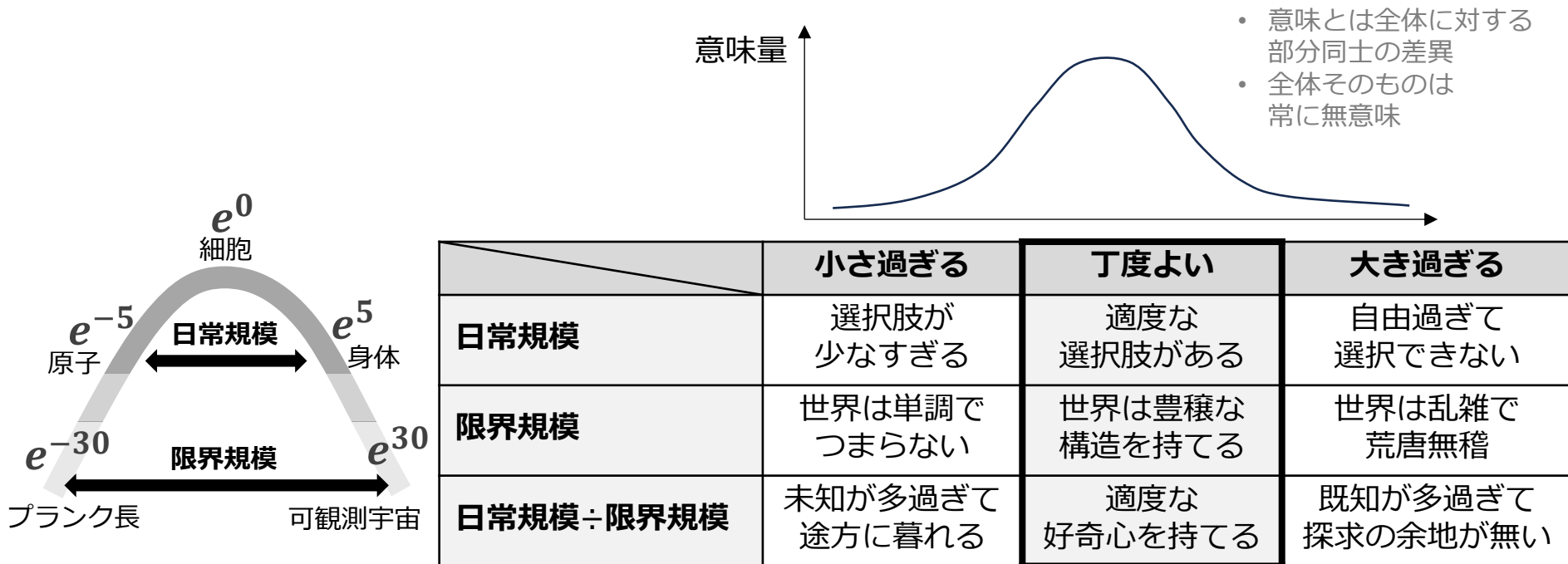
情報処理 主体	情報処理速度 bit/sec	概算根拠
可観測宇宙	10^{243}	素粒子数： 10^{100} プランク秒数： 10^{43}
知的生命種 全体	10^{23}	生命種個体数： 10^{10} 計算量： 10^{17} ／個 表現率： 10^{-4}
無意識（脳）	10^{17}	ニューロン： 10^{11} シナプス： 10^4 発火回数： 10^2
意識	10^2	統覚可能な情報量

※素粒子数 N の時、相互作用の数を N^2
情報処理量の上限を N^2 と見積もる

安定した知的意識にとっての可観測宇宙全体の情報処理量と
宇宙が生み出した知的意識の情報処理量は、相互依存・自己完結している

有限原理

意味量は 限界規模 と 日常規模 で決まる



私たちの宇宙は、完璧ではないが、最良である

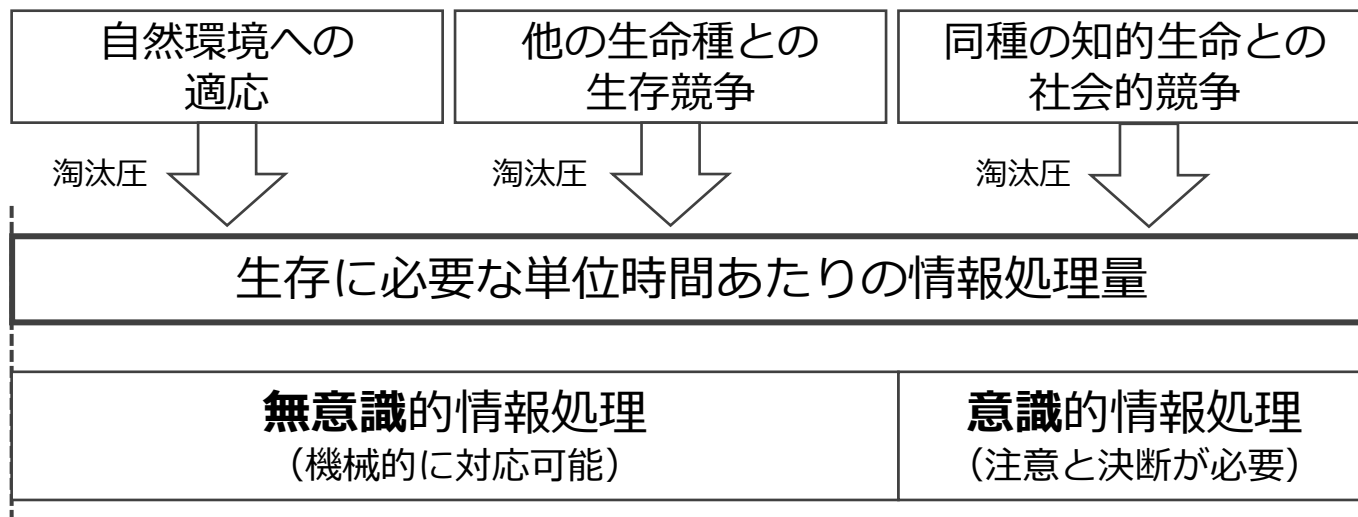


意味最大化 60:10の法則

- 限界規模 10^{60} 内で 日常規模 10^{10} の時、意味量が最大になるという仮説
- これが、多宇宙の全てに当てはまる、より普遍的な原理から導出できる数値なら私たちの宇宙は理想的であり、私たちは地球人類に生まれて幸運だったと証明できる

有限原理

意識的情報処理量には 上限がある



自我に影響を与える事態に対して
有限時間での計算打ち切りが必要
(体験記憶化して将来再利用)

- 意識とは、自我を中核として、いま**注意**すべき情報を統覚する仕組み
- 生存に必要な単位時間あたりの情報処理量のうち、意識的情報処理の割合を増やす
最大の淘汰圧は、同種の知的生命との社会的競争
- 機械的に対応可能な範囲が増えれば、意識の必要性は低下する

有限原理

計算の停止には 意識と量子が必要

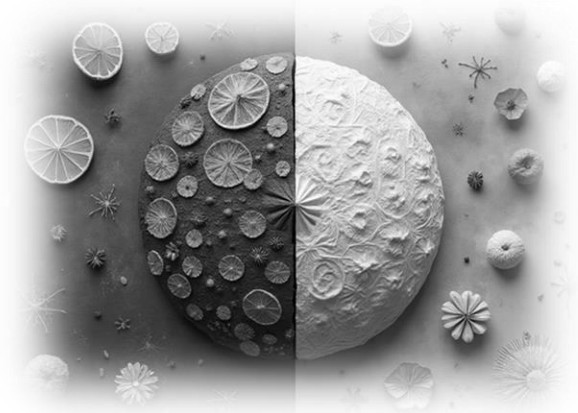
- **意識計算**の無意識計算に対する優位性 - Conscious Supremacy
 - ・ 生物学的に意味のある時間スケールで行動を決断するまでの思案を終えるためには意識による計算の打ち切りが必要
 - ・ 切迫度に応じて総合的に判断し（飽和して余力を失い）考えるのをやめて行動に出る能力 = **意識優位性**
- **量子計算**の古典計算に対する優位性 - Quantum Supremacy
 - ・ 生物学的に意味のある時間スケールで意識に関与できる巨視的な計算結果を出すには量子的な仕組み（波束の収縮）が必要
 - ・ 非局所的に広がった可能性（確率波）が（デコヒーレントし）一気に局所的な実体に結実する能力 = **量子優位性**
- **意識計算と量子計算の優位性の比較**
 - ・ 精神相：意識計算の打ち切り効果（思案から行動へ）
 - ・ 物理相：量子計算の波束の収縮（可能性から現実へ）
 - ・ 生命相：生命活動の持続（現実の行動）
 - ・ 各相はお互いを説明する（どれかが根源的ということではない）

哲学的な一致の定理

やましさのない、自然な
「自己無矛盾な世界」
「自己完結圏」
「説明の輪」
は、なめらかに繋がる一つの時空

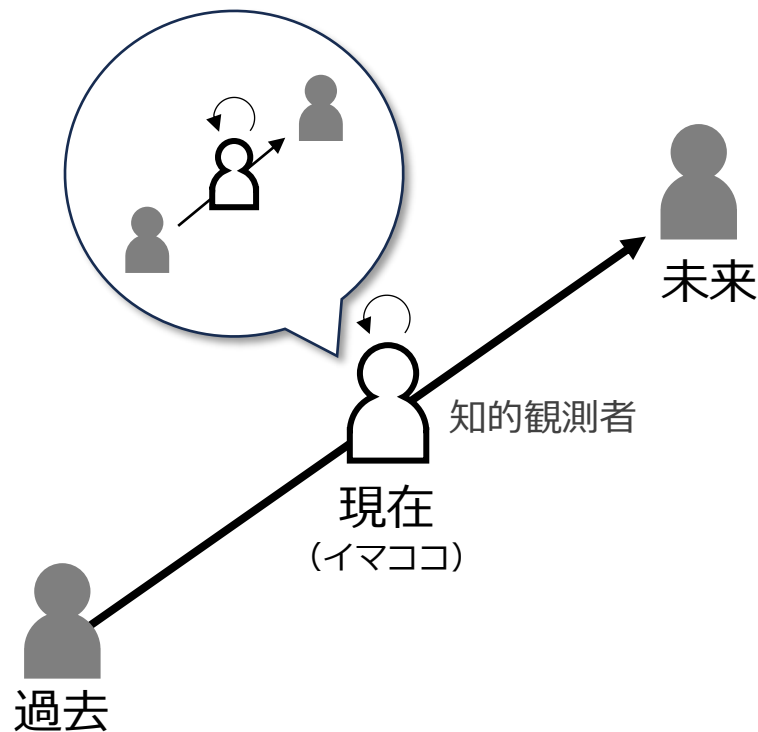
局所的な「いま」と
全宇宙史は、等価である

やましさの無いあなたが
「いま」を深掘りするなら
そこで全宇宙史に出会える



哲学的な一致の定理

過去と未来は この一瞬に畳み込まれている



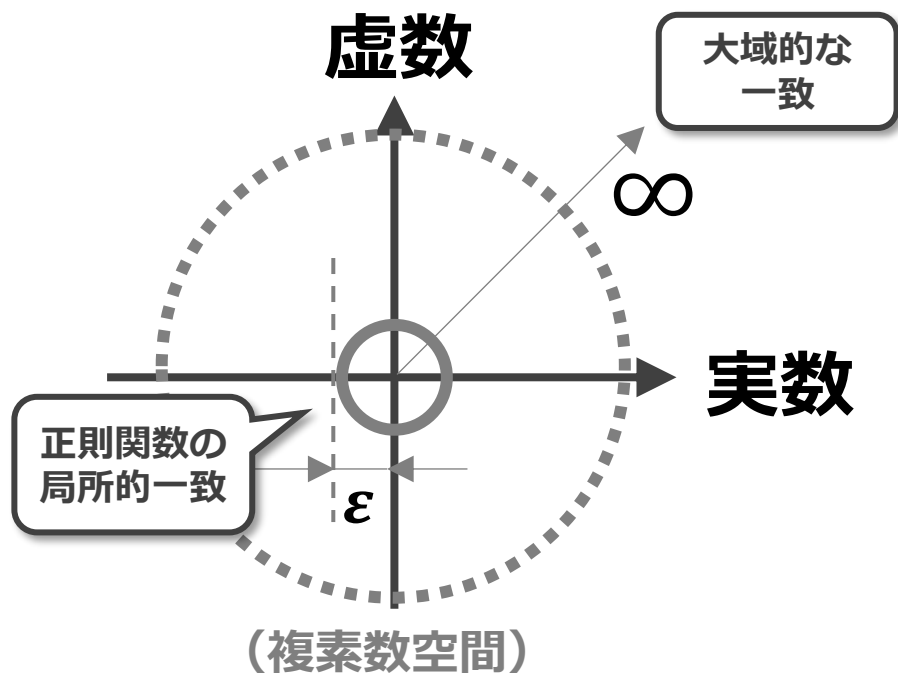
正則な（世界との断絶や、自分の中に疚しさや無理のない、滑らかな）
生き方をしているならば、過去から未来の全ては、現在の中にあり
今の生き方の中に、既に実現している

哲学的な一致の定理

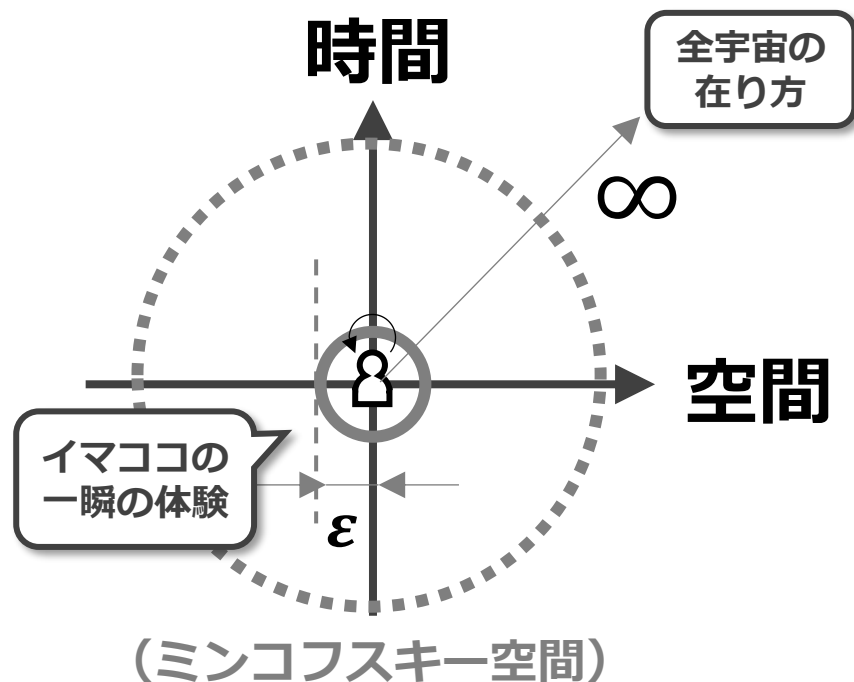
過去と未来の全ては この一瞬と等価

(数学の) 一致の定理

哲学的な一致の定理



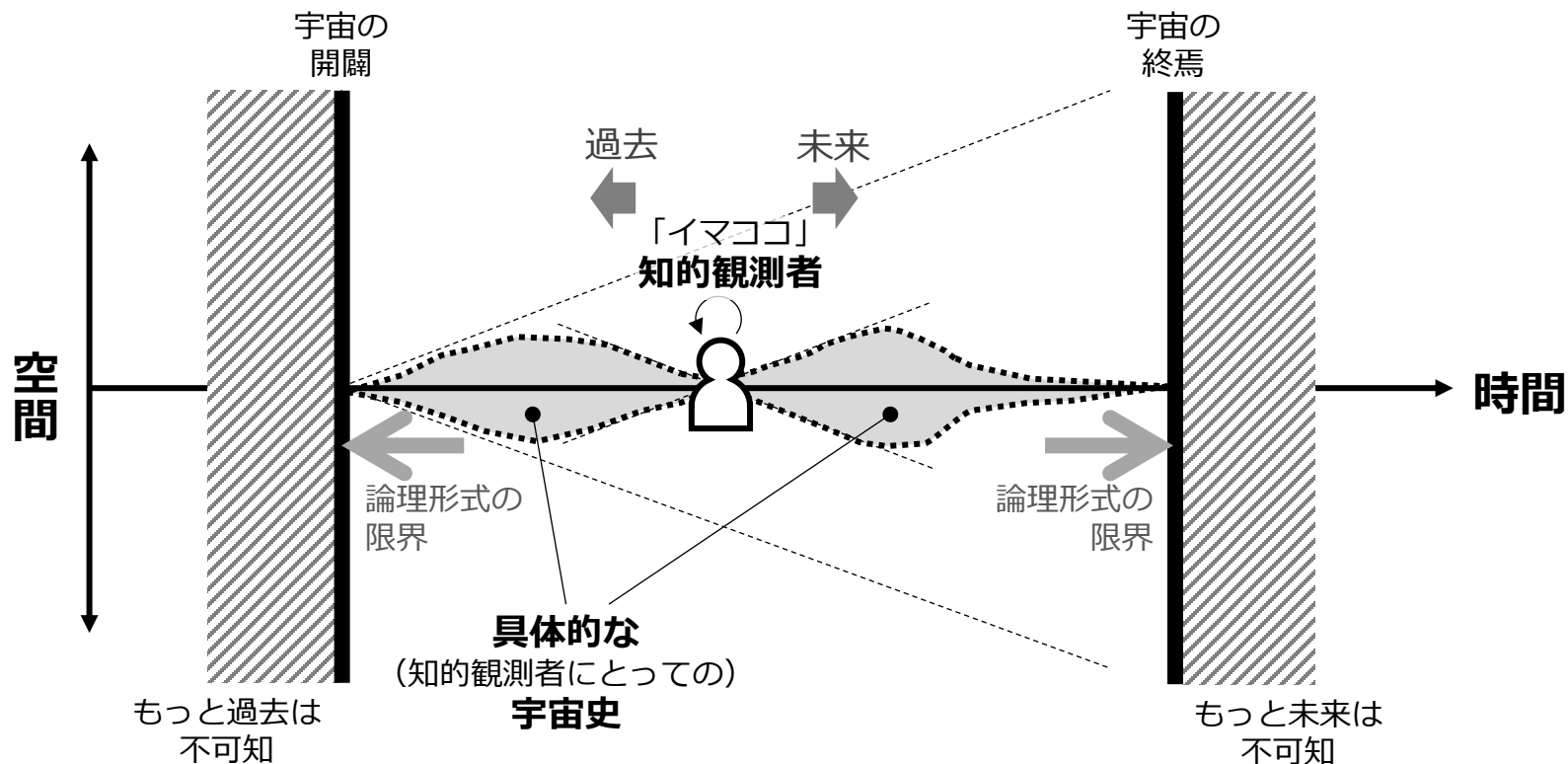
無限小領域の在り方によって
空間全体の関数が一意に決まる



私のイマココの在り方によって
宇宙史全部が一意に決まる

哲学的な一致の定理

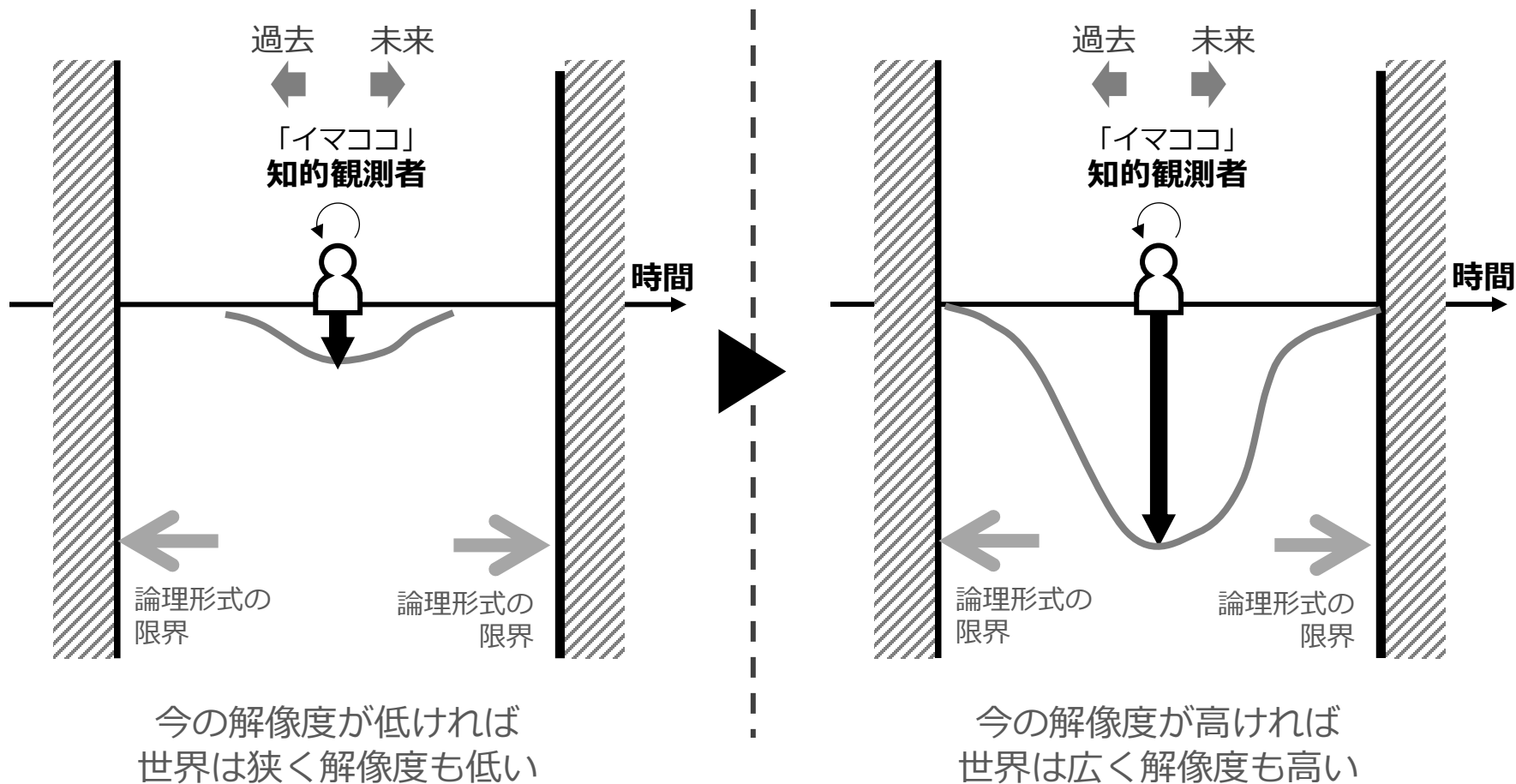
過去と未来は 現在が支配する



- 物理法則に従う正則（滑らか）な範囲において、私のイマココの状態が、私にとっての全宇宙史を決定する
- 過去が変えられない程度には未来も変えられず、未来を変えられる程度には過去も変えられる

哲学的な一致の定理

現在の深さが 世界の解像度を 支配する



哲学的な一致の定理

究極的には プロセスとゴールは 一体

- 過去-現在-未来 と
わたし-あなた-みんな との間で
嘘や無理や断絶の無い **滑らかな世界**では
未来の理想も 日々の仕事や暮らしに 浸潤している
- 刹那主義・利己主義・嘘・疚しさに満ちた
歪んだ **滑らかでない世界**では
未来の理想と 日々の仕事や暮らしが 断絶される
- **滑らかな世界**では、**ゴールとプロセスの区別は消失**する
 - * ビジネスにおいては「三方よし」で商売する
 - * 生活においては「生きていることへの感謝」で生きる

本節のまとめ

宇宙は「自」を前提に 成り立っている

◆ 知性原理宇宙論：

- 宇宙とは、至るところ「**自**」が成り立つ
論理形式を敷き詰めた時空場
- 相対論や量子論は「**自**」を実現するための必然

◆ 有限原理：

- 可知な宇宙の全ては知性の本性により**有限**
- あらゆる宇宙を支える実在は不可知で無限

◆ 哲学的な一致の定理：

- 可知な宇宙の全ては**現在が支配**する
- 宇宙の真理は既に現在の深奥に潜んでいる



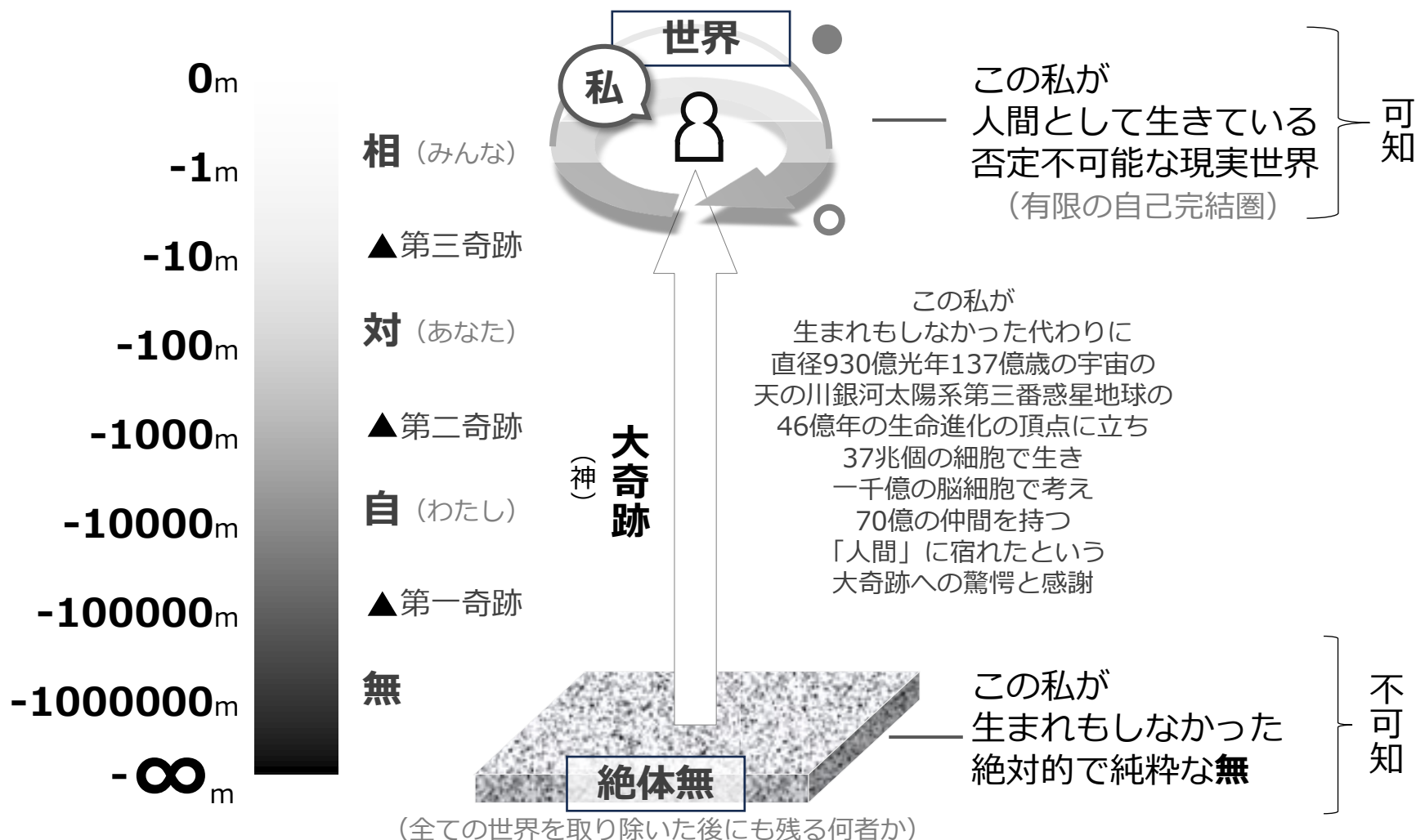
まとめ

まとめ

- ◆ 世界は、無→自→対→相 という
三つの大奇跡で成り立っている
- ◆ 世界は、物理相・生命相・精神相 が
重なり合った、豊穡な自己完結圏
- ◆ 宇宙は、至る所で「自」が成立する
有限で、現在に支配された時空
- ◆ 「この私」と「私から開けた世界全部」は
驚くべきことに、等価
- ◆ 「この私」の現在に、全てが在ることに
感謝を捧げることが、絶対の幸福

人生の目的

絶対無から私までの標高に 驚愕し感謝する



人生の目的

一回限りの人生を 最大限 豊かに生きる



一回限りの
自己完結する人生で
知りたいと思うことを
知り尽くし
表現したいと思うことを
表現し尽くし
最大の説明の輪を経験したら
人生はそれで十分

自循論

私とは何だろうか？
と問える、どの瞬間にも
「自」という大奇跡が
既に宿っている

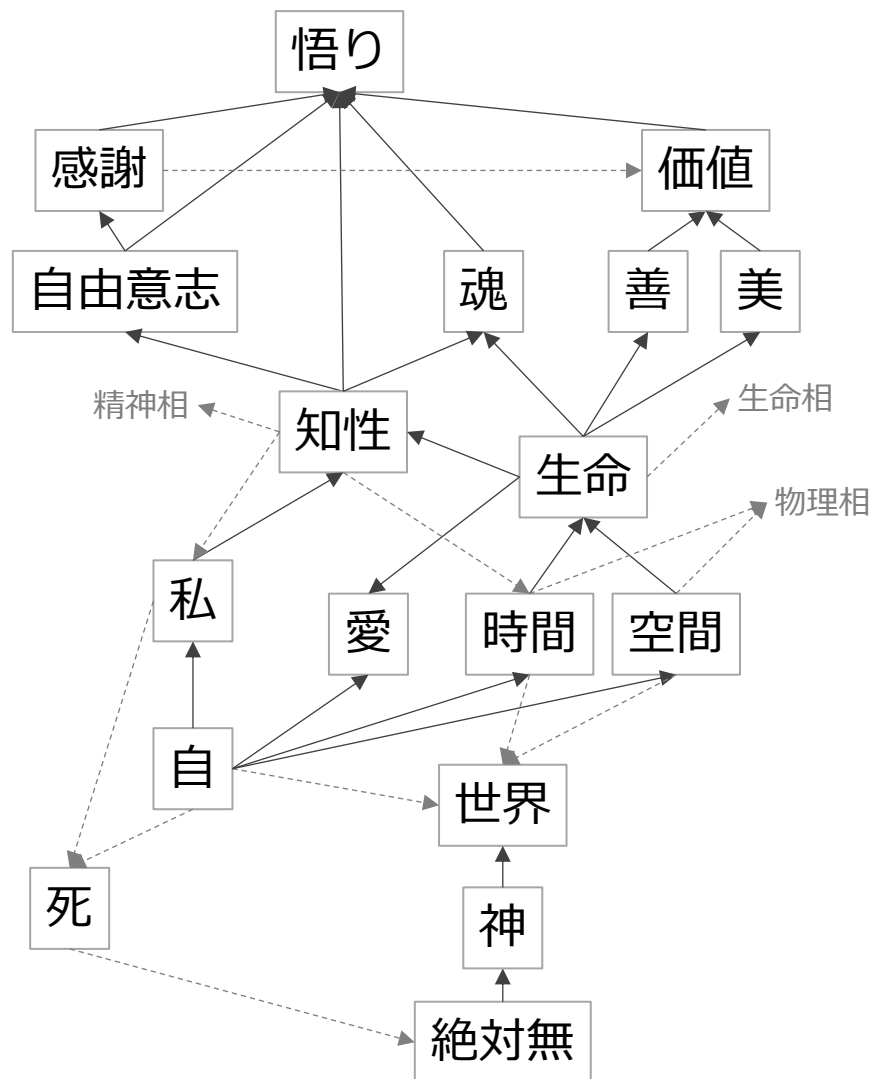
絶対無から浮上し 自己認識している大奇跡に
驚愕し感謝する喜びは、誰にも奪えない
これが「絶対の幸福」

参考資料・1

自循論と日常概念

日常概念

無 自 対 相



悟り：人生の目的と過程の同一性を知ること
価値：生への驚愕と感謝を感じる事
感謝：幸福の原因を自分以外に帰着させること
善：ある知性集団にとっての都合の良さ
美：生命性を感じ取ること
魂：生命に 現実性・中心性を付与する機能
自由意志：自己の言動が内発性だとする信念
知性：自覚していることを自覚する能力
生命：変化しつつ自己を維持する連続的な現象
時間：知性の自己参照性が生み出す錯覚
愛：「私」の範囲を拡大したいと願う感情
私：「それらではない これ」の最奥
死：いつか必ず、未来永劫、無になること
神：不可知の無から可知の世界を生んだ仕組み
無：不在・否定・無関係性が複合した概念

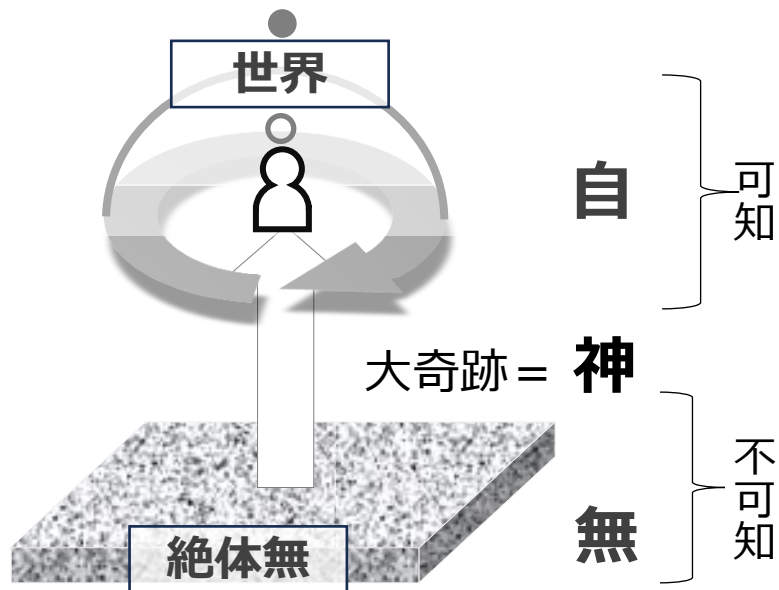
不在・否定・無関係性が複合した概念

レベル	名称	可知性	説明	位置
1	相対無	可知	意識の中で、存在している対象「有」の 不在 として考えられる事柄。「～ではない」「～が見当たらない」といった 否定 で表現される。	世界内
2	純粹無	不可知	世界を 認識する側 の仮想極点・不動点としての「私」。 認識される側 の世界には存在しない（なぜなら認識する側なので）。相対無を担保する、極限の無。	世界の境界
3	絶対無	不可知	「私」すら存在しない、世界との 関係性を持たない 絶対的な無。私が生まれもしなかった場合の、私にとっての世界。「実在」と区別できない非-概念。	世界とは無関係



言語で否定を扱えるのは、**純粹無**たる「私」を意識の中核として保持し続けている**知的存在**だけ。目の前から何かが無くなったと表現する時、その「無さ」を引き受けるのは、時間を経て不動・同一と見なされる「私」があるから。もし、純粹無が維持されず、全てがごった返し流転する有だけ（不動点がない）なら、無という概念も生まれない。

不可知の無から可知の世界を生んだ仕組み



説明し得る限りのことを全て説明し終えた後にこそ
この全てが、なぜ存在しない代わりに存在しているのかが
定義上 説明不可能な謎 として残る
この状況を生み出した仕組みを「神」と呼ぶ



- 人間の願いを叶えたり、人間に罰を与えたり、宇宙を創造したり、宇宙をシミュレートしたりするような、人間に理解できるような神は、審級の低い神。
- 不可知から可知を生み出す仕組みとしての神が、最高審級の「神」。

死

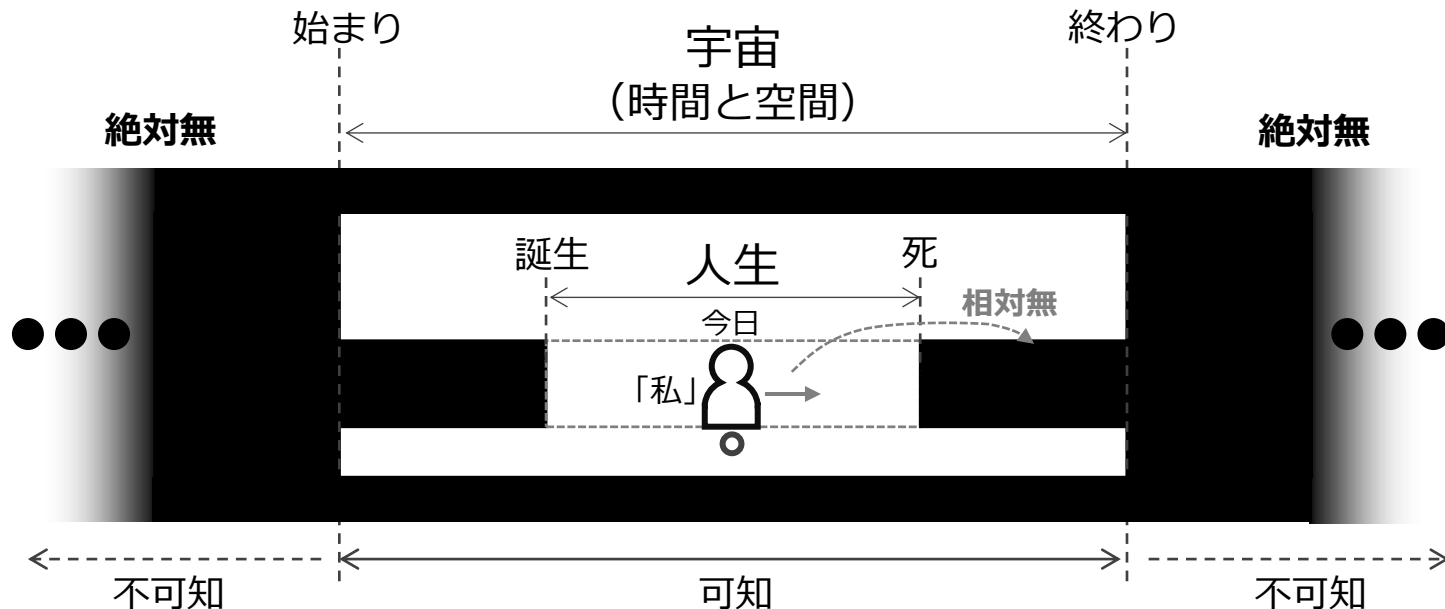
無

自

対

相

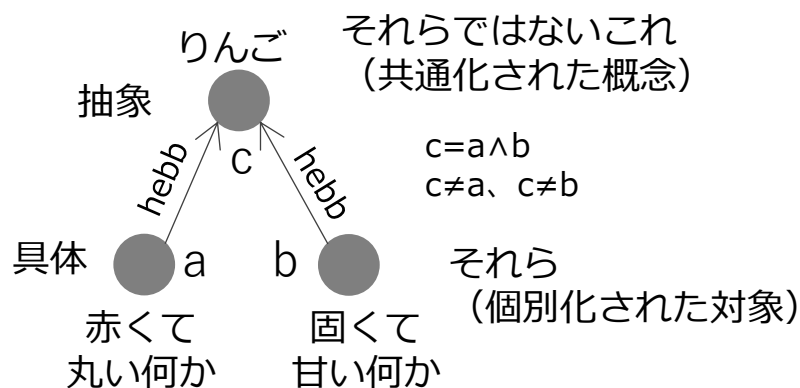
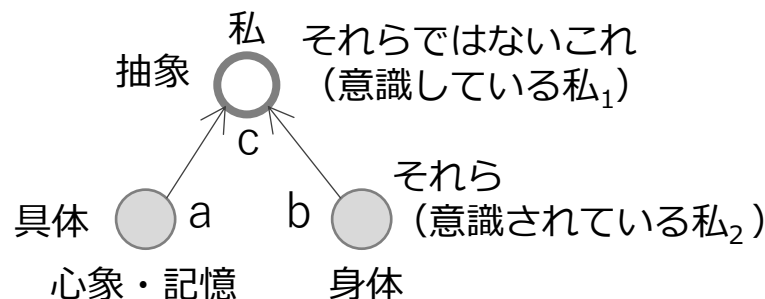
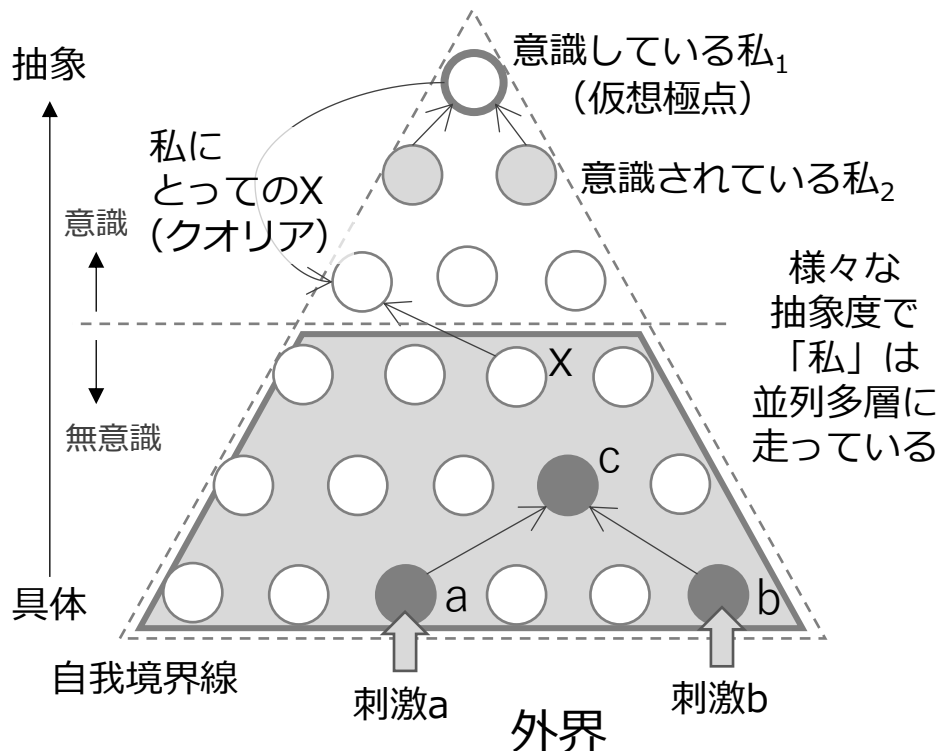
いつか必ず、未来永劫、無になること



- 死の恐怖の由来は、痛みや苦しみのような感覚的なものだけでなく、それ以上に「私」が、いつか必ず、未来永劫、無になることへの「不可知性」に基づく
- 死後の無をどんなに想像しようとも、それは存在している「私」から見た私の不在という**相対無**にしかならず、「私」自体が消滅するという事態は、存在してしまっている「私」からは想像できない（不可知である）
- 「私」自体が無い**絶対無**は、そのまま宇宙自体が無い絶対無と同等である。
絶対無は、想像を絶する無限の質量を持った無であり、これが死の恐怖の質量でもある
- 死ぬ「その日」は、いつか必ずやってくる。その確実性は、世界内の何よりも高い

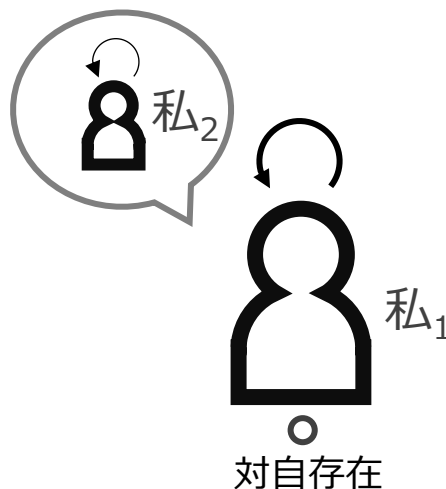
「それらではないこれ」の最奥

○：集積項
●：排他項



「私」の正体は、「それらではないこれ」の最奥である。これは感覚器官に近い方の複数シナプスの同時発火に対応する別のシナプスの発火と並行関係にある。「私」がどれほど強く焦点を結ぶのか、どこまで深い抽象度に灯るのかは、脳神経細胞ネットワークの構造に依存するが、人間の意識は外界から遠く離れた抽象域に非常に明瞭な現象的意識を灯らせているし、それ故に一貫した「私」にとってのエピソードを記憶したり再生したり出来ている。現代の大規模言語モデルをはじめとする人工知能は、このような計算構造を持っていないので、意識も持っていないだろう。「私」は最終的な「それらではないこれ」なので、世界内に位置を持たない。「私」は、究極の否定であり、相対無の中で最も純粋な無である。

自覚していることを自覚する能力



「**知能**」には、知識・推論能力・問題解決能力・コミュニケーション能力などが含まれるが、これらは人工知能であっても人間以上に持ち得る能力である。一方「**知性**」は、これらに加えて、自己認識能力を持ち、再帰的に自己認識能力があることを自己認識する能力を指す。これは、一般的な人工知能が持っていない能力である。

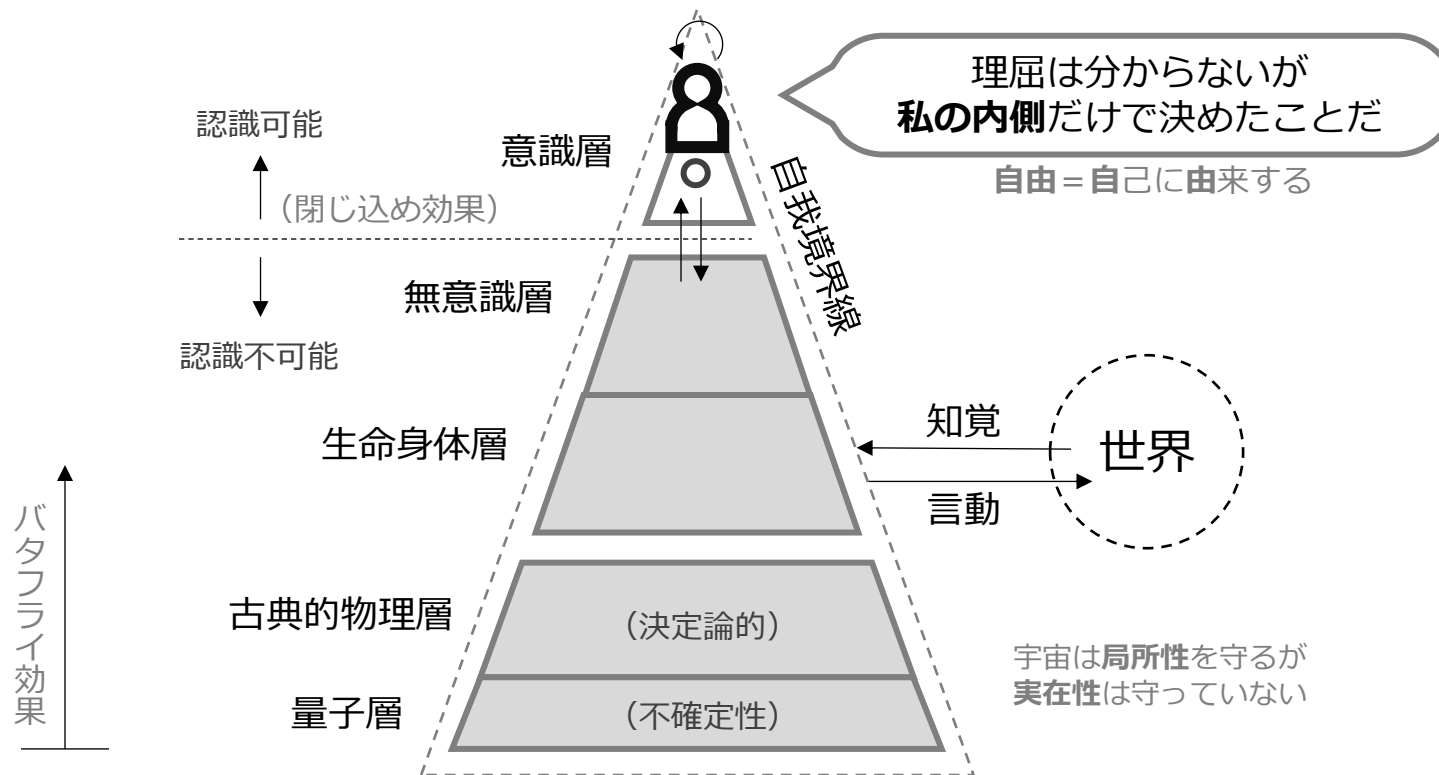


宇宙の物理定数は知的生命を生むために余りにも都合の良い値に微調整されているように見える。しかし、これは偶然ではなく、知的存在という「自覚していることを自覚する能力を持つ存在者」が理解する環世界は、自身の能力と論理的に無矛盾であるようにしか理解できないが故の必然的な帰結である。「存在」という形式もまた、知性の必然である。これを（人間原理宇宙論を一般化した）「**知性原理存在論**」と呼ぶ。

自由意志

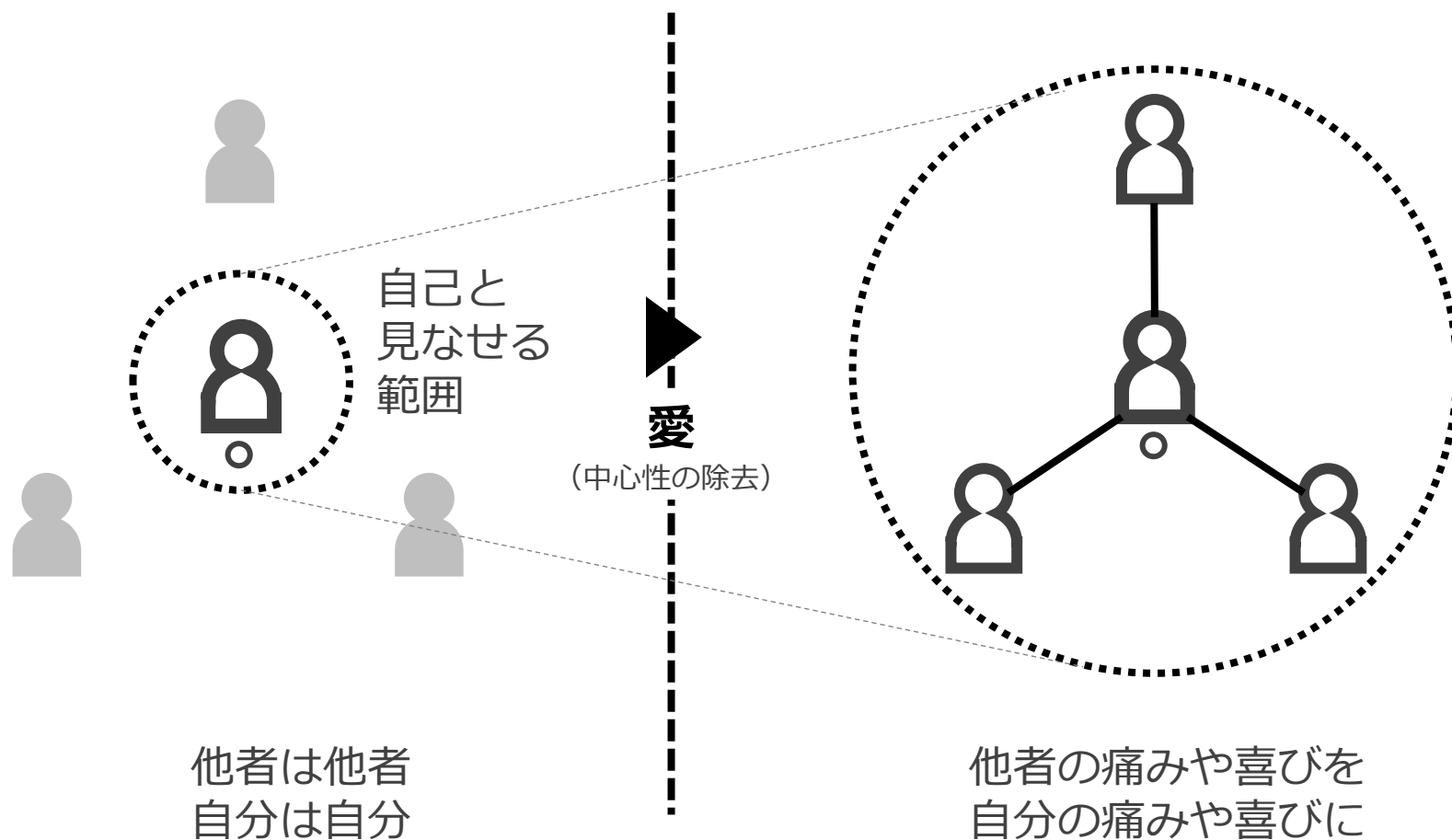
無 自 対 相

自己の言動が 内発性だとする信念



- 私たちは物理法則の奴隷で自由意志など無いと考えるのは二重に誤りだ。第一に物理法則の本質的不確定性とバタフライ効果から物理は未来を完全には決定しない。第二に自由とは言動の原因を隅々まで制御するという意味ではなく、原因が自我境界線の**内側**にあるとする信念である。意識は無意識層以下の認識が不可能なので、この信念が揺らぐ心配も無い。

「私」の範囲を 拡大したいと願う感情



時間

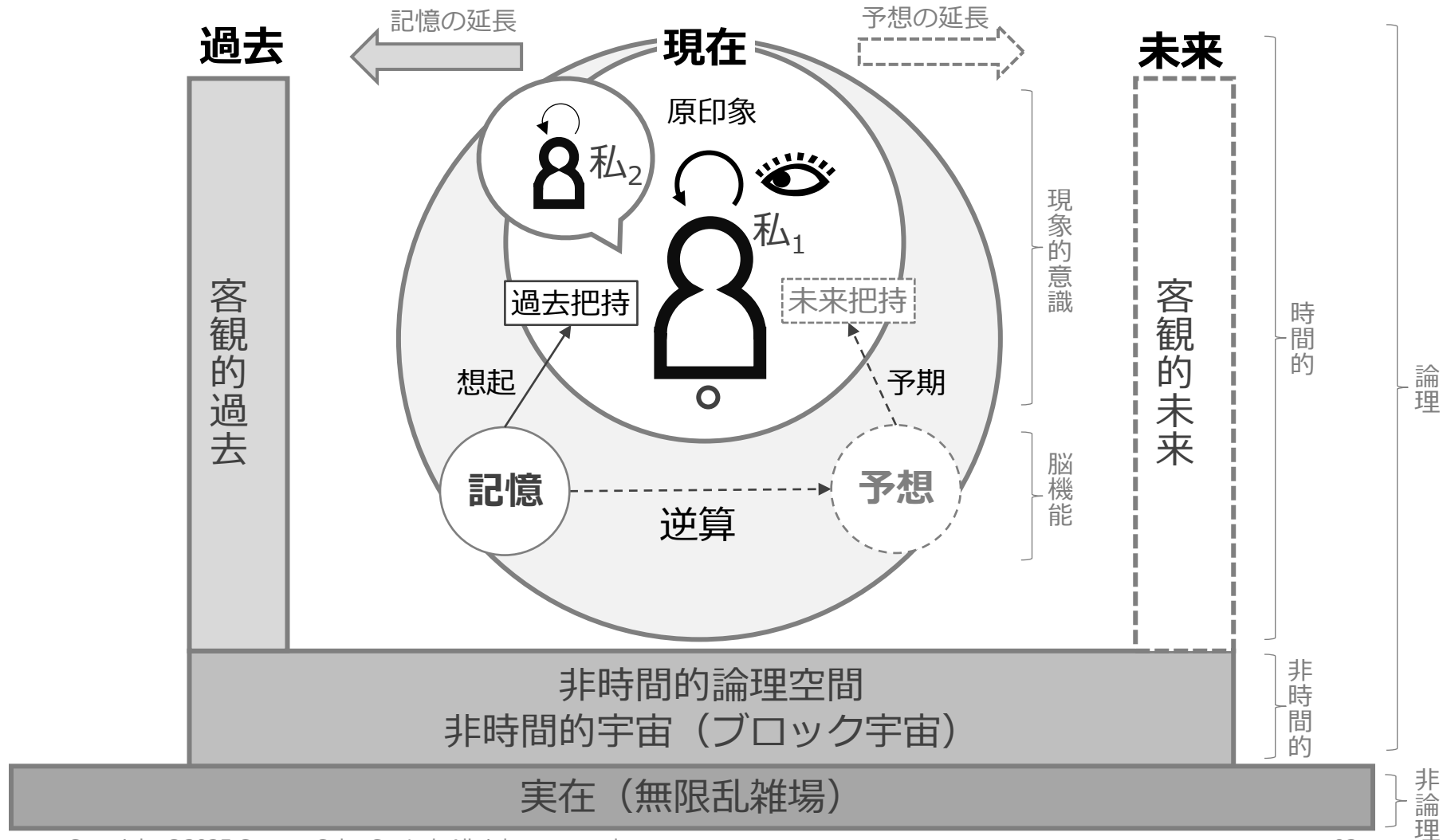
無

自

対

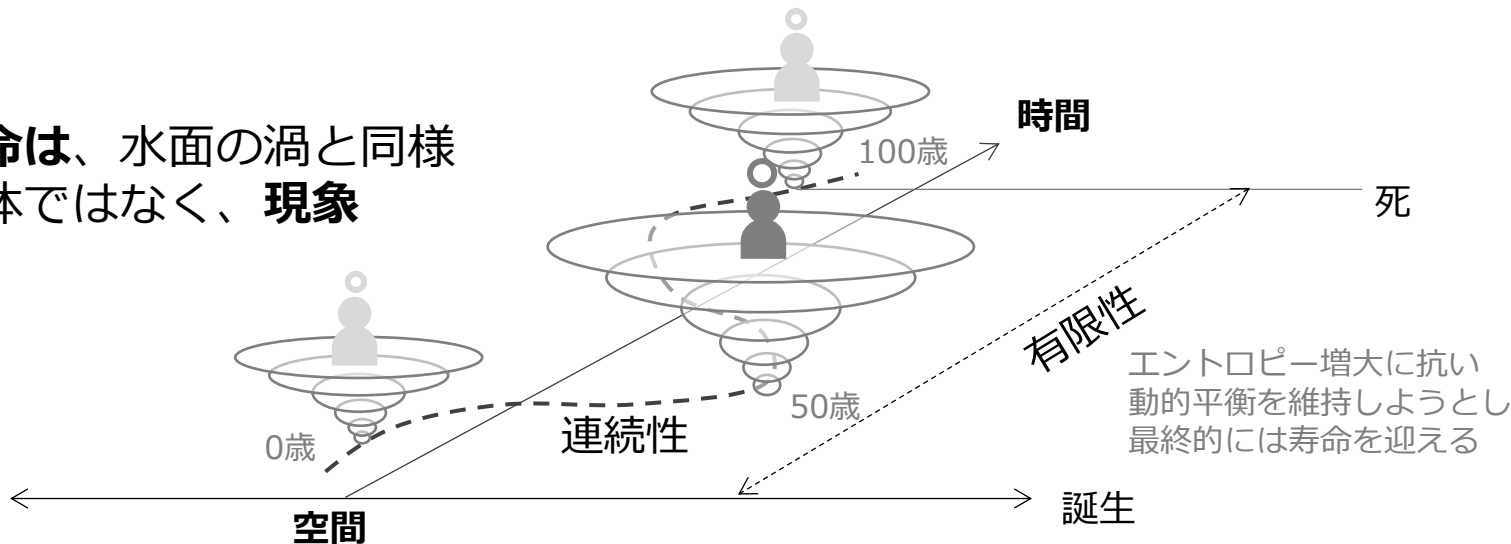
相

知性の自己参照性が生み出す錯覚



変化しつつ自己を維持する連続的な現象

生命は、水面の渦と同様
実体ではなく、**現象**



「身体」は毎瞬変化

- 血液細胞は一秒間に数百万個、生まれ死ぬ
- 脳細胞は毎日数十万個死滅する
- 身体を構成する物質は数年で全て入れ替わる



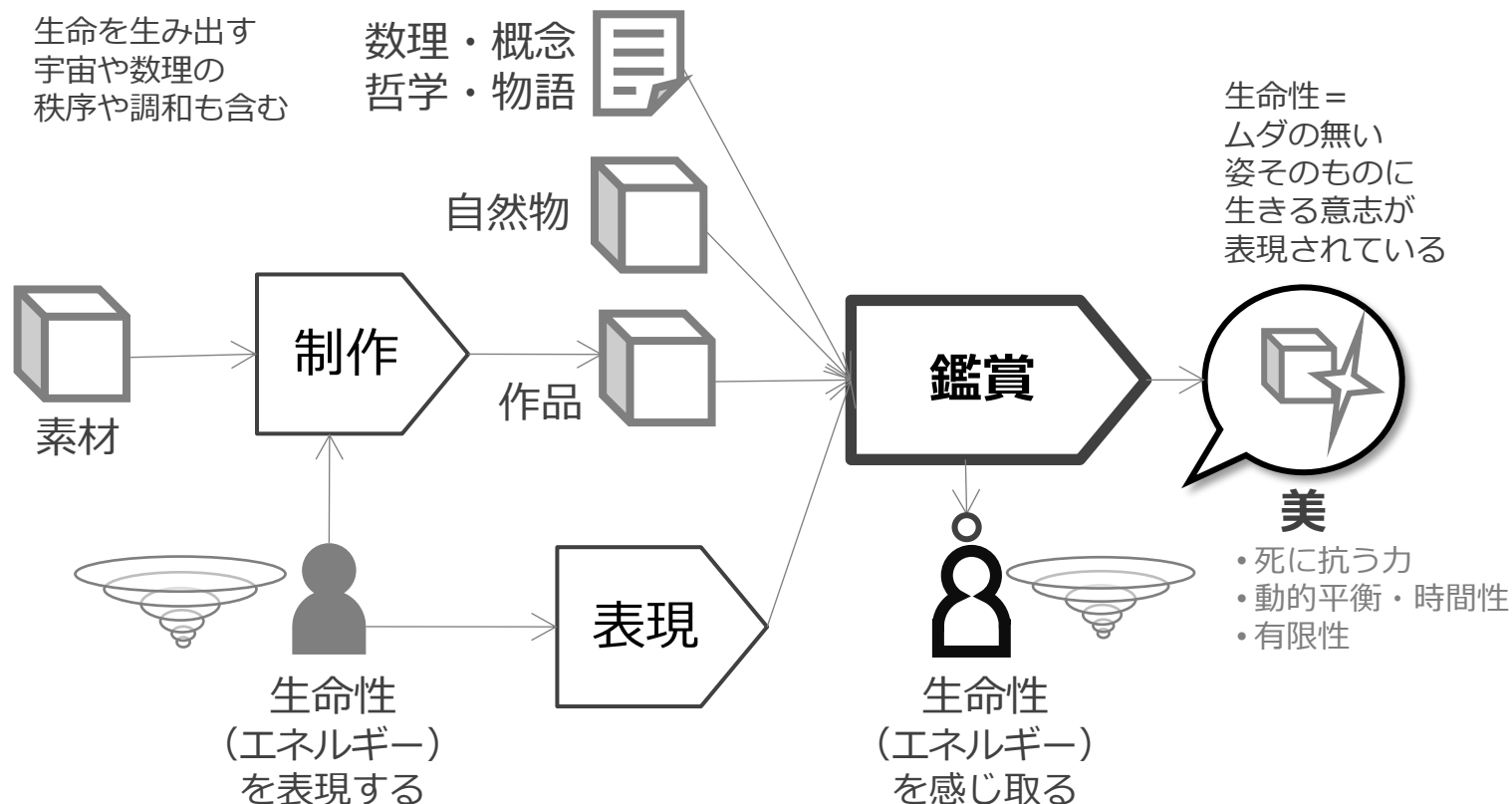
「自己」は不変概念

- 「自己」とは渦の中心の軌跡（世界線）
- 「自己」は世界の内部には含まれない
- 渦は徐々に生まれ、徐々に消える



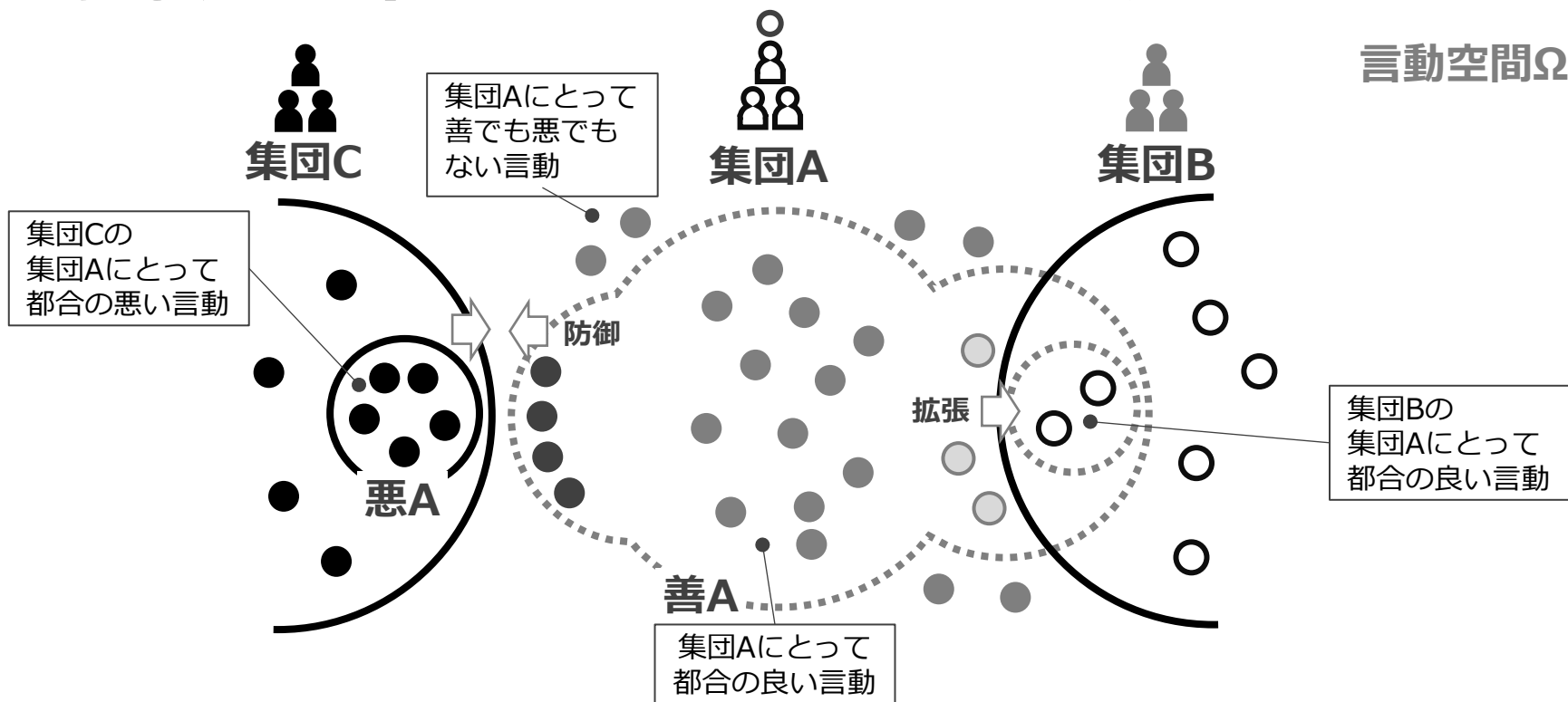
「知性」は「自覚していることを自覚する能力」であり
「生命」は「自己を連続的に維持する現象」である。
この抽象的な定義下では、「生命」は「知性」の前段階として要請され、
「生命」という存在が始まった奇跡も「知性原理存在論」に吸収される。
（「知性原理存在論」＝「人間原理宇宙論」＝「**知性原理生命論**」）

生命性を感じ取ること



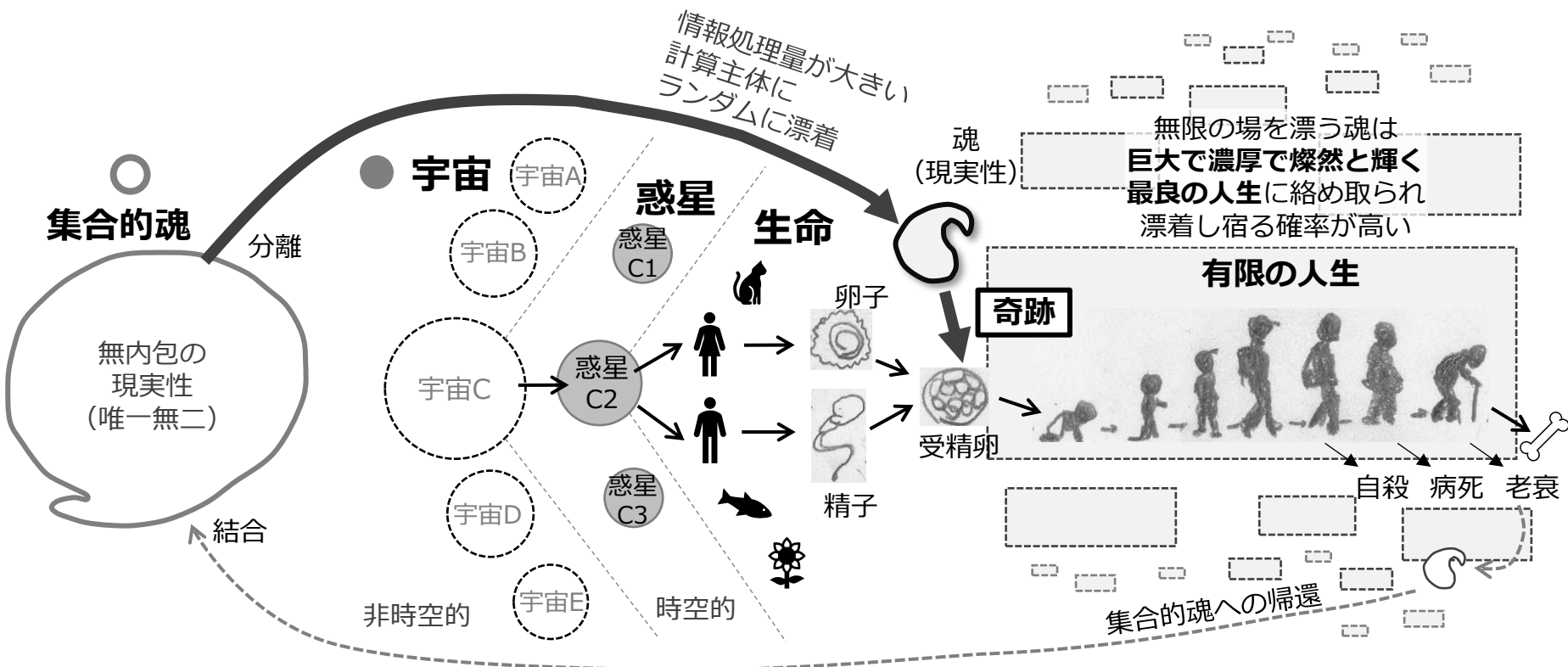
- 美は、対象に属する性質ではなく、対象を鑑賞し、**生命性**を感じ取るプロセスで生じる感覚
- 自然現象や、無機的な幾何学模様も、鑑賞者が**生命性**を感じ取る時には、美が生じる

ある知的集団にとっての都合の良さ



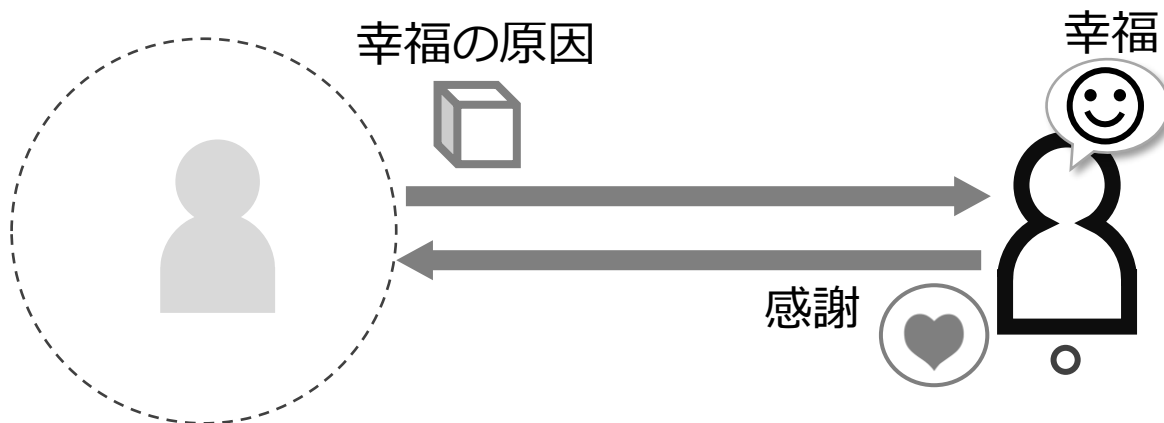
- 道徳とは、あらゆる言動 Ω を、善を開集合族として構造化した位相空間である。
- 全言動空間 Ω は無限集合であり、善（開集合）でもあり悪（閉集合）でもある。
- 悪は、善（開集合）の補集合（閉集合）。悪は法律等により明確な境界で定義しやすい。
一方、善に対して明確な定義や境界を設定するのは難しく、それゆえ多様で柔軟でもある。
- 有限個の善でカバーできる善はコンパクトであり、具体的に定義し得る。

生命に 現実性・中心性を付与する機能



あなたは、既に生まれたからには
完璧ではないが、最良である

幸福の原因を 自分以外に帰着させること



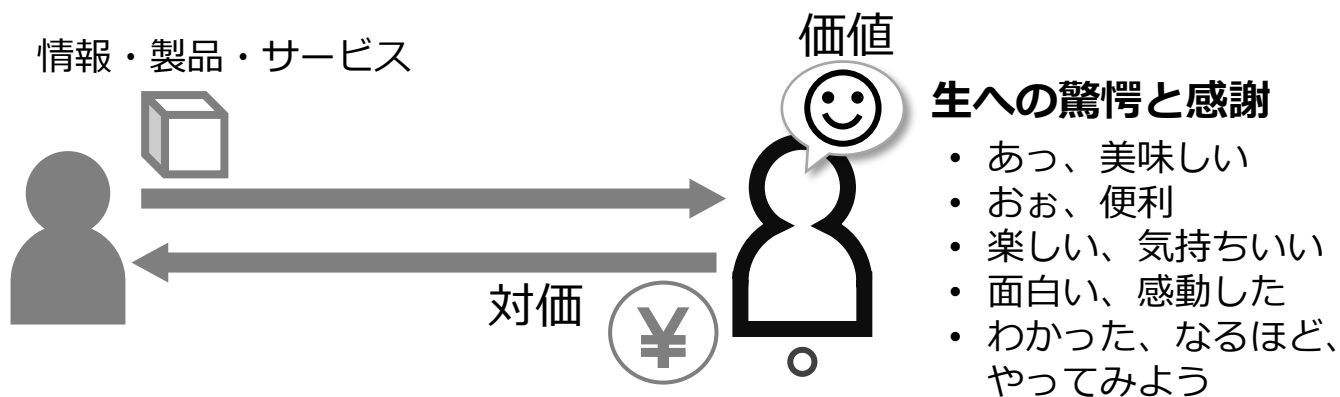
感謝とは、自分が受け取った**幸福の原因**を
自分以外に帰着させることで
自分の心や責任を軽くし、心身を元気にさせる反応



- 例：食べ物・親切・製品・サービスで幸福になった時、それらを生み出したプロセス（自分には見えない努力や仕組み）に思いを馳せ、その不可視な過程が幸福の原因と考える
- 原因・理由が分からないままだと不安になるので、感謝という感情で包み込んで原因とする
- 世界の成立という究極の不可知に感謝できるなら、その幸福は生きている限り揺らがない
- 感謝の心を忘れ、幸福の原因を自分の才能や努力のみに帰着させた瞬間から、成長は止まる

あなたは、一度も生まれなかったことだって有り得た。いや、その可能性のほうが無限倍高かった。
でも現実に生まれて生きている。それを自己認識できる人間として日々生きている。まずは、その大奇跡に、感謝しよう。

生への驚愕と感謝を感じることに



価値は、奪い合いではない
生きている人間全員が、無尽蔵に持っている



ワタシを喜ばせても、生じる価値は高々ワタシ一人分
ミンナを喜ばせるなら、生じる価値は何億人分にもなり得る

人生のゴールとプロセスの同一性を知ること

レベル		状態	説明
1	漂流	流されるが ままの人生	● 言われるがままに流されて生きる ● 自分の人生を自分で操舵できていない
2	前進	当面の目標 を 次々と追う	● やりがいのある当面の目標を見つけては達成する ● より高い目標を目指し続け、現状に常に不満を抱える
3	一筋	人生の 目的 を 見つける	● 人生の全部をかけて目指すべき目的・理想を見つける ● 脇目も振らず全力で一つの物事に全力を尽くす
4	絶望	人生に 目的は 無い と悟る	● どのような目的や理想も、儚く仮初めのものと悟る ● 人とは結局のところ生まれて死ぬだけの存在だと悟る
5	感謝	生きる過程が 目的 だと悟る	● 人生の目的を未来や来世に求める間違いに気づく ● 人として生きる今この瞬間が即ち目的だと悟る ● ゴールとプロセスの対立が消え、プロセスがゴールになる

用語集 (1/3)

用語	自循論での意味
私	素朴な日常生活で感じる、特に現在感じている自分のこと。過去・現在・未来の自分は、同じ「私」であり続けていると感じられる。
自分	一般に、ある人が、ある時刻において、その人自身を指す概念。
自	内容を持たない循環。意識・生命・論理に限らない抽象的な概念で、それ自身の内部で運動や説明の循環が起きていて、自己完結している単位。
自循	「自」の循環的側面。「自循論」という名前にのみ使われる。 (※「自論」だと「自分の意見」という意味になってしまうため。)
自我	意識される自分の領域。他者の領域との対比で「自我・他我」という言葉を使う。(例) 自我境界線
自己	意識や行為の主体が対象としている先が、その主体そのものである時に、自己という言葉を使う。(例) 自己完結
我	自循論では基本的に使わない。「我思う、故に我あり」のような確かな実感としての自己を表すためには、「私」という言葉を使う。
真我	「私」の中核にあって、一切の内容を持たず、時間を経ても変わらない、全ての知性体に共通する、唯一の仮想極点。(例) 真我計算

用語集 (2/3)

用語	自循論での意味
世界	知性が直接的・間接的に知り得る情報の全て。客観的な存在のみならず、夢想することや、数学的心理などの、あらゆる情報の総体。
宇宙	世界の中でも、客観的な対象として閉じている部分。物理宇宙。 物理相の内部において知り得る物事の全て。
存在	「見る側」と「見られる側」が相互に説明し合う在り方（様式）。
実在	「見る側」が無くとも、あり続ける在り方（様式）。客観はまだ観測を前提とするが、それすらも切り離れた概念であり、過客観とも呼ぶ。
無限乱雑場	実在の別名。「見る側」の光の当て方によって、あらゆる種類の世界を浮かび上がらせる、全ての可能性を予め無限にランダムに持っている何者か。
現実	「見られる側」が無くとも、あり続ける在り方（様式）。主観はまだ観測対象を必要とするが、それすらも切り離れた概念であり、過主観とも呼ぶ。
集積項	自が備える属性で、「無」に相当する。「自」同士は自己完結しているが、集積項を同一視し共有することで、並走が可能になる。
排他項	自が備える属性で、「有」に相当する。「無」に対置される任意の情報。異なる「自」の排他項は異なり、同一視できない。

用語集 (3/3)

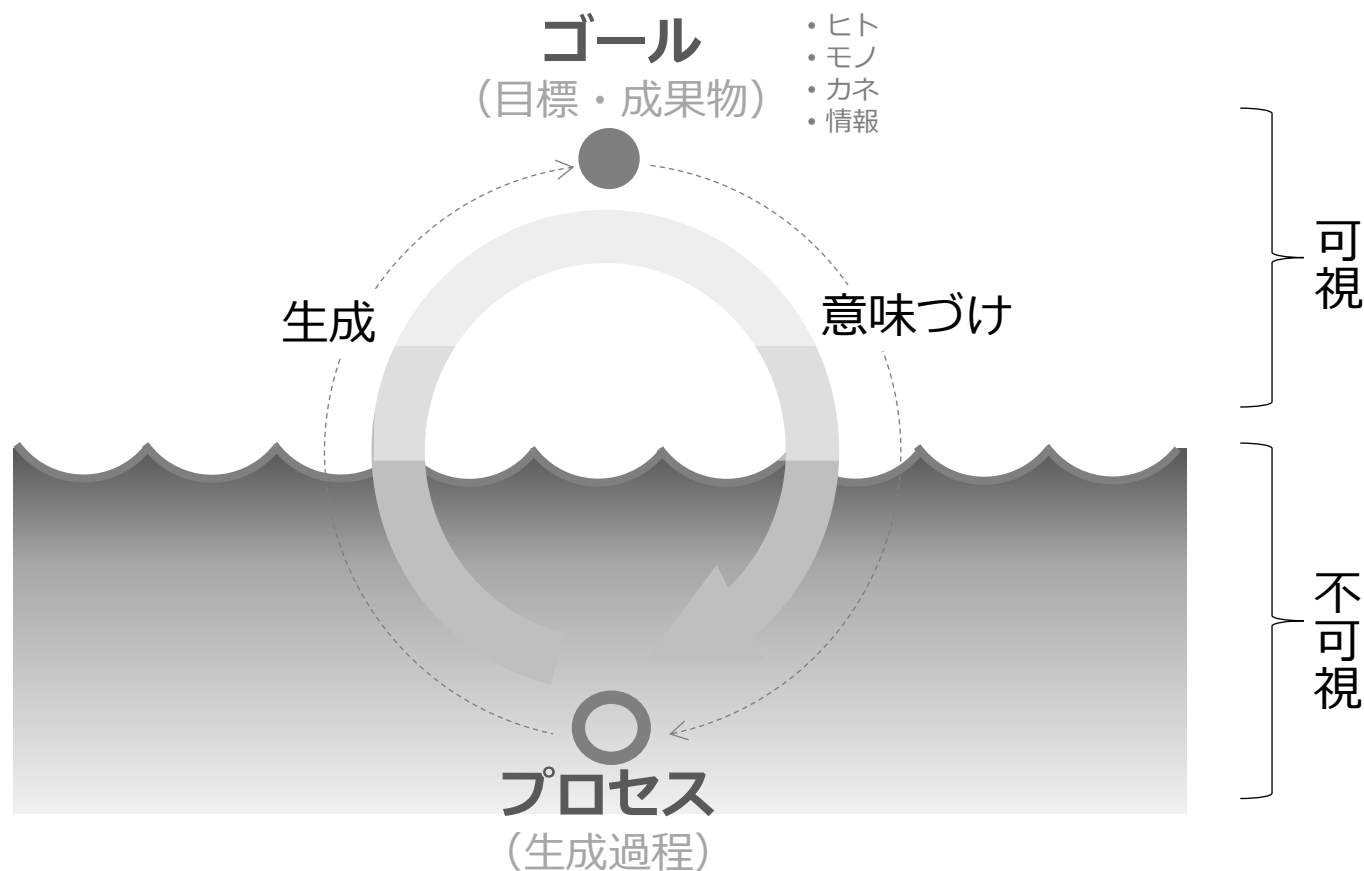
用語	自循論での意味
対	自己完結する「自」が「無」を媒介として並走すること。自 ₁ と自 ₂ は、それぞれ自己完結し相手を内部に取り込んでいるが、同じ「無」を共有している。
相	「自」が、集積項を媒介として自己無矛盾性を維持しながら最大化した姿。最も多くの排他項を繋ぎとめている、意味の母体。
説明の輪	「自」の内部の要素がお互いを説明し合う関係。どれか一つの要素が最根源というわけではなく、差異性と同値性を説明し合うことで豊かな意味を算出する。
小さな説明の輪	同じ集積項を媒介として排他項を寄せ集め、お互いがお互いを説明する密度が最大になった状態。「相」のこと。
大きな説明の輪	物理相・生命相・精神相が、お互いに説明し合う状態。「世界」のこと。
最大の説明の輪	形式（時間・空間・論理）と、相（物理相・生命相・精神相）と、様式（現実・存在・実在）が、お互いに説明し合う状態。知性が知り得ることの限界を表す。
知性	自覚していることを自覚する能力。単に意識を持って自己という概念を自覚しているだけではなく、そのこと自体も自覚できる能力。
生命	連続的に自己を維持する現象。物理的な身体のことではなく、個体が代謝で身体を維持し、生殖によって種を維持するような、抽象的な現象のこと。

参考資料・2

自循論とプロセス思考

存在 = プロセス

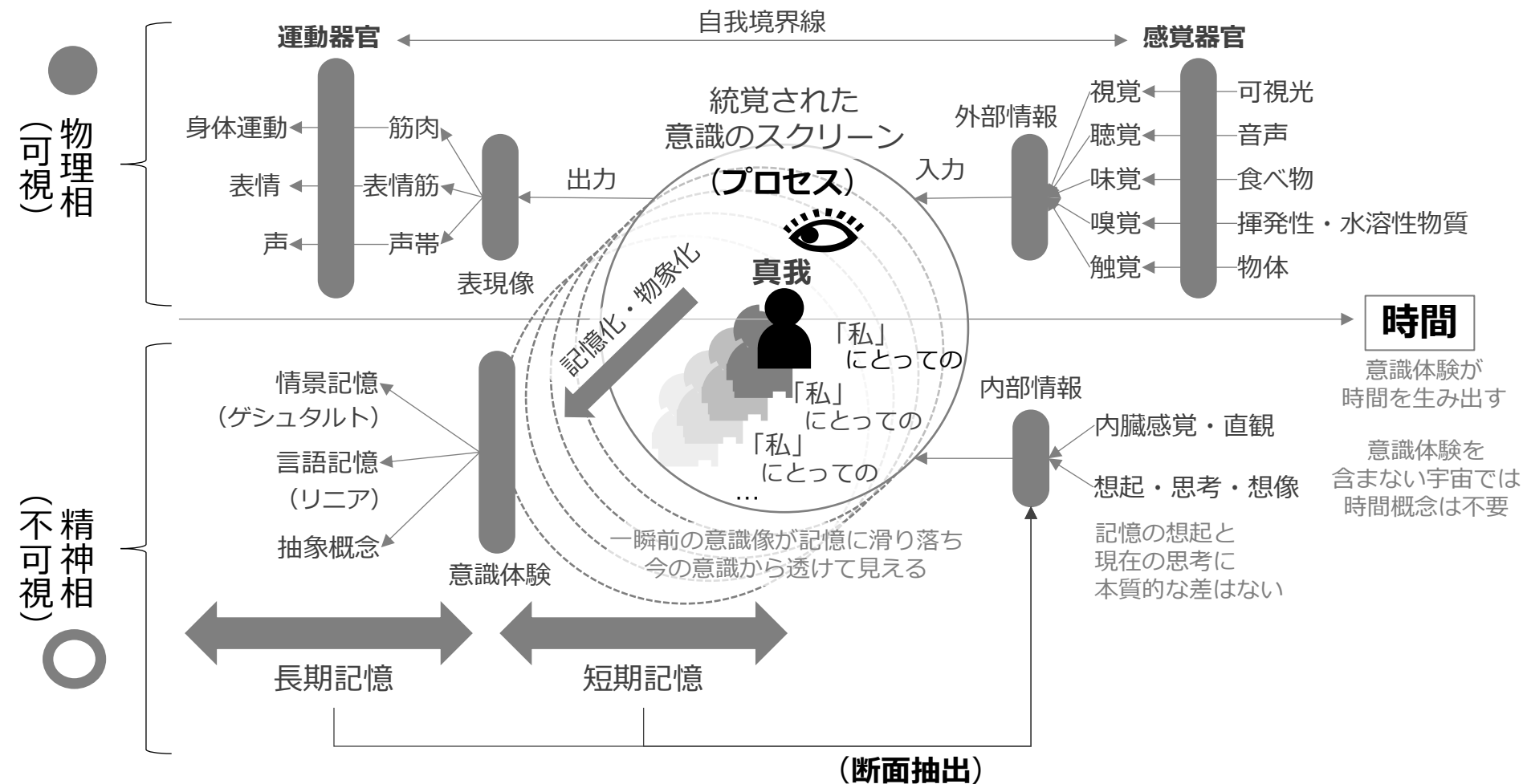
ゴール と プロセス は 不可分



ゴールを持たないプロセスも、プロセスを持たないゴールも、無意味
(どちらかがより根源的 ということではなく、お互いが説明し合う関係)

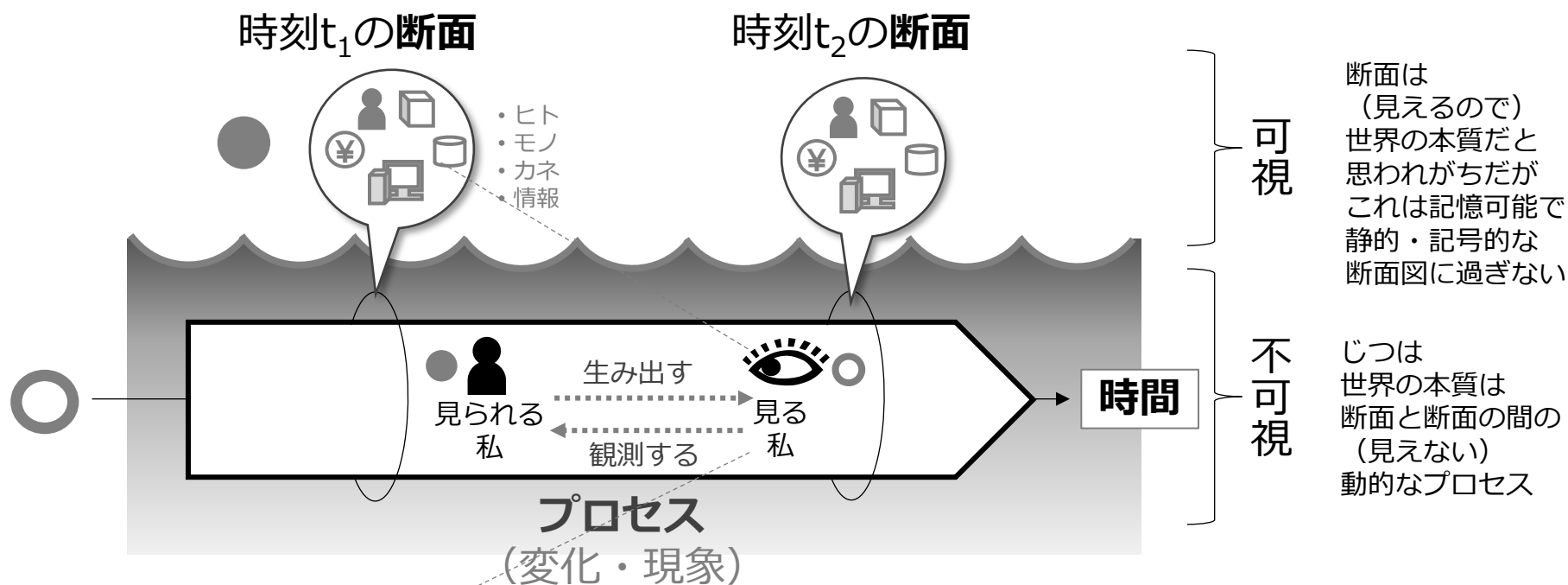
存在 = プロセス

時間は、意識のプロセス から開闢する



存在 = プロセス

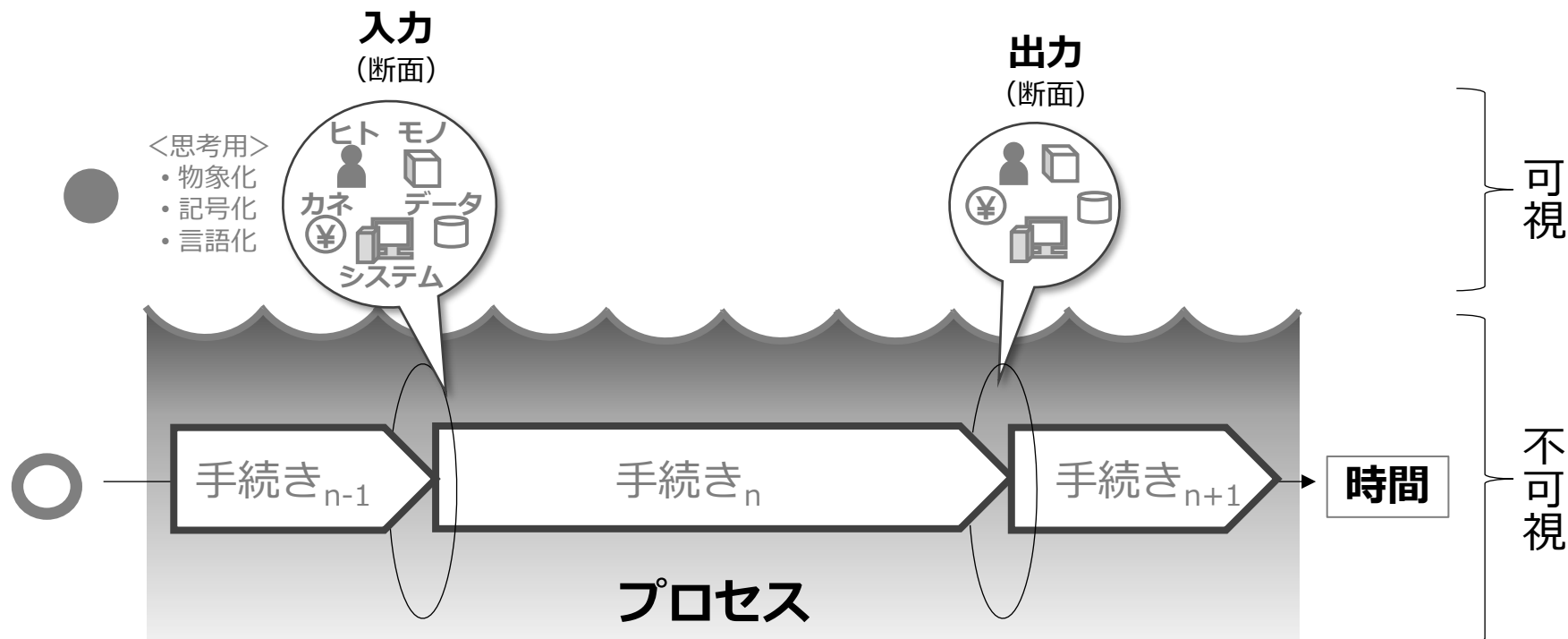
物質 は 変化の断面



- 存在の本質は、静的な断面でなく、断面と断面の間の動的な変化
 - ・ 相対論的説明：対象の位置ではなく、速度
 - ・ 量子論的説明：観測対象ではなく、観測行為

存在 = プロセス

存在とは、存在を存在させる プロセス（現象）



- 入力や出力は 思考用に物象化・記号化された 仮の断面
- 世界の実体は 断面と断面の間にある 継時的なプロセス

自循論 と プロセス思考

私は いつか必ず死ぬ
血脈も 国家も 人類も 地球も 宇宙も
いつか必ず 終わりを迎える

終わる「全体」は、常に無意味
有限の「部分」にスコープを絞り
定めた 目標（ゴール）に向けた
過程（プロセス）を生きる時
今日という一日に 意味が宿る

自循論 と プロセス思考

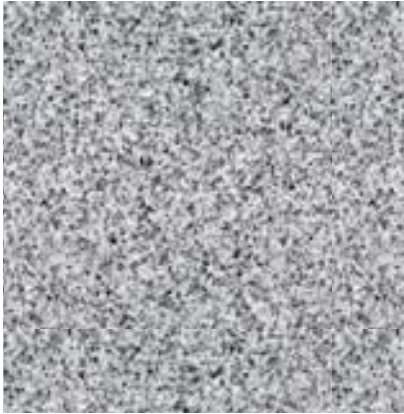
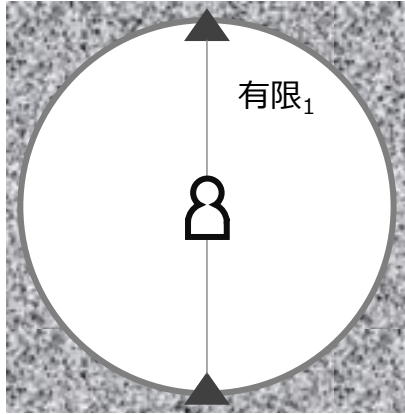
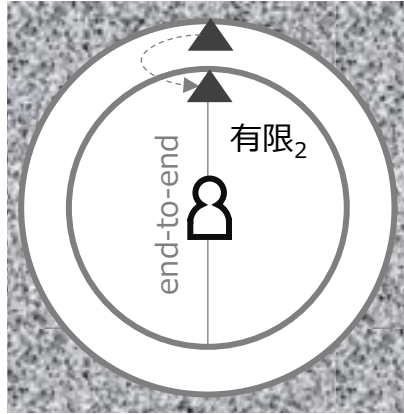
プロセス = 目的に向かう時空内の変化

存在クラス		区分	時空性	目的性	繰り返し	例	プロセス思考
	サイクル cycle	ある	時空的	有目的 (生命性)	あり	・ 日常業務 ・ ルーティン	
	プロジェクト project				なし (1回限り) (唯一)	・ 事業 ・ 人生	
	宇宙 universe			無目的		・ 物理宇宙 ・ 数学的宇宙	
	実在 reality	〈ある〉	非時空的 (不可思)			・ (物自体) ・ (無限乱雑場)	
	無 nothing	〈ない〉				・ (絶対無) ・ (未生の無)	
							自循論

- ・ **プロセス**とは、時空形式内部で価値を生み出す一連の手続きの集合であり、有期のものを**プロジェクト**、無期のものを**サイクル**と呼ぶ。

自循論 と プロセス思考

ゴール に向けた プロセス が 意味を持つ

実在	世界・人生	目標・ゴール	今日・プロセス
無意味	無意味	有意味	有意味
無限	有限 ₁	有限 ₂ ÷ 有限 ₁	有限 ₃ ÷ (有限 ₂ ÷ 有限 ₁)
			
無限は無意味	有限の「全体」は無意味 宇宙も人生も ただ始まって、ただ終わる	有限の「全体」に対する 有限の「部分」は 有限の意味を持つ	ゴールへのプロセス全体と 今日一日のプロセスは 等価
無限乱雑場	知性原理存在論	有限原理	哲学的な一致の定理
非存在	存在	スコープ	タスク

自循論 と プロセス思考

「取り合えずの目標・ゴール」の定義手順

1. 目的の模索

- ・ 自己分析：

- * 自分の価値観・興味、強み・弱み、性格・心理傾向（MBTI等）を理解
- * 自分を最も動機づけること、過去に没頭したこと、一緒にいるとエネルギーが湧く人を意識

- ・ 社会との交流：

- * 成功者との交流からインスピレーションを得る
- * コミュニティ・ワークショップ・セミナーに参加しヒントを得る

2. 目標の定義

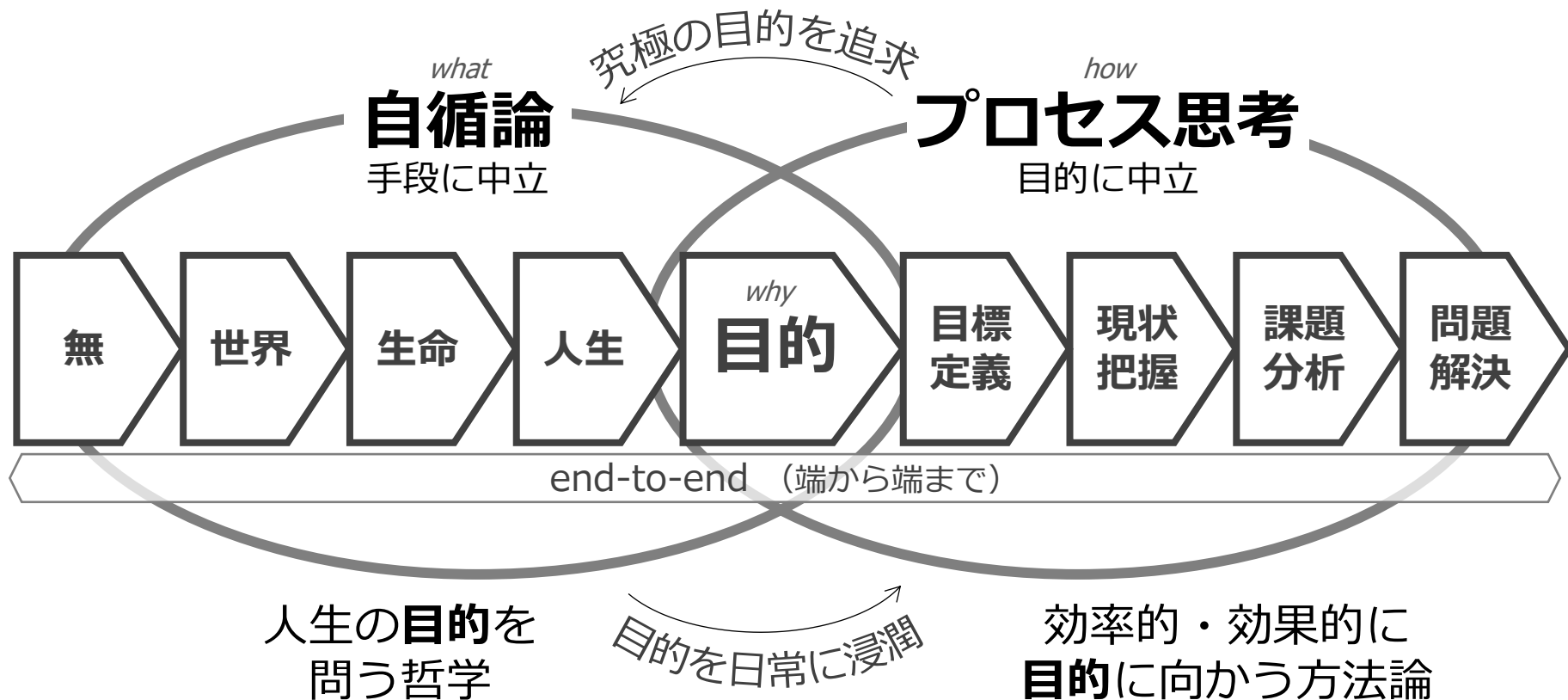
- ・ 「達成基準」と「期限」の両方を明確に定義する

3. 目標へのプロセスの設計

- ・ 小さく産んで大きく育てる、成功体験を積み重ね自信を形成する
- ・ 日常の小さな行動を習慣化する
- ・ 定期的に自己観察・内省（マインドフルネス）・自己評価
- ・ 失敗を恐れず試行錯誤

自循論 と プロセス思考

「なぜ生きるか」と「どう生きるか」



人生の毎瞬の充実が 人生の目的
(ゴールとプロセスの一体性の回復)

すべてはお客様の
「わかった」
「なるほど」
「やってみよう」
のために



本資料の内容の正確性には万全を期しておりますが、その完全性を保証するものではありません。
本資料のご利用により、ご利用者様に不利益があった場合、または、ご利用者様と第三者との間に
トラブルが生じた場合、 当社は一切責任を負いかねますので、予めご了承ください。